三　實在の風光

人生、缺陷多く、現實、悲哀に富む、されど是れ豈に人生の全面、現實の一切ならんや、靜かに其の眞趣を味へば、他の半面に於て之れを圓滿にし之れを慰藉するものゝ存するを看取し難からず。單に缺陷と悲哀との一面を見て喪心落膽し、塵俗、吾を累すとなすものは未だ眞に人生を洞察し現實を理解せるものといふべからず。其の暗黑面（ダークサイト）を見れば涙の谷なり苦の海なり。秋風落寞、四顧寂寥、蜉蝣に似たる生は逼迫せられ、毒蛇に等しき死の手は常に頭上を去らず、人は唯だ利を事とし、世は長へに修羅の巷に似たれど、其の裏面には人々相和して溫情薄くが如く個々業を盡くして然かも相侵さず春風駘蕩花笑ひ鳥謳ふの光明面（ブライイザイト）あるにあらずや。悲喜相對し、苦樂相待ち、生死も亦相依るもの之れ人生の現實なり。歡樂極つて哀情多きは月滿ちて虧くるが如く花開いて散るにも似たる一面の事實なれど、哀情極つて尙ほ一道の安の境あるは霜雪の下に春艸の茁々たるに等しき一面の現象ならずや。

宇宙の大を以て我が小をいふ、小は小なりと雖も、此の小なるもの亦彼の大なるものを離れず、天地の悠久を以て我が生の短きを咄つ、短は短なりと雖も、此の短なるもの亦繫つて彼の悠久なるものと結ぶにあらずや。暫く宇宙の根本、天地の實在に向て其の風光を看取せしめよ。

精緻周到の眼を以て天地の事物を觀察し、宇宙の現象を徹見す、森羅萬象、個々其の相を異にし、物々其の狀を同うせず、乾坤又一の同形同體のものあるなし。一葉頭上萬顆の露、露さま〴〵の趣あり、

よしの山霞の奥はいかならん
見ゆる限りは櫻なりけり。

春山一抹の雲、仔細に點檢すれば、花々其の態を異にす、哲學者の叫んで個別の理（◎）といひ、獨立の義（◎）とする者これなり。之れを人に見る、人々其の面貌姿態を異にし個々其の性情を同うせず、甲の好む所、必らずしも乙の好む所にあらず、丙の易しとする所、必らずしも丁の易しとする所にあらず、戊己庚辛亦各々異るものあるは略ぼ上來說述する所の如し、個別の理や疑ふべ

からず。

更に時間的に其の存在を計らんか、宇宙萬象又一として變易せざるものあるなし、滿つる月に虧くることあり、咲く花に散る時あるが如く、期に長短あり、時に遲速の別あれど

變易の相

　　崩え出るも枯るゝも同じ野邊の草

　　いつかは秋に過はで果つべき、

人に千年の壽なくして、地に萬年の榮えなし、長へに動かぬ姿と立てられし山容も、萬古變せずと見られし水態も、悉く變易の運に過はざるはなく、進みては吾等が住める地球も、これに光熱を分與する太陽も、皆な此の變易渦中のものたり。無常の風に誘はれ生死の巷にさまよふもの何ぞ唯だ人のみに限らんや。

宇宙の萬象は空間的には個々差別にして、時間的には物々變化の相を具す。これ一應の觀察なり、皮相上の洞見のみ。更に銳利の眼光を以て此の異中に同を求め、變易の中に不變あるを見んか、驚くべし、曾て差別と見たりし個

個の異相は皆なこれ同一體にして、先きに變易と見たる物々起滅の狀は唯だこれ不變海上の萬波千波に過ぎざりしなり。一目千本の櫻花、花々何の異る所かある、崩ゆるといひ枯るると見たる野邊の草、千秋何の時か盡くるの期あるべき。異別と見たるは假相の上のみ、變易と見たるは現象のことのみ、人人其の面貌と性情を異にす。しかも其の人たるや異なるなく、羽毛鱗介の族、其の動物たるに於て人と相同じく、巖角に倚る老松も、道の邊に咲く野菊も、其の生物たるに於て人と其の質を共にす、若し夫れ其の原質に遡りて之れを探らんか、土石と人と何の異る所ぞ、同じくこれ元素の抱合にして等しく皆な實在面上の假相たるを見ずんばあらず天地は同根にして萬物は一體たり玉陽明いふ。

天地萬物は人と原是れ一體なり、其の發覈の最も精なる處、これ人心一點の靈明なり。風雨露雪、日月星辰、禽獸草木、山川土石、そも只だ一體なり、故に五穀禽獸の類は皆な以て人を養ふべく、藥石の類は皆な以て病を療すべし。只此の一氣を同うするが爲の故に能く相通ずるのみ。

◎實在の風光

と、中江藤樹はいふ、

萬の物は皆な大本より生ずれば四海の人悉く連れる枝なり

と、これ唯だ吾等が架空の思索に止らず、實驗科學は之れを證明して餘りあり、彼の詩人ゲーテの「動植物は其の起原を共にし、漸次發達して一は高等植物となり、他は動物となりて終に人類の如き高等のものに達せり」といへるを以て想像上のことゝ思ひしは昔の夢にして、近世科學の精髓たる進化論は人類の祖を推して動物に至り、其の動物の祖を推しては終に動植物共同の祖たる單細胞に至らざるを得ず、此の單細胞を組成するの元素は無生物と異るものにあらざるを發見し源に遡り本を尋ねては混沌微細の一物の普く萬有に渉るものあるに達せざるを得ず。而して那箇の一物不生不滅、思索の推す所、實驗の證する所、吾等は空間的に萬物一體の理を否認する能はざると共に又時間的に不變の本質あるを拒絶する能はず。哲學者フィヒテはいふ「天地萬物は無始無終の聯關相續にして永劫に亘りて斷ゆることなし」と、科學の根據より宇宙を見たるヘッケルはいふ、

一　宇宙は永劫的にして無窮無限なり

二　其の本質は物質と勢力との二屬性を有し無限の空間を塡充し、永劫の運動を爲す、

三　此の運動は無限の時間に亘りて渾一的の發展を爲し、其の間死生消長の周期的變化あり、

と、生といひ死といふも本體に於て何の變化あるにあらず、渾然たる宇宙、往古來今一物を增さず一物を減せず、然かも其の增減なき本體の上に增減の相を現じ、生死なき實在の上に生死の變を示し、平等一如の理上に個々差別の象を具す、一は即ち多にして、多は即ち一、變化の當相の奥には不變の本體あり不變の本體の表には變化の當相あり、無一物の處、無盡藏、花あり月あり樓臺あるもの眞に宇宙の妙趣たり。此の妙趣を看取して我が微小の身を見る、小なりといへども、宇宙と其の體を共にし、短なりといへども、天地と其の命を一にす、予曾て平易に此の理を說明していふ。

◎理想と現實

吾等の身體は時間的にも空間的にも有限なものであるが、此の有限なる身

體は決して宇宙の外にあるのではない。上下四方を宇といひ、往古來今を宙といふで、此の宇宙といふものは時間的にも空間的にも無限なものである。既に無限であるから絶對全一で、相對差別のものではない。相對差別のものではないが、又相對差別のものを容るゝことの出來ない不完全不自由のものではない、されば此の宇宙も吾等とは全く關係のないものではなくて、微小なりといへども、吾等も此の宇宙の一部分である。一部分を缺けば宇宙を以て完全なるものといふことは出來ない。吾等の存否は直に宇宙の完不完に影響するのである。吾等と宇宙との關係は水と波との如きものである。波には生滅の相あれども、其の本體たる水は不生不滅である、しかも此の水を離れて波なく、此の波を離れて水なし。波たる現象は即、水たる實在である。其の波には怒濤あり、狂瀾あり、細漣あり、小波あり、或るものは山の如くに動き、或るものは水沫の泡と消え、千狀萬態異種多樣であるが、其の水たる上より見れば悉くこれ平等一如、別に異りはないのである。宇宙の現象も亦又此の如く、千狀萬態異種多樣一として同じきものはないが、其の本體より言へば一つとして異るものはない。我といへば乾坤只一人で、外に同じきものは一つもないが、人といへば地球上十五億萬、皆なこれ同一の人である。我であるから人一の人にして別個の我、別個の我にして同といふことはない。これ唯だ人の上に就ていふのみではない。更らに此の考察を廣めて動物といひ生物といふに至ては、天地同樣宇宙一體我と物と何の異る所はない。試に眼前の茶碗を見よ、茶碗と我とは何の似る所もないやうであるが、此の茶碗の體はこれ土、我は土に養はれたる米を食ひて生存す、されば米は我が母にして土は米の母たり。これこの茶碗我が祖母たる土によつて作らる。然らばこれ我れと最も近き親戚の關係を有するのではあるまいか。哲學者は之れを名けて萬物一體の理といふ、萬物は曾に其の體に於て同一なるのみならず、其の用に於て相互に密接不離の關係を持つて居るのである。我が此の書を稿するの筆は此の書とは密接の關係あることはいふまでもない、既に此の書と密接の關係あれば此の書

の讀者とは亦不離の關係があるのである。假りに此の筆を以て兎毛に成れりとせば、然らば野山に遊ぶ兎と此の書の讀者とは亦不離の關係があるのではないか、此の兎は草を餌にす、此の草は太陽の光と地の土とによつて養はる、此の太陽の光と其の地の土とはと、次ぎから次ぎへ考察して行けば、宇宙萬物が互に密接不離の關係を會得することが出來る、更らに我が身に直接なるものに就て考へよ、衣も食も住も他人の力に由り、自然の助を受く、我を主として考へば、萬象は悉く我に向つて働く如くに感ずることが出來る、これを萬物相關の理といふ。萬物互に密接不離の關係あり、されば我が一擧一動は直に宇宙全體に影響する大事業ではないが、能く此の理を了解する時は我が身の微小なるを慨くの要はないのである、微小なりと雖も、我は天地の一員にして宇宙の一部たり、しかも其の一擧一動は直に全宇宙に影響し、其の存否は直に宇宙の完不完に關するのである。曾ては我が身の微小なるを嘆じたる吾等も學理の此の說明によつて此の身の偉大なるを感ずるのである。（求道の精神）

即ち吾等は初めに宇宙の現象を看取して、

一　空間的に個々別々たり、
二　時間的に變化生滅あり、

と知り、其の本體を探りて

三　空間的に平等一如なり、
四　時間的に不變永劫なり、

と感じ、更らに此の現象と本體とが別個の存在にあらずして現象即本體たるを見、

五　空間的に微小なる吾等も直に無限の宇宙に影響し、
　　時間的に變化ある吾等も直に悠久なる天地に繋りて其の連鎖たり、
六　而して個々の事物は相互に關係して渾然一體を爲す、
七　而して個々の事物は相互に關係して渾然一體を爲す、

を悟得したらんには、曾て其の暗黒面（ダークサイド）のみを見て悲觀したりし吾等も此に一道の光明を見出すにあらずや。殊に況んや、此の宇宙は秩序整然として一糸

◎實在の風光

を素さず、自然の大法は嚴として一點の私なし、至公至平、各其の守る所を守りて毫も相侵さず、火は必らず焼き、水は必ず濕し、地は堅固、風は動搖、千歳の翠を湛ふるの巨松は老龍の蟠屈するが如く、雲を凌ぐの古杉は直立傑士の風あり、柳綠花紅、山高水長。皆おのづからなる姿ありて、しかも各〻其の性を操持し、其の相融するに至てや、

一性圓かに一切の性に通じ、一法偏く一切の法を含み、一月普く一切の水に現じて、一切の水月一月に攝す、

（永嘉大師）

相即相入無盡に影響して調和融合の趣を示し。

十方衆生是れ我が一個身、十方大地是れ我が一個漢

（宏智禪師）

たり。妙と云はんか、未だ盡くさず、幽と云はんか未だ中らず、靈と云はんか、未だ足らざるを覺え、玄と云はんか未だ得ざるに近し、理智を推しても尙ほ其の靈妙に驚歎せざるを得ず、之れに施すに情感の色彩を以てせんか、吾等は實に幽玄なる宇宙の懷に抱かれつゝあるなり、宗教家の目して久遠の佛陀といひ、全能の神といふものも亦暫く此の言語不到の風光に命名したる

に外ならじ、冷やかなる理眼に映じても、自然の法則が徹に入り細を悉くし、普く行はれ、廣く通じて誤ることなきは何人も少しく心を止めて諦觀したらんには肯ひ難きことにあらず。されば實驗以外に何等の眞理なしと公言する科學者も「學ぶこと益々深くして宇宙の意匠の益〻密なるを證明せずんばあらず」と云はざることを得ず。羅馬のセヂカは

假令宇宙の德に何等の敬意を捧げずとも、其の千萬無量の光明を見、又其の行程と變化とを見んか、何人が驚異と崇敬とを以て天を仰がざらん。

と、溫き情致を以て見ばウォルヅウオルスが

極めて微かなる花にも、涙に餘る幽遠の思想を與へざるものなし

といへるが如き美はしき意義を認めざるを得ず。東坡が

溪聲便是廣長舌、山色無非清淨身

といへるも亦詩人特殊の視察にあらずして、露伴が「天うつ浪」に、

山河、下に布ける此の天地の大にして大なるをおもひ、萬年萬々年の前に、萬年萬々年あり、萬年萬々年の後に萬年萬々年ある此の歳月の久しくして

◎理想と現實

久しきを思ひ、さて此の天地の立てる所以をおもひ、歳月の經る所以を思ひて、此の天地と歳月との存在を、たゞ〳〵無意義なる事實のみと認めなば誰かは咏氣無き感に撲たれて悲み傷まざらん、されど此の天地と歳月との存在の眞に無意義の事實のみならで、其中に意義あるなりと認むる時は、誰かは乳房を探り得たる嬰兒の如く無限の喜悦に胸を躍らさゞらん、意義あり、意義あり、無意義ならず、神の御心即ち意義なり、佛の御心即ち意義なり、化醇の大法はこゝにあるなり、歸善の定數はこゝにあるなり、大慈の光明は柔かに山村水鄉を包めるなり、大慈の音樂は斷ゆる間もなく、古往今來に亘れるなり、我は此の温厚き意義の中より生れたる子なり、神の子なり、佛の子なり、正眞の子なり。我と神佛とは血の相通へるなりと、如是思ふ時、おのづと悦ばしからばとあるはこれ吾等の論議を美はしく云ひ現はせるものたり。實在の風光を看取して此に至る。吾等抑も何の不安があるべき。吾等の宗教はこゝに在り。

四　宇宙の大道

宇宙の萬象個々同じからざるは何人も看取する所にして、其の本體の歸一すべきも亦多く疑ふものを見ざれど、其の歸一の根底を物質に取るものと精神に置く者との差は唯物唯心の二論となりて各〻見解を異にせしが、兩者共に全楯の一面を見たるのみにして未だ其眞趣を穿てるにあらず。兩者を兼ねんとしたる物心二元の論は頗る便宜なるが如しと雖も、物心合一の本相に違却せるが故に、思索の進歩は之れを許さず。近世に至てはスピノザの汎神的一元論となり、バアクレー、ヒユームの觀念論となり、ラメトリー、ホルバッヒの唯物論となり、フイヒテの主觀的唯心論となり、シエリングの客觀的唯心論となり、ヘーゲルの絶對的理想論となり。一元的傾向は終に物心の二元を包含して洩さゞる渾一の實在を見ることに努め、其の本位とする所の物質にあるもの（ヘッケルの如き）、精神にあるもの（バウルゼンの如き）の差ありと雖も、要は宇宙の本體を以て全一なりとせざるはなく、其の活動を論

するに於ても唯物的傾向の論者はこれを機械的のものなりとして、何等意匠の其間に伏在するにあらず。宇宙は無目的に動き必然に働くとし、唯心論的傾向を有するは論者は、無意識的盲目的なる活動と見ずして、目的あり意義ある活動なりとす、前者は之れを機械論（メカニズム）といひ、後者は之を目的論（テオロギー）と呼ぶ、此二者は往古に於ては相反するものとして觀察し來りしが、其の究竟目的の所在に於ては此の二者必ずしも調和せられざるにあらず。蓋し宇宙の究竟目的を論ずるものに二種あり。一は超絶的目的論にして、こは宇宙以外に宇宙の支配者即ち神なるものありて其の意匠によりて活動するものとし、萬物を以て神の意匠に成り、天地を以て神の攝理に出づとす、されど此の論は合理的の思索と相容れず。吾等は既に宇宙の無限にして絶對たることを見たり、宇宙既に無限なりとせば神抑も那邊に在る。宇宙の外にありといへば宇宙は絶對なる能はず、神は宇宙に制限せられて全能なる能はず、絶對なる能はずとすれば宇宙の義に反し全能なる能はずとすれば神の義に背く、超絶的目的論は終に何等の論據を得る能はず、此の超絶的目的論に反して宇宙内に神あり、宇宙其自身に目的ありとするものを内存的目的論とす、内存的目的論は自然は即ち神なりとし宇宙即神の説を立つ、超絶的目的論は一神教徒の喜ぶ所にして内存的目的論は汎神教徒の贊する所たり。機械論と調和し得べきは此の内存的目的論の見地たり。拙著「宇宙論」にいふ所を繰返さしめよ。

機械論と目的論　超絶的目的論　内存的目的論　宇宙論

「宇宙論」

これを客觀的にいへば自然現象は悉く一定の法則に從ひ、機械的に活動し、て何等の目的なきが如しといへども、主觀的に視察せんか、一草一木も亦目的なしに成立したりとは爲す能はず、植物は機械的に發育し生長すべし。然れども吾人は之を以て全く無意味なりとは解する能はず、吾人は生れて而して死す。其の間一日も自然の機械的法則を無視する能はず、然れども吾人は如何に思考するとも吾人の一生を以て生より無意義に死に達する機械木人の如きものなりとは解する能はず。吾人の生活は一切自然の法則に支配せられ、同一原因は同一の結果を生じ、全然機械的活動あるべきも、吾人は吾人の生存を以て無意味なり因より果を生じ、果は因となり、因は

◉宇宙の大道

果となるのみにして何等の究竟目的なしとは爲す能はざるなり、即ち或る目的に達せんが爲めに活動しつゝありと思惟せずんば止む能はざるなり、路を行く人を以て唯だ機械的に前足と後足とを交替せしめつゝありとは吾人の思惟せんと欲して能はざる所にして、其の必らず達せんとする目的地あるを豫想するは人心自然の趨勢にあらずや。吾人は實に其の一生を因果の無意義なる相續を以ての活動なりとは思惟する能はざるなり。これ豈に僅に吾人人生に於てのみいふものならんや、廣く萬有相互の關係を視察せよ。まことにフォン、バエールのいへる如く、動物は植物なくんば生存する能はず、植物は又土壤によらずんば生存する能はず。而して其の土壤も亦しばゝ雨になりて濕潤せられざるべからず、而して其の雨は水の水蒸氣となりて上騰し更らに寒冷の空氣に遇ひて凝結したるに外ならず、而して此の水の水蒸氣となるには太陽の熱を要するものなれば一莖の草といへども、其の實太陽系の排星運動に由るにあらずんば存在する能はず。全宇宙は此の如く齊整せられ調和せられつゝあるなり。これを如何ぞ偶然の結

果なりと思考し得んや、イムマミエル、カントは「有機體の組織を理會するには目的の觀念を離るべからず」といひて、すべての有機體が自己の中に或る目的を有することをいひぬ、宇宙は尤然たる有機體なり、吾人の一隻の眼も、一肢の手も、これを組織せり各部分は全體をして其の目的を遂げしむるが爲めに綜合したるに外ならずして、其の眼や手も亦其の全部身體の目的の爲めに動く身體にあらずや……

吾等と宇宙とは全と分との關係なり、分たる吾等の行動はこれ悉く全たる宇宙の目的に順從せんとするにはあらざるか、吾等が第一篇第四章に於て論じたる自由意志と必然の理法との見解は移して以て此の論の說明に充つべし。吾等は必然の理法に縛らるゝと雖も、尙ほ永へに自由意志の伏するあるが如く、宇宙の活動は機械的なるべきも其の裏面に究竟目的の存するは吾等が思索の然らざるを得ざる所たり。されど其の究竟目的の如何なるものなるやは事、吾等が經驗以外に亘るが故に之れを追尋するに難しといへども、僅かに示されたる經驗の範圍を以て之れを見るも、單より複に、粗より細に、進化の大

◉理想と現實

宇宙の理想

道を辿りて歩みつゝあるや疑ふべからず。殊に人文發展の徑路を回顧せんか、時に興廢隆朽の跡なきにあらざりしも、大體に於て其の智識は進歩し、其の趣味は發達し、其の道念は向上して、歩々眞善美に近づきつゝあるは歴史の實證に照して否むべからず。人は宇宙の最も進歩せるものなり。人の理想はこれ最も宇宙の目的に近きものにあらずや。否な吾等は此の理想を以て宇宙と脈絡貫通せり本然の要求とし天の命なり神の心なり佛の性なりと思惟し、此の性に率ふて宇宙の大道を顯現するを以て人類の本務なりと信ず、見よ、宇宙萬象の個々分立して各々其の守る所を守るは吾等に正義の守るべきを示すものにあらずや。其の同一調和して圓融無碍なるは吾等に仁愛の美徳を教ゆるものにあらずや、誠は天の道なり、之れを誠にするは人の道なり。道豈に遠きにあらむや。大道脚下に横はり、靈光心裏に宿る、永嘉大師はいふ、

至道無難、唯嫌揀擇、但莫憎愛、洞然明白、毫釐有差、天地懸隔。

と、洞然明白たる宇宙の大道、老子は之れを、

道の物たる唯恍唯惚、恍たり惚たり、其の中、象あり、恍たり惚たり、其の中、物あり、窈たり冥たり、其の中、精あり、其の精甚だ眞、古より今に及ぶ

老子

道とは何ぞ

といひ約翰傳に

太初に道(ことば)ある、道は神と偕にあり、道は即ち神なり、この道は太初に神と偕にありき。萬物は之れによりて造らる、造られたるものは一として之れに由らで造られしはなし。

ロゴス

と、いへる道即ちロゴスなるものも亦大道を指すに外ならじ、佛教は梵語の菩提(Bodhi)を譯するに此の語を以てし無上正等覺又は無上正偏智ともいひて性體周遍、妙用無碍なる宇宙の靈光とし、これを感得して自己と一致するを以て佛陀と名く、教に深淺、説に高下の別ありといへども、宇宙の本體、自然の妙用を指すに至ては多く異るを見ず、既にこれ宇宙の大體自然の妙用なり。眼前耳後、何の處か道ならざるべき。昔、僧あり、趙州に問ふ、道何の所にかある、州曰く墻外底と、墻外に道あるは其僧も亦之れを知る、故に曰く那個の道を問はず、州いふ、那個の道をか問ふ、僧曰く大道、州いふ、

菩提

平常心是道

◎宇宙の大道

大道長安に通ずと、大道坦々、長安の帝都に通ず。言ひ得て妙なるにあらずや。別時、僧あり、又趙州に問ふ、如何なるか是れ道と、州いふ、平常心是れ道、此の語、喝破し得て痛快、脚痕下を離れて何の處に道あり、平常心を離れて焉ぞ道を求むべけん。

はりつたふ鼠の道も道なれど

まことの道ぞ人のゆく道　（行誡上人）

至誠以て宇宙の歸趣を諦觀し、至誠以て天地の妙用に隨順す、これ吾等が道を求むるの筌蹄にして道を行ふの要義たり。

圓寂、外には求むまじ、我等が眼の前にあり。

佛身、遠くましまさず、衆生本有の悟なり。

とあるもの是れ。吾等は此の根底によりて人生の本務を演繹し來らざるべからず。

五　人生の本務

宇宙は調和の理法によりて無盡に圓滿に組成せらる。人は此渾融せられ、社會は共同の生活によりて成せられたる宇宙の一部分にして圓滿せられたる社會の一員たり、まことや社會は個人によりて成るも個人の生存は社會によりて初めて完備せらるゝものなれば、如何に獨立獨歩、他の補助を仰がずといふものも、孤立しては其の生命をだに維持する能はじ。其の衣する所のものも、其の食ふ所のものも、其の住む所のものも、皆な他の力に賴らざるべからざるにあらずや。汝の手にする所の箸は之れ汝の造りたるものなるか。汝の足に穿つ所の靴は之れ汝の造りたるものなるか。自らすること難し、よし茲に技巧の人ありて其の一は敢てすといふとも、其の材、其の料は之れ他によりて得、其の敢てすといふ方法は亦他によりて學びたるにあらざるか、人は畢竟社會を離れて生存する能はず、既に社會を離れて生存する能はず、吾等は實に共同生活の惠みに浴して漸く其の露命を繋

◎理想と現實

ぐに外ならじ。然らば吾等も亦此の共同生活に向つて何等か貢献する所あつて他を利し人を益するの行なかるべからざるは當に然かあるべきの數にあらずや、自ら他より利益を享受して、何等他に施す所なくんば、共同の理に背き、調和の律に反す。調和といひ共同といふものは自は他を助け他は自を補ひ初めて成立すべし、由來道德の根底は人と人との調和を企て此の共同生活を圓滿にするにあり、儒教の仁を以て道本とし、基督の愛を以て教源とし、佛教の慈悲を以て傳道の主眼とする、其の名異りと雖も、其の實は一にして基く所は宇宙の大道にありて、古聖先賢敢て其の見を異にせざる人道の本義此に在り。

人と人との調和

仁

人道の本義

此の利他を教ゆるに二方面あり、一は積極的に他を利するの行動にして、他は消極的に他に不利なる行爲を敢てせざるにあり。他に不利なるとを行はざるは自ら操持する所堅く、非を防ぎ惡を止め、規律を嚴守して犯さざるの謂にして、他を利するの行爲とは博愛、慈悲、親和、協力、常に同情の念を以て他に接し一擧一動、人を益せんとを計るにあり。其の積極的なるものを布施といひ、消極的なるものを持戒と名く、太陽の赫々として光熱を吾等に施し、水の潺々として濕潤を吾等に與ふるは布施にして、柳綠花紅、各〻其の守る所を持して相犯さゞるものは持戒の相たり。吾等も亦積極的に相助け、消極的に相犯さずして社會の共同生活に貢献する所なかるべからず、これ宇宙の理法社會の當相より來る人生の本務なり。

此無盡に行はるゝ調和の理法此の無限に現はるゝ共同生活の實は空間的に行はるゝのみならず又時間的にも不斷に行はれ無窮に現はる。汝が今日是の如くにして存在し得るの共同生活の惠に存するは既に之を云へり。されど唯だこれのみが汝を幸するにあらず、實に汝の今日あるは汝が祖先が汝に遺せる恩德にあらずや。人の世に在る僅に百歳に足らずと雖も、此の百歳に足らざる人々が諸種に企畫し、諸種に施設したる文明の惠澤は子孫より子孫に受け來りて以て今日の盛を致す。吾等の今日の生活は前代人類の苦心焦慮の結果たるや疑ふべからず。然らば吾等も亦此の社會を今一層完全に、今一層善美にして之れを吾等に續く後代に引き渡すべき責あるにあらずや、進歩は宇

祖先の恩澤

宙の徑路にして向上は人類の理想なり。歩々、進歩の徑路を辿り、着々向上の理想を實現するは吾等が正に爲すべき當然の任務たり、予しばく左の譬喩を以て人生を説明す。事、陳腐にして理や明晰。

人生猶ほ旅客の如きか、夕に宿して朝に出づ、五十年の夢、忽ち覺むれば、身は已に他境の客となる。光陰はまことに百代の過客にして、人生は逆旅の如し。

いづくをも定めなき世と知りぬれば
家をもたびの心地こそすれ。

既にこれ前代より後代に達する一旅舍、吾等の社會は吾等の宿舍たり。其の共同生活を助け、進歩向上を計るものは此の宿舍に拂ふの賃錢にあらざらんや。若し夫れ此の社會に生息して何の爲すなく、此の宿舍に泊し、何の貢献するなくんば、これ則ち無錢飲食の徒のみ。（人生觀の一節）

吾等は空間的に博愛仁慈ならざるべからざると共に、又時間的に勇猛精進ならざるべからざるの所由茲に存す。日々、日は東より出でゝ怠ることなく、夜々、月は西に沈みて倦むことなし。斷ゆることなき水の力の能く石を穿つが如く、吾等が不斷の努力、豈に又天地の化育を助くるに足らざらんや。

かくて社會の共同生活を助け其の進歩發達を計る所に人の人たるの道あり。以て宇宙の大道を體現す、此理を等閑にしては人生の眞義終に解すべからず、吾等抑も何の爲めに生く、生きんが爲めに生くるとも死するの時あり。必然來るべき死を豫想しつゝ、而かも生きんが爲めといふ、これ無意義なり、吾等は生きんが爲めに生くるにあらずして、道を行はんが爲めに生くるなり、道にして行ひ得べくんば車夫馬丁と雖も、我、喜んで之れを爲さん、道にして行ひ能はずんば高位大官と雖も、我に於て何かあらん。人は一個の小天地なり、以て天地の化育を實行すべし、人は一個の小宇宙なり、以て宇宙の大道を體現すべし。生死もと關する所にあらず。況んや利害得喪をや。生きて以て道を行ふべくんば我即ち生きん、死して以て道を行ふべくんば我即ち死せん。よし事、志と違ひ、道未だ行ふ能はずして斃るゝとも、吾、我が世に居れるの間盡くすべきを盡くし爲すべきを爲す、何の恨む所かあらん、吾等

は此に安意の境地を得、此に勇奮の趣味を感ず。

勇に二種あり、積極的に發奮向上するを精進といひ、消極的に堅忍不拔なるを忍辱と爲す、池塘の能く水を貯ふるが如く忍は能く勇を貯ふ。唯だ進むを知つて守るを知らざるものは眞の勇にあらず。眞勇は此の二を兼ねざるべからす。而して先きにいふ所の仁、今いふ所の勇共に、其の爲すべきを爲し爲すべからざるを分ち、守るべきと守るべからざるとを知る之れ沈重なる思慮と明敏なる觀察とに待たざるべからず、沈重なる思慮は智の消極的方面にして、明敏なる觀察は其の積極的方面なり。前なるものを禪定といひ、後なるものを智慧といふは佛家が常套の分類にして、仁と勇とに此の智を加へて三德と爲すは古來東洋に慣用し來れる道義の根底たり、之れを人心の三方面に配すれば、智は智、仁は情、勇は意にして此の三は實に道を行ふの要具なり。

三德
- 智（智）
  - 積極（智慧）……明敏なる觀察
  - 消極（禪定）……沈重なる思慮
- 仁（情）
  - 積極（布施）……博愛仁慈
  - 消極（持戒）……規律の遵守
- 勇（意）
  - 積極（精進）……勇奮向上
  - 消極（忍辱）……堅忍不拔

而して此の明敏なる觀察を妨ぐるものは迷妄愚痴の見解なり、此の沈重なる思慮を妨ぐるものは動搖散亂の心なり、此の博愛仁慈を妨ぐるものは慳貪我欲の心なり、此の勇奮向上を妨ぐるものは懈怠の心にして、此の堅忍不拔を妨ぐるものは瞋恚の心なり。蓋し愚痴と散亂とは痴に基き、慳貪と破戒とは貪に出で、懈怠と瞋恚とは瞋に發す、此の三は三德の明を蔽ふの妄雲にして本務遂行の前程に横はる毒蛇たり。之れあるが爲めに遲疑し、之れあるが爲めに懊惱す、此の三毒を打破して共同生活の美を發揮し、進歩發展の實を擧げしむるもの實に道義の

◉人生の本務

根底たり。

「士苟得ㇾ正而斃。　何必明哲保ㇾ身。　不ㇾ能ニ見ㇾ幾而作一。
猶當ニ殺身成ㇾ仁。　道並行而不ㇾ悖。　百世以俟ニ聖人一」

（吉田松陰）

蒼々の中に何ト　なしにおそるべきの道あるを知りて常々に身をつゝしみて法を守りて天命に違はざるやうにするこれを天を畏れるといふ

（伊東東遷）」

第二章　國民道德

一　東西道德の比較

道義の根底は萬古不易にして宇宙の大道は素と方所を絶つと雖も、個人は社會を離るゝ能はず、社會は又個人を離るゝ能はざること上來縷述する如きが故に、其の共同生活の美を發揮するに於ても、社會狀態の異同は直に道德に關係し、甲の社會に於て可とするもの直に乙の社會に應用すべからず、君主專制治下の道義は直に移して共和政體の國家に充つる能はず、其の進步發達を計るに於ても、時代の推移は直に道德に影響して、丙の時代に於て賞すべきもの、必らずしも丁の時代に賞すべきものにあらず、野蠻時代の剛健主義如何に可なりとも何の變ずることなくして之れを今日の文明時代に適用する能はず。所謂の歸趣は個人を滿足せしむると共に社會を滿足せしめ、社會を發展せしむると共に個人を發展せしめて步々理想の實現に向ふべきなれど、

◉國民道德

階級的

國、異にして制度同じからず、時、異にして習俗一ならず、右よりするものあり、左よりするものあり、風土に支配せられ歷史に左右せらる。曩く東西兩洋の道德を大觀するに、東なるものは差別的階級的にして、君臣義あり、父子親あり、長幼序あり、夫婦別あり、名を立て敬を行ひ、上下の別を判然にし、上は慈、下は順なるべしとする鉛垂線的なる縱の道德を主眼とし、忠臣、孝子、貞婦を以て其の模範とするに反し、西なるものは平等的無階級的にして、人類等しく神の奴婢たり、同等の權利を有す。君といひ臣といひ、父といひ子といひ、兄といひ弟といひ、夫といひ婦といふ假りの世の假りの區別に過ぎずとし唯だ愛を以て普遍の道とし、水平線的なる橫の道德を要とし、民權擴張、自由鼓吹の志士を以て龜鑑とす。されば前者は服從の精神に富むも、因循の風を脫せず、後者は獨立の氣象に富むも、從順の美を欠く、一は義務本位にして他は權利本位なり。義務本位なる道德には正義の觀念薄くして、權利本位なる道德には忠孝の思想疎なり。

我に自由を與へよ　然らずんば死を與へよ　と絶叫したるパトリック、ヘンリーの聲は西洋思想の權化にして、

臣敢て股肱の力を竭し、忠貞の節を效し、之に繼ぐに死を以てせん

といへる諸葛孔明の言は東洋道德の典型にあらずや。更に他の方面より兩者の道德を比較すれば、一は家族本位にして、他は個人本位なり。服從に富む東洋道德は家族本位にして長を尊び幼を慈み祖先の祭祀を斷たざるを以て子たるの道とし、家の爲めに個人を犧牲に供するを辭せず、獨立に富む西洋道德は個人本位にして夫婦の愛は之れを云ふも祖先敬慕に於て足らざる趣あり。されば其の相續法に於ても東洋は家督相續を用ひ父は子に其の家を讓り、子なきものは他人の子を養ひて家名を維持することに努め、西洋は遺產相續を用ひ、死後の財產を指定の相續人に讓りて又家名の繼承を云はず其の他鎖末の點に至りては兩者趣を異にすること一にして足らず、これ皆な風土人情を異にし、歷史宗教を同うせざるに由るものにして各々長あり、短あり、未だ遽かに一を擧げて他を貶する能はざれど、其の長を採り短を補ひ、渾然圓融、以て新時代の新道德を組成すべきものこれ東西文明の融合地たる我が日本國

家族本位と個人本位

家督相續と財產相續

義務本位と權利本位

民の責務にあらずや。

されど土壌、肥沃ならざれば花木長せず。我が日本は果して新道徳培養の素地を有するか、靈妙なるは我が國體の精華にして奇態なるは我が國民の性情なり。皇室を中心として四海一家の如く、祖先に奉事するの心を以て皇室に奉事し、忠孝一致、億兆未だ曾て其の道を二三にせず。支那の儒教入りて此の精華を培ひ、印度の佛教入りて其の根底を養ひ、支那流なるものも、印度流なるものも、一たび來つて我が蜻蛉州裡に入るや、悉く我が中心思想に同化せられ、儒教に附隨したりし革命の風は我が國を侵さず、先覺の士、早くも、

同化力

儒教

凡そ神國一世無窮の玄妙は敢て窺ひ知るべからず、漢土三代周家の聖經を學ぶと雖も、革命の國風深く思慮を加ふべきなり。（菅原道實）

といひ、世界的なる佛教の教義も國家的となりて王法擁護を以て主眼とし、

鎭護國家といひ、與禪護國といひ、

佛教

佛法をもて王法をまもり、王法をもて佛法をたつること烏の兩翅、車の兩輪の如しと心得て、よく〳〵佛法王法ともにかけみちなくまもるべきこと

と示し、一千有余年、儒佛の二教は相待つて國民の道念を培ひ、此に燦爛の美を呈し、

（蓮如上人）

敷島のやまとにしきに織りてこそ
からくれなゐも色にはへあれ

（光格天皇）

外來の道徳を皆な我が敷島の大和錦に織り成せるこれ豈に東洋道徳のみならんや。維新以後、西洋の思想滔々として我が國に入り。其の平等的無階級的なるものは我が國民に活氣を與へ其の權利の思想は自覺の念となり、個人本位の道徳來るも亦舊習を存し其の取るべきを取て棄つべきを棄て、西洋道徳の支配者たる基督教も亦漸次日本化して今や我が日本は一切の文明を悉く自家藥籠中のものとし此に新道徳を組成するの氣運に接し、曾ては我に物質文明を貢献したるの西洋も亦其の精神的方面に於ては我れに求むる所あらんとするものあるにあらずや、近時歐米に於て日本研究の聲盛んに、我が特長た

西洋道徳

◎國民道徳　二〇五

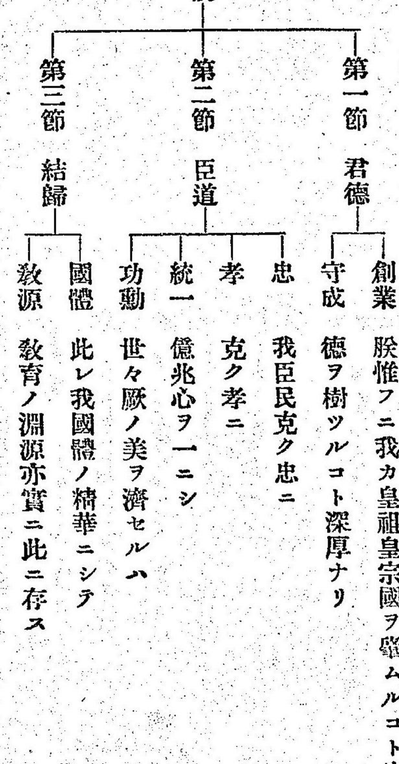
る武士道も亦研鑽せられんとするの傾向を生せるもの偶然ならんや。

宇宙の大道方所を絶し、道義の根底は萬古不易なりと雖も、國、各、情を異にし、時も亦其の趣を一にせず、幸に吾等は此の日本に生れ、此の氣運に遇ふ、先づ我が國民道徳の標準に遵據して大道の體現に向はざるべからず、況んや我が國民道徳の標準は獨り東洋の一孤島たる日本民族のみの小範圍に行はるべきものにあらずして、直に宇宙の大道と密邇せるものあるをや。何をか國民道徳の標準といふ、他なし、明治二十三年十月三十日に下し賜へる敎育勅語即ち之れなり。

二　國民道徳の標準

敎育勅語は我が國民道徳の標準にして、然かも亦時間的に古今に通じて謬らず、空間的に中外に施して悖らざる宇宙の大道を示現し、道義の根底を說明したるものたり。大內青巒氏、曾て科段を分ちて其の大旨を顯揚せらる。

科段的確、能く聖旨を領得せしむ。即ち分ちて三段とし、第一段は經、第二段は緯、第三段は結、第一段を以て君臣の大道とし之れを三節に分つ、



第二段は之れを臣民道徳の要旨とし、之れを五節に分つ、

第二段
- 第一節 人倫
  - 親子 爾臣民父母ニ孝ニ
  - 兄弟 兄弟ニ友ニ
  - 夫婦 夫婦相和シ
  - 朋友 朋友相信ジ
- 第二節 二利
  - 自利 恭儉己レヲ持シ
  - 利他 博愛衆ニ及ボシ
- 第三節 三德
  - 智
    - 學 學ヲ修メ
    - 業 業ヲ習シ
    - 智 智能ヲ啓發シ
  - 仁
    - 社會的 進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ
    - 國家的 常ニ國憲ヲ重シ國情ニ遵ヒ
  - 勇——一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ
- 第四節 結歸——以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ
- 第五節 功勳
  - 公 是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラズ
  - 私 又以テ汝祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

第三段は前を承けて其の宇宙の大道と一致するの眞理なることを明す。

第三段
- 第一節 明ノ本誠ノ未
  - 遺訓 斯ノ道ハ實ニ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ
  - 遵守 子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所
- 第二節 證ニ眞理ニ
  - 時間的 之レヲ古今ニ通シテ謬ラス
  - 空間的 之レヲ中外ニ施シテ悖ラス
- 第三節 勸奬希望
  - 勸奬 朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シ
  - 希望 咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

予曾て此の科段に基きて勅語を講說し以て童蒙に便したることあり、左に揭げて國民道德を論ずるの資とせん、

第一段は君德臣道を明にせられたもので、皇祖皇宗とは天皇陛下の御先祖を申し上げ奉ることで、我が日本は外國と事異り、長くも天祖天照大神の三種の神器を天孫瓊々杵尊に下したまひ、「此の葦原の千五百秋瑞穗の國は吾が子孫王たるべきの地なり。爾、皇孫の命、就まして治しめせ寶祚の隆なること、天壤と與に窮なけん」と仰せられしより玆火火出見尊、鸕鷀

葺不合尊まで三世の間、高千穂の宮にましまして徳を積み仁を累ねたまひ、鷀鷯葺不合尊の御子神武天皇に至りて東征を企てたまひ、終に群賊を平げて大和の橿原の宮に帝位に即き、こゝに宮室を造營したまふや。詔して、「上は乾靈の國を授けたまひし徳に答へ、下は皇孫の正を養ひ賜ひし心を弘め、然して後に六合を兼ぬ。以て都を開き、八紘を掩ひて宇となさんこと、また可ならずや」と宣ひ、皇徳八紘に振ひ、聖子神孫相繼で、東は蝦夷西は熊襲を平げ、三韓も亦た其の稜威に服するに至り、爾來一系萬世、千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすとも長へに變りなく、神武、國を建てたまひしより二千五百六十年、百二十有餘代の天皇、皆な臣民を憐みたまひ、仁徳天皇は高き屋に登りて民の竈に烟なきを悲みたまひ、醍醐天皇は寒夜に御衣を脱して民の痛苦を懐ひたまひ、後鳥羽天皇は

夜をさむみねやのふすまのさゆるにも
わらやの風をおもひこそすれ、

とのたまひ、後醍醐天皇は

世治り民安かれといのるこそ
わが身につきぬおもひなりけり

と仰せられ、歴代の天皇、悉く民を慈みたまひ、創業、守成相共に全く、君徳の宏大なる實に筆にも舌にも盡くされぬのであります、殊に　今上天皇陛下の御聖徳に至ては、申すも感涙を止められませぬ。或る時の御歌に

古の文よむことに思ふかな
朕か治むる國は如何にと

日々夜々民安かれと思召し下されて、夜雨青燈、古の文讀みたまふ毎にも、われ〳〵のことを思召し下さるゝのであります。九重の奥深き處、錦繡綾羅の御衾を重ねたまひても、賤か伏屋に起臥をしてをる民のあはれを思ひやられて

冬深きねやのふすまを重ねても
思ふは民が夜寒なりけり

と咏じたまひしは、吾等の忘れんとして忘るゝことの出來ない御聖徳であ

ります、何の幸ぞ、此の日本の國に生れ、何の幸ぞ、此の叡聖文武なる天皇陛下の下に立つ、これを思ひこれを思へば身を棄て家を棄てゝも國の爲め君の爲めに盡さねばならぬといふ思想が湧然として出るのであります、こゝに臣たるの道はある、われ〳〵の祖先は亦此の臣道を忘れず、遠き昔より「海行かば水つく屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、わだには死なじ」とて、大君の爲めに死をも辭せぬ精神は建國以來養はれて來たのであります、世界にはいろ〳〵な國がありますが、其の多くは外より侵入して其の國を征服したので、君と民とは治者と被治者の關係の外、何の關係もないのですが、我が國は、君民同祖で、其の本と問へば君も民も、伊弉諾、伊弉册の二尊の末でありまして、今でこそ貧富貴賤さま〳〵に分れて居りますが、其の源は皆な此の二尊より出たので、畏れ多いことではあるが、皇室は日本國民の總御本家といふやうなわけでありますから君と民とは治者と被治者といふ冷やかな關係ばかりでなく、本家と分家との關係、親と子との關係があるのであります。されば君に對して忠義を

盡くすといふことは、これやがて祖先に對して孝行を盡くすのと同じであります、我が國では忠と孝とは一つにして二でないのであります、書經にも維忠維孝とあり論語にも忠信孝悌の敎はあるのでありますが、忠孝一致といふことが實際に行はれて居るのは我が國の特色であると思はれます、治者を問へば皇祖皇宗の末裔、國土を問へば皇祖皇宗の親から經理したまひし所で、國家存立の三要素たる治者、被治者、國土共に皇祖皇宗を本とし、建國以來國民の精神を統一し、克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟し來つたので、我が國民敎育の淵源は實に此にあるのです。

我が日本は敎化的に一致して來たので勝軍王所問經に「王は慈心を以て諸の人民を觀て既に子の如く想へり、彼の一切の人亦復王に於て其父母の如くなるべし」とある理想を現實にし來つたのが我が國體の精華で、世界各國いづれの國民も理想としないのはありますまいが、これを現實にしたのは我が國のみであるといふのは敢て誇稱ではありますまい。

人倫の要旨

第二段は第一段の大綱を更に細説せられたので、初は人倫の要旨です、之れを親子、兄弟、夫婦、朋友の四に分つてあるので、これは言ふまでもなく何人も承知して居ることで支那の儒教には詳しき説明があるのですから、こゝには略しますが、人倫のことは餘り言はぬと思はれて居る佛教の方でこういう説明することにいたしませう、或る人の歌に

世を救ふ三世の佛の心にも　似たるは親の心なりけり

とあり、梵網經には「孝順は至道の法なり」と示し、明教大師は「夫れ佛教萬行、戒を以て首となす、戒は則ち孝を以て本と爲す」とあり、法然上人の撰擇集には、縦ひ餘事なしといへども、孝養奉事を以て往生の業と爲すとあり、其他心地觀經には

慈父悲母長養の恩によりて一切男女皆な安樂なり、慈父の恩高きこと山王の如く、悲母の恩深きこと大海の如し

といひ、忍辱經には「善の極は孝より大なるはなく、惡の極は不孝なり」

孝道

とありて孝を説くこと懇切、儒教に於ては孝を以て百行の基とし、孔子は「五刑の屬三千、罪、不孝より大なるはなし」と説き、曾子は「身は父母の遺體なり、父母の遺體を行ふ敢て敬せざらんや」といひ、孟子は世俗の所謂不孝なるものに五あり、一は其の四肢を惰り父母の養を顧みず、二は博奕飲酒を好み、父母の養を顧みず、三は貨財を好み妻子を私して父母の養を顧みず、四には耳目の欲に從ふて父母の戮を爲す、五には勇を好み鬪狠以て父母を危くするにありとて之れを戒めたる等、枚擧に遑のないほどであります、

兄弟

次ぎは兄弟の道で、これは五本の指のやうなものでありますから友愛を旨とすべきはこれ宇宙の大道で、孟子の所謂「孩提の童、其の親を愛するを知らざるなく、其の長ずるに及びて其の兄を敬するを知らざるなし」で顔氏家訓には、

兄弟は形を分ち氣を連ぬるの人なり、其の幼なるに方りてや父母左提右挈し、前襟後裾、食すれば則ち案を同じくし、衣すれば則ち服を傳ふ、

●國民道徳の根準

學べば則ち業を連ね、遊べば則ち方を共にす、悖亂の人ありと雖も、相

愛せざる能はざるなり

とあります、夫婦の道に就ては同書に

夫れ人民ありて而して後に夫婦あり、夫婦ありて而して後に父母あり、父母あつて而して後に兄弟あり、一家の親此の三者のみ。

とありて人倫の重んずべきをいひ、佛說六方禮經には夫の道を說いて、

一　出入當に妻を敬すべし。

二　之れに飯せしめ時節を以て衣被を給す。

三　當に金銀珠璣を給與すべし。

四　家中の所有、多少悉く用て之れを分付すべし。

五　外に於て邪まに傳御を畜ふることを得ざれ。

とあり、妻の道を示しては

一　夫、外より歸り來らば當に立て之を迎ふべし。

二　夫出でゝ在らざれば當に炊蒸掃除して之れを待つべし。

三　外に婬心あることを得ざれ、夫、罵り言ふも、還りて罵り色を作すことを得ざれ。

四　當に夫の教誡を用ふべし、あらゆる什物を藏匿することを得ざれ。

五　夫、休息すれば蓋藏して乃ち臥することを得。

と說き、優婆塞戒經には夫に對して「常に妻の心をして惱ましめず、貧富に隨ひて其の意を辨へ、殊に妻をして疑心を抱かしむる勿れ」といひ、玉耶經には妻に對して「一には晩く眠り早く起き、家事を修治し美膳あれば自ら口に向へず、先づ舅姑幷に夫に進めよ、二には家物を看視して漏失せしむる勿れ、三には言語を愼み忍辱を旨として瞋ることなく、四には誠愼して及ばざるを恐れ、五には一心に舅姑幷に夫に事して美名あらしむることと妻の五善といふ」と說いてあります、朋友に就ては同經に親屬朋友を見る、當に五事あるべしとて

一　之れが惡を作すを見ては私かに屏處に往きて諫曉可止すべし。

二　急あらば倘ほ奔り趨きて之を救護すべし。

●國民道徳

三　私語あらば他人の爲めに之れを說くことを得ざれ

四　當に相敬愛すべし。

五　所有の好物、當に多少之れを分與すべし。

と說き、「華嚴經」には常に善友に親近せよといひ、了義經には「若し善男子彼の善友に於て惡念を起さゞれば卽ち能く充意して正覺を成す」とあり、論語には

子貢、友を問ふ、子曰く忠告して善く之れを導ふ、不可なれば則ち止む、自ら辱るなし。

といひ、又

益者三友、損者三友、直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは益なり便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは損なり。

とあり、孟子は「善を責ることを朋友の道なり」といふて居る、皆なこれ朋友に信ならしめんとの敎であります。

以上は人倫の要旨たる親子、兄弟、夫婦朋友の道で主として家族主義の道

德を說いたのであります、毎度申しまする通り我が國民道德は家族主義の上に立つのでわれ〳〵の日常道德の要項はこれで盡きて居るのであります、併し家族相互の關係に於てのみ道德があるのではない、個人的には「恭儉己を持すの必要があるので、恭と儉とは共に自ら守るの根底で、自己心內の我見を征服して其の人格を高めて行くには是非此の二つがなければなりませぬ。個人を本位にして人生の本務を見ましても、これには自制と自訓と自護との三があるので、自らが自制で、今いふ恭儉はこれであります、恭は敬しむの義で禮記に「君子は恭敬撙節退讓して以て禮を明す」とあり、論語に「溫良恭謙讓」とあり、儉は侈ならざるの義、事を省き用を節するの義で　左傳に「大奢致さず、舉粲食鼓らず、其の儉を昭す」とあり、書經に「克く邦に勤め、克く家に儉なり」とあつて自訓の本務に當る、自訓といふのは自ら敎訓するので、次ぎの學を修め、業を習ひ次で智能を啓發し、德器を成就するのが當り、自護とは常に國憲を重んじ國法に遵ひて自ら護ることにも當てることが出來

◎國民道徳の標準

るが倫理上では主として身體を健全にして自己の生存を完うすることゝ思て居る、さて此の自利的なるに反し利他的方面には博愛衆に及ぼしの仰せがある。これは共同生活の美を圓滿に發揚する所以で、國家的には國憲を重んじ國法に遵はねばならず、社會的には世務を開き公益を廣めて世の中の爲め人の爲めになることをして行かねばならぬ、前者は消極的に守る方であるが、後者は積極的に進んで行ふ方であります。而して一旦緩急あらば義勇公に奉じて、公義公道の爲めには命を捨てゝでも働いて、先きにいふた智と仁と此の勇とで三德圓滿することが出來るのです、これ實に人生の本務で國民としては「天壤無窮の皇運」を扶翼するの道であります、此三德のことは既に說きましたで今は略して置きますが、われ〳〵の祖先は此の如くにして此の日本の國を保持して來たので、此の心掛が、當に陸下に對して忠となるのみならず、祖先に對して孝となるのでありますから勅語に「是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラズ又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン」と仰せられて忠孝一般の旨を明にせられたのであります。

第三段は前二段を結ばれたので、「斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スベキ所」とあつて、此の御敎訓は陸下御自身の御者へといふのでなく皇祖皇宗の御遺訓を示されたので、今日唯今ばかり守ればよいといふのではなく、行く末永く守らねばならぬことぞと仰せられたのであります、かくいへばこれは我が日本のみの敎へ、外國には通せぬことのやうに思ふ人もあらうが、御聖旨のある所は決してソンナ小さなものではなく、古今に通じて謬らず、中外に施して悖らざる古今を通じて確乎動かすべからざるの眞理であります。ソコデ陸下は臣民にのみ之れを守れと仰せらるゝのではなく、「爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」と詔らせたまふて、天に高き一輪の月、影を萬機の器水に浮ぶが如く、臣民の心の水に陸下の御聖德を映して、月や我れ、我れや月かとわかぬまで心も空にさめる夜の月といふ風に上下一心、咸な其德を一にせよとの御語であります。

◎國民道徳

語、卑近にして　聖言を冒瀆したりと雖も、大要此の如し。これ實に古聖先賢の教示と其の揆を同じくし我が民族修養の規箴たるべき道義の標準たり。否な、聖旨のある所は至公至平、單に我が民族道義の標準たるのみならず、之れを古今に通じて謬らず、中外に施して悖らざる宇宙の大道たり、天下何れの所か父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信ずるを以て沒道義とし、天下何れの地か、恭儉己を持し、博愛衆に及ぼすを以て不德とせん、學を修め業を習ひ、以て智能を啓發し、德器を成就するは人生の本務にして、公益を廣め世務を開くも亦吾等共同生活の一員たるものが當然爲すべきの職責たり、誰か國家を離れて自己の生存を完うし得るものぞ、國憲を重んじ國法に遵ふは以て自己の生存を完うする所以にして一旦緩急あらば義勇公に奉ずるも亦其の國家保存の義務にあらずや。祖宗此の如くにして來り、子孫亦此の如くにして行、くかくて歩々宇宙の大道を實現し、人類の理想に臻達する、これ獨り我が國民の標準たるのみにあらず、聞く個人主義の道德を因襲し來れる歐洲諸國に於ては其の道とする所、東洋の父子を本位とするに反し

夫婦を本位とするが故に孝道に於て全からざるものありて老者の流離困頓するもの少からす、終に老者扶養の必要を感じ、養老年金の議近者屢議會に提出せらるると、これ殆んど我が國民の思ひ及ばざる所にして、我が道德は能く此の缺陷を補ふにあらずや。吾等は此の國民道德の精髓を發揚して以て人生の本務を遂行せざるべからず。

三　國民道德と大道

人或は吾等の論議を以て國家偏重の弊に陷り、頑迷固陋、唯だ自國の美所長所を見て、世界文明の大勢に盲なる僞愛國論に類するを笑ひ、其所說を以て至公至平なる宇宙の大道と相容れざる迂腐の見となさむ、然れども、渾圓球上何れの所か國家組織なくして弱肉强食を免れ、往古來今、何れの時か國家組織なくして人道の發現を見得べき、孔孟が治國平天下を標榜して道義の開發を企てプラトーン、アリストテレースが理想的の國家を以て道義實行の

機關と目したりしは當に然かあるべきの理にして、艸昧野蠻水草を追ふて轉移したりし時代に於ても早く共同生活の機關を有し、其の一定の土地に住するに至ては此に有機的の組織を爲して治者被治者の關係を生じ、此の組織に依りて人類は其の生命財產を安固にせられ、後顧の患なうして靜かに其の本務を遂行し、天地の化育を助けて文明の圓滿、理想の實現に向ひ得べきにあらずや。國家を離れては個人の生存だも保持し難し何ぞ況んや人道の發現をや。彼の徒らに國家を無視して人類の平和を說き、現實の脚痕を洞觀する能はずして安りに高遠の理想に走るものは未だ以て眞に人道の爲めに立言するものといふ能はず。

白然界の一面

弱肉強食

自然界の一面には適者生存の法遍く行はれ、優勝劣敗の理は到る所に其の實例を示し、奮鬪爭擾の外、殆んど何者をも見る能はざるが如きも、他の一面には調和融合、相依り相助けて其の生存を保持するが如く、人類界の一面も弱肉強食の慘狀は不斷に行はれて生存競爭の事、頗る激甚なりと雖も、人類の進步は漸次に無制限なる競爭の不利益たるを發見し、他面に於て共同一致して以て其の生存を保持するの必要に驅られ部落の團結となり、國家の組織となり、此に個人の競爭に制限を付し、一定の土地に居りて一定の法に從ひ、內は國民の福利を計り、外は他の部落若くは國家の侵入を防ぎて安全を企圖せしも、國家相互の發展は終に利益の衝突となり、個人の競爭に制限を付したる國家と國家とは此に激烈なる競爭を試みさるべからざるに至り、有史以後、吾等の目にする所のものは實に此の國と國との軋轢にして人道は蹂躪せられ公義は蕩盡せらるゝに似たれど、一面に於ける平和の愛好と、共同生活の要求とは此の競爭にもおのづからなる制限を生じ、中古の歐洲に於ては羅馬法皇なるものありて宗教の權威を以て此の爭鬪を調停し、法皇の威衰ふるも正義を以て事を決するの思想は終に國際法なるものを生じて爭ひを未然に防ぎ、若くは其の永續を防ぐの要具となり。初めは基督教徒にのみ行はれて他教徒は其の恩澤に均霑する能はざりしが、かゝる偏狹なる思想の正義を標榜せる國際法と相容るべきにあらざれば曾ては異端外道として排斥せられたりし他宗教徒の國家も苟くも文明を以て許さるゝものに對しては等しく國

國際法

共同生活の實

◉國民道徳と大義

際團體に加はるゝを得るに至り、殊に人文の發達は交通をして益〻利便ならしめ、各國利害の關係愈〻密接となりて共同生活の意義は漸次全人類に及ばんとするの傾向を生じ、其の爭鬪の狀態も亦漸く獸的呑噬を離れ財的となり智的となり、相和して相侵さゞる理想の實現に近づかんとす。これ國家を離れて得べきのことならむや。吾等は此の國家に忠實なることに於て初めて宇宙の大道を發現し天地の化育を助け得べしと信ず。國、道あれば榮え、國、道なければ亡ぶ、國家をして大道の發現に近づかしむるは吾等の任務たり。我が國民道德の標準は端を此に發せざるか、維新の宏謨は空前の大業なり、陛下が詔らせたまへる、

舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし

の聖言は能く我が國是を言明して宇宙の大道を體現せしめんとしたまふものにあらずや。

其の戊申詔書に於て

方今人文日に就り月に將み東西相倚り彼此相濟し以て其の福利を共にす、

朕は爰に益〻國交を修め友義を惇し列國と與に永く其の慶に賴らむことを期す

との詔旨は平和の福音にして現代各國民の理想にあらずや。誰かいふ、日本は好戰國民なりと、我、豈に戰を好まんや、蓋し已むを得ざるに出づ、呂氏春秋に曰く

家に嚴父の怒笞なくんば竪子嬰兒忽ち驕肆、國に刑罰なくんば百姓人民立ろに不逞、天下誅伐なくんば諸侯牧伯俄かに暴戾、故に怒笞は家に偃すべからず、刑罰は國に偃すべからず、誅伐は天下に偃すべからず

と、宇宙の大道を體現し文明の惠澤を共にせんが爲めに已むを得ずして戰ふ、これ建國以來未だ一の暴戰なし、皇祖皇宗の芳蹟にして、今上の聖旨なり。されば彼の弓馬刀槍を事とする武人に於ても他邦に於て多く其の比を見ざるの道義的性格を醸釀し、君臣の義を重んじて忠節を專とし、義は山嶽より重く死は鴻毛より輕く、道の爲めには身命を惜まざる義勇の心となり、一諾の信、萬金よりも重き信義の念となり、秩序を正しくし規律を嚴守する禮儀の

行となり驕奢放縱を避くる質素の風となる。蓋し忠節義勇信義禮義質素は我が軍人の精神にして軍隊勅諭には「左の五個條は軍人たらんもの暫も忽にすべからす、之を行はんには一の誠心こそ大切なれ」抑此五個條は我軍人の精神にして一の誠心は又五個條の精神なり心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆うはべの裝飾にて何の用にかは立つべき心だに誠あれは何事も成るものぞかし」と仰せられ此の五事悉く一誠に出でゝ至誠奉公を以て軍人の本領とする等、一切の行動、道義の實踐にあらざるはなし。

山鹿素行士道を論じていふ、

曾子曰く、士以て弘毅ならざるべからず、任重うして道遠し、仁、以て己が任と爲す亦重からずや。死して後已む、亦遠からずやと、士は其の器最も廣く、能く忍ぶ所あらずしては重きにたへ遠を致すこと叶ふべからさるなり。職分を知り、其の道に志すといふとも、一生これをつとめて死して而して後に已むにあらざれば中道にして廢す、道の遂ぐべき所なし、故に勤行を以て士の勇とするなり、孔子曰く君子は言に訥にして行に敏にらんを欲すと、言ふことはこれ易く、行ふことはこれ難しもいへり、職分を知て志を立て道に志あつて其の道の次第をきくことを得ると云とも、勤め行ふ所を專とす、而して勤め行ふこと大方の志にては遂ること難し、今少しの入らざる事を致し習へる業すらこれを改めんとするには甚だ力を入れずしては安じがたし、殊に利害の間、色欲の妄動、名根の崩す所、因循する こと久しきを以て、更に間斷する所なく、其の意安りに先んず、こゝに於て我に大力量あらずしては必ず引おとされて其の誠を盡くすこと叶ふべからず、我に大力量を出さしむるは、志の淺深によることあり、志す所淺くしては、勤むる所、深かる可らざるなり、志は自ら省みて人の人たらざる所を確かに辱る處深からざれば、此の志出でざるなり、故に中庸に、子曰く、學を好むは知に近く、力行は仁に近く、恥を知るは勇に近しと出せり。孟子曰く、富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず、此を之れ大丈夫と謂ふと云へり、富貴は人の大に好む所にして、貧賤は人の大に惡む所、威死は人の大に恐るゝ所にして、此の間に聊か心を付る處

なきにあらざれば大丈夫とはいふべからず、大丈夫といふは是れ士の道に志して、其の志す所を確かに行ひつとめたるものゝ事なり、其の厚く正しき所此の如くつとめずしては士の本の立つといふべからざる也。と、これ豈に弓馬刀槍を事とするもののみの教訓ならんや、石平道人も亦武士道を說て「隨分武勇を勵まし一命を捨て粉骨を盡くし、名譽を世に顯はす人の恩賞の輕重、所領の大小を論ずる輩あり、拙哉」と十條を設けて武士の心得とす、

第一　可レ守二生死一事
第二　可レ知二因果理一事
第三　可レ用二浮心一事（浮心とは道義を守る心を指す）
第四　可レ守二無差別理一事
第五　向二諸境界一不レ可レ變二心一事
第六　守レ己可レ知レ己事
第七　滅レ己可レ樂レ己事
第八　知レ恩可レ報事
第九　可レ惜二光陰一事
第十　知二難到理可レ離二著相念一事

と、こも亦唯だ武士のみの敎訓にあらず。我が國民道德は何れの點に於ても常に宇宙の大道に遵據し吾等をして之れが發現に努力せしめんとす、吾等は日本國民なり。吾等が祖先の遵據し來れる這般の道德を遵守し更に發展し擴張して初めて人生の本務を完うし得べきを信ずるが故に、此の如く立言し、此の如く論議す敢て偏狹守舊の妄想に驅らるゝにあらず、吾等は立憲治下の國民たり、舊習に盲從し、爲政に屈服するの卑屈を學ぶべからず、自ら國家組織の一員として、堂々として之れを言ひ、其改むべきを改め矯むべきを矯め、極力我が國家をして理想の組織に近づかしめ、宇宙の大道と相離るゝなきの畫策を立てしめざるべからず、

第三章　處世論

一　道徳の價値

倫理道徳に關する諸問題の中心概念は善惡の標準にありて往古來今學者の論ずる所、多岐多端にして其の歸一する所を得るに苦むと雖も、其の大體の形勢を辿りて之れを二個の思潮に分類することを得、一は現實の要求に重きを置きて社會の幸福を計るの行爲を以て善とし、他は理想の追求を專として良心の滿足を善とす、前者は結果に重きを置くものにして後者は動機を主とするものたり。動機善なれば結果の如何を問ふを要せずとなすものは後者の立脚地にして、動機の如何は問はずもあれ、結果だに善なれば則ち可なりとするは前者の根據たり。

倫理の二潮流

凡そ道徳であるとか倫理であるとかいふことは何をするのが目的であるかといふならば、むづかしい、理窟な云へばイロ〳〵ございましようけれども、一言で云ふならば善い事をして惡い事をするなといふことを教へるに過ぎないのでありま

す、孔子の數萬言の教も、釋迦が八萬四千の經文も、基督の教もソークラテースの教でも詰じ詰めれば、善い事をして惡い事をするなといふに過ぎない、實に是れ程世の中に分り切つた事はないのでありますが、又是れ程世の中に分らぬ事がないのでありまする、何故是れ程世の中に分らないことはないかといふと、善をせよ、惡をするなといふことは誰にでも分つて居るけれども、善とは何んであるか、惡とは何であるかといふことになりますと、餘程話が面倒になる、試みに善といふことはどんなことかと云ふと、それは惡くない事は善であるといふ、今度は惡とはどんな事であるか、それは善くないことないふのである、是は循環論法といふ、善い事とはどんな事か、惡くないことである、惡いとはどんなことが、善くないことである、一寸分つたやうで考へて見ると矢張分らぬ(笑聲起る)そこで善い事をせよ、惡い事をするなといふのが教であるならば、善い事とはどんなことか、惡い事とはどんなことか是から極めて往かれれば分りませぬ、先づ普通の人が申しまする例を以て云ふならば、人を助けろといふことは善い事であると斯う極つて居る、人を助けろ、是は餘り惡いことではござりませぬ、けれども人を助けるといふことは善いと云ひながら兵隊が戰爭に參りまして人を殺すといふことは惡い事であるかといふて無暗矢鱈に人を助けて居つて是れで善いと云へるか、更に言葉を換へて云ふならば、巡査が泥棒を捕へて居つて之を引張つて行くのは氣の毒だからといふて泥棒を逃がしてやつて是れが善と云へるか、

善惡の標準

◎道徳の価値

人を助けろといふことは善い事であるけれども、時と場合に依つては助けてはならぬことがある、人の體に傷を附けるといふことは善くないことであります、人の體を無暗矢鱈に傷付けるといふことは善くないことであるけれども、腫物が出來た節にお醫者樣が之を截らなくてはならぬと仰しやる、截る方が宜い、それで截つたところが其腫物が癒つた、斯の如く助けて善いこともあり、騙けて惡い事もあるか、助けて宜い事もあるし、助けて惡い事もある、サア善とは何んぞや、惡とは何んぞや、切つて宜い事もあるし、切つて惡い事もある、善とは其時と場合に依つて變はる、時と場合に依つて變はるならば何なか善と云ひ、何なか惡と云ふ、途に之を決することが出來ない、極まらない、善をせよ、惡い事をするなといふのが教であつても、極まらなければやる譯に往かぬ、善い事をせよ、善い事といふてもどんな事かそれが分らぬ、惡い事をするな、惡いとはどんな事かそれが分らぬ、分らぬければやることが出來ない、そこでどうしてもそれが問題の第一着として善とは何んぞや、惡とは何んぞやといふことを極めなければならぬ、今云つた通り善と惡とは時と場合に依つて變はるだけなちち宜しうございますけれども、まだもつと變はる、「所變はれば品變はる難波の蘆は伊勢の濱荻」、所が變はると善と惡が變はる例が澤山あります、最も諸君の見易い例を引いて見るならば、日本人はお辭儀をするといふ事を別に惡い事とは云ふて居らぬ、人の前で頭を下げる、實に失禮な奴だと怒る人はない、ところが西藏の

國の風俗は御承知の通り人と出會ひました折の禮式は拇指を二本前へ出すのださうです、拇指を二本前へ出すだけならば可笑しくないけれども、拇指を二本前へ出してそれから舌を出すのであります、餘程妙な風であります、私が此處でやつて見ても宜いけれども……（笑聲起る）、やりませぬが、それが西藏の人は不思議はない、是れが禮式なんでありますから、人と人と出會ふと拇指を二本出して序でに舌まで出す、西藏の人は之れをやらなければ無禮である、日本で之れをやれば無禮である、して見ると西藏で善い事が日本では直ぐ其儘に用ゐられない、それはマア所に依つて變はる話であります、又時に依つても變はる、日本の國でも昔と今とは變つて居ることがイロ〳〵ありませうが、敵討です、親の敵を討つ、昔我の十郎五郎といふ二人が十八年の艱難辛苦をして親の敵を討つて實に孝行の人であると云はれたけれども、今日の日本で親の敵であると云ふ人を殺してしまへば矢張り殺人犯を以て問はなければならぬのである、昔はそれが善いと思はれたけれども、今は善くないことになるのであります、すると善と惡とは時に依つて變はる、國に依つて變はる、場合に依つて變はる、それぢや善をせよ、惡をするな、といふても善と惡との定義が明かでなければ到底善を行ひ惡を止めることは出來ない、それであるから善と惡との定義に往きませぬ、それであるから善と惡とは何んであるといふ此善惡の問題に付いて種々の議論があつて、東西兩洋の倫理學史は其善惡問題に付いて塡められて居るといふても宜い位

◎處世論

◉道徳の價値

動機論と結果論

であろうが、併し其議論を大別して見ると二つに分けることが出來る、其二つは何んであるかといふと一つな結果論と云ひ、一つな動機論と云ふ、結果論といふのはどういふのか、それは結果を見て善惡を極めて行くのです、動機論といふのは結果の如何に依らずして其人が行ふ時の心持を土臺として論ずる議論であります、結果論で云ふと斯ういふ議論、世の中の多くの人の爲になるとをした者を善と名付け、世の中の多くの人の爲にならぬことをしたのを惡と云ふ、最も明白である、世の中の多くの人の爲にならぬとをすれば惡であろ、最大多數の幸福主義多くの人の爲になるとをすれば善である、世の中の多くの人の爲になるとは善、多くの人の爲にならぬとは惡、實に明白でありませう、是れで分つたか、分つたようで分からぬ、何故分らないかといふと多くの人の爲になるとならぬとはどうして極めるか、やつてしまつてから是は多くの人の爲になつた、是は多くの人の爲にならなかつたと後で極めることは出來るけれども、今やらうといふ折に是は多くの人の爲になるかならぬかはどうして極める、自分の心で極めるより外に仕方はない、そこで自分の心で善いと思つたことが善、自分の心で惡いと思つたことが惡、善と惡とは心で極めるといふ動機論が勢ひ出ざるを得ないのであります、自分が善いと思ふてしたことは善い、惡いと思つてしたことは惡い、是は一番流行る議論であります、けれども之も考へて見ると餘程變であります、自分が善いと思つてやつた事が果して善いとであります、自分が惡いと思つてしなかつたとが果して惡かつたでございませうか、例へば玆に放蕩をして居る人がある、其人が身を持崩して居るから氣の毒であるといふので善意を以て忠告してやる、どうかして彼の人の放蕩を直してやりたいといふて瞳々と忠告をしてやる、すると其人が成程と考へて惡い事を止めれば此方の考も善い事であり結果も善かつたのであります、ところがさういふ放蕩息子に忠告をしてやると其男が何んだアンな男に其位なとを云はれるなら、俺はもつとヒドクやつて見せると、却て向ふの氣になる、或は此方が惡意を以て惡いことと思つてやつても其爲に向ふの人が反省なして善くなることもある、吾々お互の心といふものは是が善、是が惡と明かに見ることが出來るものならば、それは自分の心で善と思つた事が善、自分の心で惡と思つた事が惡で宜いけれども、吾々お互の心はそんな明かに立派な心ではなく、可愛い、憎い、惜しい、欲しい、憎いといふやうな樣々の迷ひの靈に覆はれて移り行く初めもはても白雲の怪しきものにしいもの、どうでもなるのでありまする、惡いぞと云ふとさうかとも見えは風のまに〳〵飛び行くところの一枚の紙片か或は涙のまに〳〵浮べるところの船の如くに風に弄ばれて樣々に何れへでも行くのが吾々お互の心ではありませぬか、實際さうであります、「君斯うやるといゝでえ」、「さうか」、といふやうなことを

◉處世論

◎道徳の価値

云ふ、「それも宜くないぞ」、「ウム、さうかも知れぬ」、何方が本統か分らぬ、何方にでもなる、そんな頼りない心で是が善だ、是が悪だと極める譯には行きますまい、心が既に頼りないものであるから其心に依つて是が善、是が悪と極めることは出來ないとするならば之には極めるものが必要である、どうして善と悪とを極めるか、そこで宗教がある、サア其處が俺の領分であるといふて飛出すところである、それは吾々お互のやうな不完全極まる、そんな不完全な心で善と悪とを極めやうとするから間違つて居るのである、完全圓滿なる神樣の御心に隨つてやる、之を善といふ、神の御心に背く之を悪といふ、是は大分立派な議論でありますけれども、考へて見ると立派でないところもある、一寸立派です、何故かといふと人間のやうな不確な心でやるから善悪は間違ふのです、完全圓滿なるところの神樣の心に隨ふのが善であつて、其神樣の心に背くのが悪、一寸分るけれども、それは其宗旨々々を信じて居る人だけに是が行はれる議論であつて、未だ宇宙の眞理として此處に持出すことの出來るものではない、何故かと云ふと天理教の信者であると天理王命の仰しやつたことが善であつて、天理王命の仰しやらぬことか悪であるといふ、基督教は「エホバ」の神樣の云ふたことが善であつて、之に背くものは悪である、イヤ觀音樣の仰しやつたことか善であつてそれに背くのが悪であるといふ工合に宗教といふものは本尊が樣々にある、その樣々なる本尊が云ふから成程天理教の人は天理王命の云ふことを以て極めることが出來るけれども、

天理教でない人はそんな神樣は何んだといふ、それだから唯神樣の云はれたことが善、神樣の云はれないことが悪といふことは其宗派の中だけには行はれる議論であるけれども、未だ宇宙の眞理として此處に引き出すのには少し不完全な所がある、然らば善と悪とはどうして極めるのか、善悪はどうして極めるのか、茲に於て佛教の中に斯ういふ説がある、理に順つて心を起す之を善と名付く、理に背いて心を起す之を悪と名付く、理といふのは道理の理であります、道理に從つて心を起すのが善、道理に背くのが悪である、だから道理に從つてやるのが善、道理に背くのも亦考へると分らぬ、何故分らぬかといふと道理に從つてやるのが善、道理に背くのが悪といふことは分つたが、そんなら其道理とはどんなものであるか、道理とは何んだといふと佛教の中にそれを解釋してある、葛城の慈雲律師でございますが、理とは法性の理なり法性の理に從ふ、之を善と名付く、法性の理に背く之を悪と名付く、分つたか、イエ分らぬ、分らぬければ駄目である、サア法性の理とは何んであるかといふと是はナカ〳〵口を以て云ふのにはむづかしいけれども、分り易い言葉を以て云ふならば天地自然有りの儘の道理といふ、即ち天地自然有りの儘の道理に從ふ之を善といふ、天地自然有りの儘の道理に背く之を悪といふ、天地自然有りの儘の道理即ち宇宙間に現れ

◎處世論

て居るところの眞理であります、宇宙の大道であります、此宇宙の大道、現れて居る、天地自然の妙用、之に從つて行く之を善と云ひ、それに背く之を惡と名付く、此宇宙と申しますものはどんなものでございませうか、宇宙は實に一物も靜にして居るものはございませぬ、天地は活働して居る、宇宙間のあらゆる一切の萬物は悉く動いて居ります、活働して居ります、其天地宇宙間に活働して居る働き方を三つに分けることが出來る、先づ一番下等の働きを名付けて無意識的活働といふ、——無意識的活働といふ言葉は或は如何か知れませぬけれども、先づさういふた方が適當であると思ふ——無意識的活働即ち意識の無い活動であります、是れが一番下等なもの、其次には目的意識的です、其次には目的意識的、斯う三つに分けることが出來る、宇宙間の何の活働でも一番下等なものは無意識的活働であります、其無意識的活働は何かといふと之を此方へ働かせる（此時辯士盆の上にある茶碗を動かす）此盆の上に載つて居る茶碗が右せむと欲すれば右し、左せむと欲すれば左りに行くのではない、是は無意識に動いて居る、若し思つて居るなら貴樣右へ行け、俺は嬉やだといふかも知れないがそんなことはない、是が無意識的の活働、石が阪の上からゴロ〳〵落ちて行く、石が上に居るのが面倒だから下へ降らむとして降るのではない、石がゴロ〳〵落ちろ、是が無意識的活働、ところが犬が犬が歩いて居るのは無意識的活働かといふとさうではない、意識的活働である、犬が此方に餌があるだらう、此方に自分の主人が居るだらうといふて歩くのが犬なり猫なり、又鳥の飛んで居るのは意識して居る、右する方が宜い、左する方が宜い、東せむか、西せむか、自ら意識して歩いて居るから、鳥や獸の歩いて居るのは意識的です、動物は意識的に歩いて居る、意識的であるけれども、自分の究竟の目的、自分の目的といふものを意識して運動をして居るものではない、此目的といふものを意識して、活動して居るものは此宇宙間に唯人間があるだけであります、殊に高尚なる人があるだけであります、人間の中にも隨分無意識に活動して居るのがあるし、目的意識なくして活動して居るものがあります——、ありまするが、先づ宇宙間の活動を別けて言ふならば、此目的を意識してやるといふことが即ち人間の特長でありませう、それでありますから宇宙の目的は何か人間の最も高尚なる目的、即ちそれは宇宙の目的に隨順する目的であります、人といふものは小體の天にして天は大體の人なり、是は中江藤樹先生が言つたのでありまして、それから人の大きいのが即ち天である、即ち此宇宙といふものは小さな天地である、それから人の大きいのが即ち天である、即ち人間と同じことであります、既に此宇宙が即ち人間と同じもの、宇宙といふものが何等かの目的を有つて活動し、人間は宇宙の一員として目的を有つて活動して居るならば天地の則に從ひ、宇宙の大法に從つて行くといふことが人間自からの務めでなければならぬのであります、そこで道徳の第一歩は汝自身を知る、ソークラテースといふ人が汝自身を知れ、諸君汝自身を知る、是

◎道徳の價値

れ實に道徳の根底であります、知識の根底でありませう、お前自身を知れ、其おの前自身を如らぬ人が澤山ある、昔斯ういふ話があります、魯の哀公が孔子に問ふて曰く、我れの家來に實に粗忽かしい奴がある、其居を移して妻を忘る、轉宅をし て妻君を置き忘れて來た、隨分粗忽かしい男だ、魯の哀公が孔子に過ふたときに自分の臣家に實に粗忽かしい者があつて其居を移して其妻を忘る、轉宅をして妻君を忘れた、孔子曰く、——孔子がそれに答へて云ふのに、それはまだ餘り粗忽かしいのぢやない、もつと粗忽かしいのがある、桀紂は其の身を忘る、夏の桀王や殷の紂王は妻を忘るゝどころではない、自分の體を忘れてしまつた、世の中に妻を忘れる人は多いぞよと孔子が云はれました、隨分其身を忘れる人間の方が多いです、其身を忘れる、其身を知る、自分の身を知るといふことが即ち是が倫理道徳修養の根底である、（明徳會講演）

これ予が曾て講説せる善惡論の一節なり、汝自身を知る、汝の身は宇宙の一員として天地の化育を助くべき者にあらずや、唯だ汝が善と思惟したる動機のみを以て善といふべからず。汝には目的の意識あり、偶ま汝の行爲が世の福利に合せりとて遽かに善なりと斷ずべからず。善惡の分別には自ら四段の階級あり、其の最も下等なるものは動機惡にして結果も惡なるものにして、

之れ惡を爲すの目的を以て惡を爲し了せるなり。次ぎは動機は惡なりしならむも結果の幸に善たりしものにして之れ偶然のみ、眞の善行にあらず、次ぎは動機善にして結果惡なるもの、之れ善に似たりといへども其結果の惡たるべきを豫想し能はざりし不注意の責は辭する能はじ。吾等の目して善行爲となすものは動機も善にして結果も亦善なるものならざるべからず。動機をして善ならしめんとす。吾等は智識の啓發を忘るべからず。智識にして啓發せられざらんか人生の本務を自覺する能はず、其の善と思惟し惡と意識することに於て大なる誤謬なき能はず、これ吾等が智識の啓發を以て修養の一要件とし、個人的には智識の整理と智能の啓發をいひ、社會的には世態の通曉と智識の應用とを說く所以なり。されど智識のみにて道徳的行爲の完成せらるべきにあらず、人は冷やかなる理性のみにて萬事を處理し得べきものにあらず。此に於て個人的には趣味の涵養と發展とをいひ、社會的には寬容の德量、同情の發揮を以て缺くべからざる修養の要件とする所以なり。然れども此の二あるのみにして意志の鍛鍊を缺く時は、善の動機も之れを遂行するの勇なく、

◎處世論

善と知つても之れを行ふ能はず、悪と知つても之れを去る能はざる薄志弱行の徒となるなき能はず。吾等が更に個人的には氣力の蘊蓄克己の修練をいひ、社會的に堅忍の精神、不撓の努力を說く所以のもの此に存す。。蓋し智情意は人心の三方面にして此の三にして圓滿に修養せられたるにあらずんば動機善にして結果も亦善ならしむる能はず。よし如上三者の精神的方面に於て修養せられたりとも若し身體にして羸弱ならんか、其の志す所も行ふ能はず、却て他の扶助の下に育養せられざるを得ざるに至ること少からず。

所詮吾等の說く所の修養は全人格に亘り、其の遂行せんとする道德も亦唯だ獨り動機の善を貴んで結果の如何を問はざる自調獨善主義のものにもあらず、徒らに結果の善美を見て動機を問はざる皮相のものにもあらず、心の淨きを喜べど世と沒交涉なる仙人者流は吾等の取る所にあらずして、行の善なるを貴べど心の汚れたる僞善の徒は斷じて斥けざるを得ず。吾等が心の淨きを喜ぶは其の行ひをして淨からしめんが爲めなり。吾等が行の善なるを貴ぶは其の善き動機より出でたるを以てなり。

道德の眞價値は宇宙の大道を體現するに偉大の力を與ふるにあり。吾等は此の力に促されて手を實社會に下す、此に於て吾等の說く所の道德は現實社會を離れず、吾等の言ふ所の修養も亦家庭を離れ國家を離るゝものにあらず。暫く吾等の本務を分類せんか。

人生の本務
- 自
  - 自訓（修學、習業、練磨、成德、）
  - 自制（克己、制慾、節儉、忍耐、）
  - 自護（人格、尊重、衞生、）
- 他
  - 家庭（孝行、慈愛、友愛、和順、貞操、齊家、）
  - 國家（忠君、愛國、義勇、遵法、奉公、致富、）
  - 社會（仁慈、博愛、公益、信義、公德、禮讓、）

これ吾が提け來れる道德の大綱にして、敎育勅語の既に明示する所。され

と吾等は唯だ人と人との調和を旨とせる道德のみを以て修養の義を盡せりとするにあらず、吾等は更に人と人以上の實在との調和に其の根底を置くにあらずんば此の人と人との調和たる道德の實行に力あらしむる能はずとするものにして其のしば〳〵宇宙の大道を喋々する所以のもの亦此に存す。

二　處世と道德

超越主義

世に一類の徒あり、人と人との調和に成るの道德を以て塵界の俗事とし、之れを超越するにあらずんば以て宇宙の大道に密接し難しとし、獨り山林に閑居して心境の清淨なるを樂み、

こゝも亦浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もかな　（兼好）

と咏じて俗塵の我が心境を汚すを慨き、昔、支那にありしといふ許由が帝王の勅を受けて我が耳を汚すとして潁川の水に洗ひし如き、希臘にありしと聞くヂオヂヰスが陋巷に放浪して寡欲に誇りしが如き生活は凡情を脫却して、いと氣高きが如しと雖も、世を擧げて此の如きの人となりたらんには、國家の富强、社會の發達如何にしてか期し得べき。水戸光圀、曾て許由の圖に題していふ、

耳を洗ふ心の水は清けれど
ながれは汲まじ世を救ふ身は

と、耳を洗ふ心や則ち清し。されど其の心を以て塵俗に處するにあらずんば何を以てか修養の至れるものと、社會の外に出して獨り自ら淨も可なり、孤立も不可なれど、之れを以て修養の極致とし世と沒交涉なるを誇るに至ては人類生存の本義を無視するものにあらずや。之れを自調獨善主義の死道德といふ。死道德は世に功なし、吾等の言ふ所のものは活ける道德なり、活ける道德は活社會に處して活運動を試み得べき活力の源泉となるにあり。

社會的自殺

死道德活道德

人をのみ渡し渡して己が身は
岸に上らぬ渡しもりかな

人と人以上との關係

仁義道德と利用厚生

利他博愛、共同生活を助け、其の進歩發展に貢献する所に道德の要あり。道德の源泉には人と人以上の實在との關係を要すべけれど、此の源泉にのみ安住して流れて人と人との關係に及ぼすなくんば山上の源泉、一碧泓として風光の明媚を致すべきも、下つて現實社會を灌漑するにあらずんば利用厚生に於て何の功かあらん。蓋し仁義道德と利用厚生とを以て全く其の趣を異にするものとし、眞の道德は現實社會を脫離するにあらずんば行ひ難しと思惟したりしは古代の迷想にして眞の道德は現實社會を離れず。眞の利用厚生は仁義道德と相戻らず。下流の涸れざるは山上の源泉に由り、山上の源泉、流れて初めて其の用あり。人と人との調和を計るの道德には人と人以上の實在との關係を調和する根本的源泉あつて初めて確乎不拔なるべし。此の論移して以て處世と道德との關係を示すべきにあらずや。人の世に處して其の生存を保たんとするや、衣食住の供給悉く之れを他に仰がざるを得ず、而して其の他に仰ぐに欠くべからざるものは金錢なり。此に於て人は財利を求むるにあらずんば一飯の食も一糸の衣も之れを得る能はず。處世の要件は實に此の利を得るにあり。人々其の利を爭ひて飽くことなく、世は修羅の巷となりて、俗情紛々互に他を排して毫も道德の其の間に存するを認め難しと雖も、靜かに其の歸趣を窺はんか、利と道と終に離るべからず。利に二樣あり、一を目前の利とし、他を永久の利とす。目前の利は道と相戻るべからず、或る商人、曾て其の子を戒めていふ、商人の道は底なき柄杓を以て水を桶に盛るが如し。一滴二滴の少量なりと雖も、酌んで倦まずんば以て桶に滿つべし。徒らに目前の利に走りて柄杓に底するを知るとも、桶に底なければ滿つるの時なしと、桶の底とは何ぞ、曰く道德なり。道德の根底だに確乎たれば目前の利は薄くとも、終に永久の利を得べし。「商人生業鑑」にいふ、

目前の利と永久の利

屛風と商人

屛風と商人とは直ぐに立たぬといふ事あり、然し屛風は下のゆがみし所へはたゝぬものなり。商人も其の通りにて五歩と一割の利は極りし德用なり、

此の外に大慾に非道の利を取るは下の
終にはこけること疑ひなし。
と、石田梅巖はいふ、

商人の道

商人の其の始めを云はゞ古へは其の餘りあるものを以て、其の足らざるものに易へて互に通用するを以て本とすとかや、商人は勘定委しくして今日の渡世を致すものなれば、一錢輕しといふべきにあらず、これを重ねて富を爲すは商人の道なり、富の主は天下の人々なり、主の心も我が心と同じき故に我が一錢を惜む心を推して賣物に念を入れ、少しも麁相にせずして賣渡さば買人の心も初めは金錢惜しと思へども代物のよきを以て其の惜む心自ら止むべし。惜む心を止め、善に化するの外あらんや。

と、利を事とする商人既に然り、況んや其の他をや。

道德に棲守するものは一時に寂寞たり。權勢に依阿する者は萬古に凄凉たり。達人は物外の物を觀、身後の身を思ふ、寧ろ一時の寂寞を受くるも萬古の凄凉を取る勿れ（菜根譚）

道と利との調和

利と道との關係に於ても此の如きを見る。目前の利を爭ふものは不義に流れて浮べる雲の如き榮華に誇り、一時に誇耀するも萬古に寂寞たり、永久の利を思ふものは道德に棲守するが故に一時に寂寞たるも、萬古に赫灼たり、活ける道德には眞實の利之れに伴ひ、眞實の利は活ける道德に於て之れを得べし、利と道と相背反せりと見たるは目前の利と死せる道德に於ての立言にして、永久の利と活ける道德とは終に相悖らず。

三　簡易生活

生計の獨立

世に處して道を行はむとす。吾等は先づ吾等自身をして獨立不羈ならしめざるべからず。吾等自身をして獨立不羈ならしめんとす、吾等は先づ其の生活に於て敢て他の補助を仰がず、我が力によりて之れを保持するの策を樹てざるべからず。自家自ら其の生活を保持する能はずんば何を以てか社會の共同生活を助け其の進歩發展に貢獻することを得む。即ち身體上に於ては醫師

其の他の扶助を受くることなく、剛健の體以て其の業を勵むべく、生計上に於ては親戚故舊其の他の恩惠の下に立つことなく、獨立特行、吾れ我が生を養ふ。此の如くにして初めて道を行ふべし。世には自ら道を行ふと稱して、然かも自家は他の扶助の下に立ちて米鹽の資常に空しきものあり。病弱は決して誇るべきことにあらずして、自ら招くの貧困も亦一種の不德なり。世には不時の災厄あり、自ら求めざるに貧困に陷り。自ら招かざるに病苦に呻吟することなきにあらずと雖も、多くは平素の攝生其の宜しきを欠き、若くは生平の心掛當を得ざりしにあらざるはなし。由來東洋才子多病と稱し蒲柳の身を以て誇るべき資質の如くに見做し、一簞の食一瓢の飲、人は其の清貧を以て欣慕すべしと爲す。才子は嘉みすべきも多病なるは喜ぶべからず、清貧に安んずるは賞すべきも負債山積、累を他に及ぼす濁貧は賞すべからず。清貧は分に安んずるに成り、濁貧は分を守らざるに出づ、世に處するの第一義は身體財産共に他の援助を受けざるにあり、身體の攝生に關しては暫く之れを後章に讓り、此に財産に關する獨立談を說かんか、云ふまでもなく、積極

的には勤勞にして、消極的には節儉なり、勤勞は以て產を成す所以にして節儉は以て產を守るの所以たり、勤あつて儉なくんば笊に水を盛るが如く、入るに隨て出で、儉あつて勤なくんば壺中の水を守るが如く、終に腐敗せずんば止まじ。勤は以て道を行ふ所以にして儉は以て德を養ふ所以たり。世には四類の處世法あり。

一　勤なく儉なき者、
二　儉あつて勤なき者、
三　勤あつて儉なき者、
四　勤あり儉ある者、

勤なく儉なきものは社會の厄介物にして獨立特行、道を行ふの資質を欠くは亦喋々を要せず。吾等の望む所は勤あり儉あるの處世法ならざるべからず。浮世意の如くならず、足るを知り分に安んずるなくんば、其の慾望に限りなく、不平悶々の情常に絕えざるべし、足るを知り分に安んず、これ儉の德なり。驕る平家の久しからずして三十餘年が榮華の夢、南海の春吹く風と消え

たるも、さしもに萬代不易と謳はれし羅馬の帝都が土崩瓦解の慘狀を呈せしも此の德に於て欠くる所ありしに因す。況んや盛衰の顯著なる個人生計に於て此の儉を守るなからんか其の衰滅實に目睫の間にあり。蓋し儉の一字には自己の慾望を制御する克己の精神に出でゝ分に安んじ足ることを知り、かねては不時の準備に供する遠慮にも基きて家計の秩序を保ち獨立を致すの諸德を備ふ。英國の史家ヒユームは實に節儉の力を以て其の名著を公にしたるの人なり。彼れ素と良家の子なりしも、幼にして父を失ひ、二十三歲にして笈を負ふて佛國に遊び、僅少の學資を以て業を遂げんとし、其の自敘傳中に記していふ、

ヒユーム

佛國に在りて予は一生の計を立て、嚴格なる節約によりて富の不足を補ひ以て自己の獨立を保持し、文學上の才能を發揮するの外、總ての目的を輕視せんことを決心したり

と、かくて彼れの第一回の出版は失敗に終りたれども毫も撓むことなく、他の著書を公にして漸く功を奏したれど、尙ほ之れによりて金錢上何の得る所なく、節約に節約を重ねて其の獨立を傷くることなかりき。其の友アダムスミス、彼れを評していふ、

貧に處するの心

ヒユームは其の財產の最少の境遇にありても尙ほ慈善と博愛との行爲を忘れざりし、蓋し彼れの節儉は吝嗇の上に築かれたるものにあらずして獨立の上に出でたるものなり。

と、吝嗇と節儉との別は今更らに此にいふの要なし。ヒユームは實に此の節儉を以て獨立を妨げざりしなり、二宮尊德翁も亦節儉を以て獨立を得たるの人なり。彼れ治產の要を語りていふ。

心を貧に處する者は常に富み、心を富に處する者は必ず貧となるを免れず。

例へば茲に百石の田產あるものにして、我が田產は五十石しかなきものと心得、常に五十石だけの生計を爲さば常に必ず富まん、然るに五十石の田產しか無きものにして我が田產は百石あるものと信じ、常に百石の生計を爲す時は終に無產の貧者となるべし、要するに何時も貧に居る心持なれば、家門は榮え富に居る心持あらば、家門は衰ふるものなり、故に心は常に貧

家政の經驗

高尚の理想簡易の生活

に處して敢て富に處することなかれ、これ處世の祕訣なり。

と、之れを家政の經驗に聽く、百圓の月收あるもの百二十圓なり三十圓なりを以て生活するはやがて其の產を破るの基にして、百圓を以て生活するは可もなく不可もなけれど不時の備へなきが故に失敗を免れず。七八十圓にて生活してこそ適當といふべけれ、三四十圓にて生活せんとするは客嵩に流ると。家族の人數、職業の如何によりて此の比例のみにては定め難けれど、大凡此の如くにして誤なかるべきか。同じ人語りて、國家の財政は出るを計りて入るを制すべけれど、一家の經濟は入るを計りて出るを制せざるを得ざれば、月收を基礎として豫算を確定し、生計費、臨時費等及ぶべき限り明細に定め、其の以外一歩も出でざるの企畫を爲し、若し負債あれば第一に償却の途を立てゝ生計に累せらるゝことなきに至らずんば到底世に處して道を行ふ能はじ、理想は高尚なるべきも生活は簡易なるべし。汝が日常使用せるもの果して不用の品なきか、汝が生平需要する所のもの果して必須の物のみなるか。汝は此の不用の品の爲めに其の生活を繁雜にし、此の不必須の物の爲めに其の家

計を苦むることなきか。汝の家計をして規律あらしめよ、汝は財と時とに於て多くの剩餘を得べく、汝の生計をして簡易ならしめよ。汝が道を行ふの力と資とは其の內に給せらるべしと。吾等は飢雜なるが爲めに自ら苦み、不規律なるが爲めに獨り悶ゆ。「遺敎經」に曰く、

諸の苦惱を脫れんと欲せば、知足を觀ずべし。知足の法は輒ちこれ富樂安穩の處なり、知足の人は地上に臥すと雖も、尙ほ安樂なりと爲し、不知足の人は天堂に處ると雖も、また意に適はず。不知足の人は富むと雖も、而も貧しく、知足の人は貧しと雖も、而も富む。

と、足るを知るが故に節制あり、節制あるが故に簡易なり。簡易なるが故に規律あり。規律あるが故に餘裕あり、餘裕あるが故に心常に安し。世上紛々、足るを知らざるの徒、妄りに外見を衒ふて一日の安なく、終に負債の爲めに壓迫せられて其の獨立を傷く、世にも恐るべきは足るを知らざるに出でたる負債なり、此の負債によりて虛言、卑劣、羞恥、心勞、欺瞞等の惡德を生じ終に墮落の深淵に陷る。

決して負債を作ること莫れ。汝自身の分限に安んせよ。一年二十磅を以て生計し能はざるものは四十磅を持つとても生計し得ざるものなり。彼等は逸楽の人なり、實質に比して高きに過ぐるの一種なり。

（ジョージ、ハーバート）

と、分に安んじ足るを知り、其の生活に規律あらしむ、これ吾等が處世の要義なり。

衣食住と自省

予は慶ば慈受深禪師が

屋可レ蔽レ風雨一、何苦鬪二華麗一、羹可レ充レ饑腸一、何苦尚二腴膬一、孔顔古聖師、悦心飽二義理一、一簞復一瓢、飯蔬食、不レ砌、不レ知爾何人、鱗々居二大第一

といひ、雲棲大師が

飲水、不知爾何人、肥甘滿二砧几一、迦葉首傳燈、聞譽千古溢、頭陀百衲弊、老死終衣可レ蓋二形體一、何苦競二文飾一、遍身皆綺羅、不レ易、不レ知爾何人、

といへるを以て自省の資とし、俳諧寺一茶の勸農の詞を以て簡易生活の福音とす。

簡易生活の福音

風流を樂しむ花園ならで、後の畑前の田の作物に志し、自ら鍬を採つて耕し、先祖の賜と命の親に懇をつくし、芳野の櫻、更科の月よりも、己が業こそ樂しけれ。朝夕心を留めて打むかふ菜種の花は、井戸の山富貴より好しく、麥の穗の色は、牡丹芍藥より腹こたへあるかと覺ゆ。朝顔より夕顔ぞよけれ。萩菊より芋午蒡に味あり。すべて花紅葉より栗柿は實の植物なり。稻の穗並の賑はしく、蕎の前より腹滿る心地して、粟穗に馴る鶉、野邊の蟲の音面白く、遠き名所舊跡より近き田圃の見廻りが飽きず。松島鹽釜の美景より飯釜の下肝要なり。上作の名劍より鎌鍬は調法なり。書畵の掛物より、掛けて見る作物の肥を油斷せず。投入立花の工より、茄子大角豆の正風なるが見處多く、茶湯蹴鞠の遊より、溢茶を呑んで昔語こそおかしけれ。玉の臺より茅蓬の家居が心易く、高きに居らねば、落るあぶなげなく、迷ねば悟らず。念佛の替りに業を怠らず、實義を盡して神詣に比し、

仁者に習ふて山には木を植え、智者の心を汲んで田の水加減を專らにし、珍肴鮮肉の料理より、餒入らずの雜飯が後腹病める氣遣なし。すべて世の中は、飛鳥川の流れ、昨日の淵は今日の瀨となる如し。唐の咸陽宮、萬里の長城も、終にはほろび、平相國の驕りも一世のみ。鎌倉の將軍も三代を過ぎず。北條足利の武威盡き、織田豐臣の榮も遂に一代なり。時すぎ世かはれば、誠に夢の如し。世に稀なる珍味も舌の上にある內、伽羅蘭麝もかぐ中のみ。樂は苦の基、財寶は後世の障り、遊興は暫時の夢。他の富めるも羨やまず、身の貧きも歎かず。唯愼しむべき、貪慾、恐るべきは奢りなり。抑そも田地は、萬物の根原にして、國家の至寶なれば、父母の如く敬ひ、主君の如く尊み、妻子の如く育み、寸地をも捨てず、何處にても天下泰平、五穀成就を願ふより外さらになし。

これ簡易生活によりて得べき快樂にあらずや。自ら節して敢て他を煩はさず、不羈獨立、其の生を營む、何の累か我が頭上に加らむ。されど吾等は唯だ消極的なる這般の覺悟のみを以て世に處せんとするにあらず、大に節するは大

に用ゐんが爲めなり。簡易生活は外見と虛飾とを去りたる眞面目の生活なり、獨立特行の根底を堅固にするものなり、脚底既に動かず、以て道を行ふべし。

佛源禪師いふ、

君子は財を惜む、之れを用ふるに道あればなり

と、道の爲めには千金を惜まず、私慾の爲めには一錢を費さゞる所に節儉の功あり、昔、眞田昌幸の高野山に蟄遯するや、帶ぶる所の大小刀、其の欄糸悉く木綿を用ひ、人の之れを笑ふものあれば即ちいふ、「大丈夫は外見の美を貴ばずして內實の優れるを喜ぶ、見よ、我が大小刀其の欄糸は卷くに木綿を以てすれど共にこれ五郎正宗の名刀なり」と、傳へて以て武士道の龜鑑とす。吾等が財を用ふるの道亦以て此の如くならざるべからず。

四　努力生活

儉の德は以て其の生活を簡易ならしめ自己の社會に於ける獨立の基礎を鞏

◎努力生活

固にすれど、吾等の生存をして意義あらしめんには勤勞努力以て道を行ふ積極的方面を忘るべからず。既に云ふ如く人の勞働を以て生きんが爲めといふは無意義にして人は働くが爲めに生き、道を行はんが爲めに存するものなれば、勤勞努力は人道の大本、人文發展の鍵鑰なり。天惠の倉庫は此の鍵鑰を以て開かれ、生存の意義は此の大本によりて發揮せらる。盛んに節儉の必要を說き簡易生活を勸奬したる二宮尊德翁は又勤勞を說て、

天理は萬古變せず、人道は一日怠れば卽ち廢す、然れば人道は勤むるを以て尊と爲し自然に任ずるを尊ばず、夫れ人道の勸むべきは己に克つの敎なり。

と、已に克つて以て道に勸む。これ翁の所謂天地の化育を助くるの道にして、夫れ我が道の尊む增殖の道は直に天地の化育を贊成するの大道にして米五合にても、麥一升にても、苧一株にても天ッ神の積置かせらるゝ無盡藏より鍬鍊を以て此の世上に取出す大道なり、これを眞の增殖の道といふ、尊むべし、務むべし、

天つ日の惠み積み置く無盡藏
鍬で堀り出せ鍊で苅り取れ

と、朝々、日は東より出でゝ、夜々、月は西に沈み、天地一日も其の活動を止めず、茁々たる春艸、生々を怠らず、滾々たる水流も亦終に石を穿ち、萬象常に其の爲すべきを盡くす。昔、百丈禪師なるものあり、齡既に九十、しかも尙ほ其の作務を怠らず、常に其の徒を戒めていふ、

一日作さずんば一日食はず

と、傳へて以て美談とす、一日作さずんば一日食はず。これ吾等が處世の覺悟ならざるべからず。青年重ねて來らず、一日再び晨なり難し、我が世に存するの一日は眞にこれ復び遇ひ難きの一日にして時々刻々、晝夜を含てざる水の流れにも似たる光陰は過去の中に消え去るにあらずや。稻葉濃州、曾て長日の勤仕、懈怠の念を生ずるをいふ、澤庵禪師、爲めに左の語を書して誡めていふ。

此日無再日、光陰一尺璧

◎處世論

◉努力生活

思へば日々の別れかな
　昨日の今日に又も過はねば

と、濃州、常に之れを服膺して怠るなきを得たりと、時は金なり、金の空費すべからざるが如く、時も亦空費すべからず。人の一生は時間の連鎖なれば一時を空費するものは自ら生命の一分を削り去るものたり之れをフランクリンに聞く、

汝、生涯を愛するか、さらば汝の時間を徒費することなかれ、汝の生涯とは汝の時間より成るものなればなり

と、汝の生涯を愛す、汝は汝の時間を活用せざるべからず。如何に時間を活用すべきか、そは汝が職務に對する怠りなき勤勞努力の外なきにあらずや。唯だ一日、唯だ一時、唯だ一分、唯だ一秒、嗚呼、これ去つて復た來らざるなり。

既に一たび去つて復た來らずとせば時間の規律を嚴守するはこれ努力生活の要義たるや言を待たず。ジョン、シンクレーアは其の大學に遊べる頃より一日の時間を左の如くに配當して之れを實踐し八十二歳の高齡に達するまで孜々として倦まず、終に生前著はす所の書十種十八卷、其の監修の下に編纂せられたるもの四種合せて百六卷、各種の小冊子に至りては三百六十種を下らざるの大著述を成しぬ。

睡眠　七時間、　服裝　半時間、　食事と娯樂　二時間半、
運動　二時間、　學業　十二時間、

佛語辭書によりて有名なるリットレは毎朝八時に起きて書齋の洒掃中は階下に於て雜務を旺掌し、九時より食事の時刻まで校正に從事し、一時より三時まで學藝時報に筆を執り、三時より六時まで辭書を編纂し、六時に食卓に就きて一時間を費し、七時より翌朝三時まで辭書の稿を續きて寢に就き、五時間の熟睡に元氣を恢復し復た八時に起きて怠ることなく八十の高齡を以て逝きしが佛國學士會院が全力を費しても三十年間を要すべき事業を六十二歳より着手し獨力を以て完成したりといふ、これ皆な時間の嚴守より來れる秩序ある努力の結果にあらずや。更にジョン、ラボックが其の著「人生の快樂」に

◉處世論

於て引用せる諸種の格言を擧げしめよ、

ジエレミー、テーロルはいふ　懈怠は世界に於ける最大の奢侈物なり、そは極めて貴重なる時間を放棄して顧みざるにあり、

チエスターフイルド公、曾て其の子を戒めて、時を徒費するはこれ得べき利益を失ふなり、之に反して能く時を利用するものは之れ夥多の利子を付して貯蓄し置くに異ならずと

ゲーテはいふ、爾にして眞に熱心ならしめば後と云はず、今直に此の瞬間に於て爲すべきを爲し始むべし。

勤勞は時の節儉にして努力生活の要義は時間の嚴守にあり。

精出せば水る間のなき水車

隨分精を出して稼ぎさへすれば金錢の通用滯も、この心は商人職人たりとも、水車の如し、寒中にも大晦日にも滯ることあらず、くる〳〵とまはることしてまはらざれは氷りて滯り勝ちなり。(心法抄)

るべからず。若し不精にして眼勉努力して怠るなくんば何の業かならざらむ、南都の明詮は學の成らざる

懈怠

水車の喩

を慨きて寺を逃れんとし偶ま雨滴の地に下りて穴を穿つを見て發奮激勵したりとシドニー、スミスは其の座右に

ジドニースミス

我、誓つて道路を發見せん、能はずんば自ら之れを開かんのみ、

と揭げて自己啓發の料としたり、運は天にありといへども、之れを開くは腕にあり勉めて倦まずんば天下何事が成らざらむ。偸安と姑息は汝が開運を妨ぐるの荊棘にして、處世の前途に橫はるの毒蛇たり、之れを拓き之れを除きて其の行ふべきを行ひ、其の爲すべきを爲す、此に大道の發現あり、吾等は一面には簡易生活に安んじて其の分を守るを忘れざると共に他面に於ては勇猛精進、歩々向上の大道に向はざるべからず、蓋し吾等の處世は保守と進歩との兩面を存す。保守的一面のみを以ては常に心中悶々の情に絶えず、一歩は止め、一歩は出す、徒に安んずるに專らにして兩足を出さずんば歩む能はず、吾等は此の兩面を調

處世の兩面

徒歩的精神

和して能く道を行くことを得、處世の大道も亦之れに異らざるにあらざるなきか、古人は彼の進歩に急にして心中悶々の情絶えざるものを戒めて

上見れば及ばぬことの多かりき、
笠きてくらせ人の世の中

といひて知足安分の要を說き、一足安立の地を得せしめたると共に、

下見れば我れに優りしものはなし
笠とりて見よ空の高さを

と示して因循姑息、進歩向上の志なきものを戒めて一足踏み出さしめんとす、人の世に處するの所詮は實に此に在り。步々其の脚痕下に注意して向上を怠るなくんば千里萬里豈に必らずしも遠しとせんや、昔、江戸より京都に使ひする飛脚を業とする老人あり、足頗る健にして常に壯者を凌ぐ、同日同時に江戸を出でしものにして、何時しか二三日の遲れを此の老人に取る。壯者、禮を卑うして步行の法を老人に問ふ、老人答へていふ、東海道は坦々として何の險なけれど、街道處々に赤き石あり、此の石をだに踏まざれば足の疲れ

少くして終に諸子を凌ぐのみと、壯者其の敎を奉じて脚下に注意し步々赤石を求むるに五十三驛、一もかゝるものあるなし、而かも行程平生に越え常に十日を費す所、七日にして達す、歸路亦其の石を求むるに痕跡だもあらざりしも、行程の早きこと往路の如し、此に於て老飛脚を問ふて赤き石の求め難きも其の行程平生に越えたるを告ぐ、老飛脚呵々大笑していふ、赤き石もとよりあるなし、唯だ汝の脚痕下に注意せしめたるのみと、一話以て處世の箴と爲すべきにあらずや、步々其脚痕下に注意して怠ることなき努力的生活こそ、汝が成功の要義なれ。

五　趣味生活

仔細に世人の生活狀態を視察するに大約之れを五類に分つことを得べし。一は最も擯斥すべき罪惡生活にして惡を行ふて恥ることなく自らいふ、人生僅か五十年、終に死の運命を免るべからず、營々として働いて抑も何かせん

趣味生活

寧ろ太く短く愉快に生を送るに如かずと、彼等に道念なく彼等に正義なし、共同生活を害し進歩發達を妨げて獨り自ら樂まんとす、彼等にして跳梁跋扈せんか、社會一日の安なく國家一瞬の寧なし、此に於て法律なるものあり彼等を捕へて之れを社會と隔離し、其の自由を奪つて惡業を逞うせざらしめんとす、二は國法の罪人たることを以て生活法の範圍とし、法律にだに背かずんば如何なる罪惡も行ふて不可なるなしと心得、唯だ法に觸れざるを以て足れりと爲す法律的生活にしてこも亦未だ人生の本務に於て貢獻する所のものといふべからず、國家は素より何等の制裁を彼等に施す能はずと雖も、社會の共同生活を害すること少からざるものあり、殊に文明國の法律は正條に遵據して其の疑はしきものは之れを罰せざるが故に僅に一步の差によりて公々然社會に橫行せるものを生じ、法律之れを許すも社會に於て忌避せらるゝもの少からず、三は此の社會の制裁を範圍として人に誹られじ譽められたしとの用意を以て生活するものにして滔々世間此の類最も多し、彼等が善を爲すは名聞を得んが爲めなり、彼等が惡を爲さゞるは世評を恐るゝが故なり、之れ

法律生活

社會の制裁に基く生活

道義的生活

道義的生活と趣味生活

を前者に比ぶれば優れること數等なりと雖も、未だ以て人生の本務を悟了して道を行ふものといふ能はず。四は世評の如何は問はずもあれ。社會の共同生活を助け、其の進步發達を計るは人生の本務なり、我れ此の本務を行ふ、これ人たる我れの當に爲さゞるべからざるの事たりと、之れを道義的生活といふ、其の生活を簡易にするは自ら守る所を守るなり、其の努力奮鬪止まざるは其の盡くすべきを盡くすなりと、殆んで生活の上乘に類すと雖も、尙ほ一糸の其の間に蟠るあつて吾等の理想と同じからず、吾等は更に五の趣味生活に入らざるべからず、道義的生活には義務敢行の思想ありて其の本務を完うする上に於て聊かながらも苦痛の伴ふ感あり。趣味生活は此苦痛より解脫し、本務遂行の上に愉快を感ずるにあり、予曾て此の二者を說明して、

既に宇宙の大道を感得し人生の要路を看取す、吾等が生活の本義は明かになつたのである、吾等は生きんが爲めに働くにあらずして働くべき爲めに生くるのである、其の働くは生存の爲めにあらずして道の爲めでなければならぬのである。かく考へて來ると我等は此生活を以つて一種の苦痛なり

とは考へないでおらうか。誰れも働きたいといふものはない、遊んで居りたいといふのが人の常情である。それに對つて働かねばならぬといふのは強ゐて厭ふべきことをなさしむるので何の面白味もないことゝなる。人生はしかく無趣味なものであらうか。人生を斯く無趣味なものとすれば、生活は一つの苦痛である。吾等は此の苦痛を忍んで生活せねばならぬのであらうか。道の爲めに盡くすといふ名は立派であるが、我身に取つては苦痛ではなからうか、朝起きといふことは善いことであるが、眠い目をこすりながら起きねばならぬといふことは苦痛ではないか。自身が思ふまゝに放恣なる生活をしてこそ樂しくもあれ、道を行はねはならぬといひ、道に背いてはならぬといふのは埒に繋がれたる悍馬の如く全く自由を束縛せられて居るので、毫も樂しきことはない。古人が人生を苦の海といひ涙の谷といふたのも無理もなきことゝ思はれる。併しこれは未だ修養其の功を積まぬからで、修養其の功を積んで我と道と一になつたならば思ふがまゝに道に順ずることになるので、朝起きはつらいことであるが一日より二日、一月より二月、一年より二年、三年、四年と早起きの習慣を造れば自然に起きらるゝといふ所にまで達し、此所に達せば早起きをせねば不快を感ずるといふやうになる。かくなれば知らず識らず道に順ずることが出來るのである。何の苦痛もないではないか。かくいへば又其の修養功を積むといふことが苦痛であるといふ人があらう。然り強ゐて狂ひ易き心を止め散じ易き安念を抑へて精神を修養するといふことも苦痛といへば苦痛でないことはない。されど、そは其の當初のみの苦痛で、これを繼續して行けば慣ひ性となつて苦の苦たるを感せぬやうになる。繼續して行けば苦の苦たるを感せぬやうになる。繼續して行けば慣ひ性となつといふ人があるであらう。論歩もこゝまで進んで來れば直に根本義を明にすることが出來る。元來苦といひ樂といふのは其人の心の持ちやうで、爲さなければならぬ義務であると感ずればこそ苦痛であるが。喜ばしや今日も亦かく爲すことが出來ると思へば快樂である。朝早く起きて今日も働かねばならぬと思ふからつらいのであるが、今日は一日遊び暮らすことが出

感謝の生活

趣味生活と宗教生活

◎趣味生活

來ると思へば自然に朝早く起きらるゝではないか。道を行ふといふことを義務と思ふから苦なので、これが道義的生活と宗教的との異る所で、道義的生活は義務であると思ふて道を行ふのであるが、宗教的生活は權利であると思ふて行ふのである。權利といふのは少しく穩當な辭でないが、先づ一應はかう見ることが出來る。更らに適切なる語を以ていへば道義的生活は義務の生活であるが宗教的生活は感謝の生活である。生を此天地に受け自から其化育を助くるの業を勵むことを得る、於戲これ何の幸ぞやと感じてゆくので、厭やゝながら行ふのでなく樂しんで行ふといふ中に生活の趣味は存するのである。

趣味生活は宗教生活なり。其の簡易生活に於ても唯だ努めて己に克ち、強いて慾を制するのみならず、其の克己制慾の上に無限の趣味を感じ、何のその百萬石も笹の露と喝破する安心の一境を拓き、我が心秤の如し、人の爲めに低昂を作す能はず

（諸葛孔明）

（一茶）

◎處世論

同情

と毀譽の外に超然たる見地を養ひ、其の努力生活に於ても、人を相手とせずして天を相手とし、不斷の力行に無上の趣味を感じ、道を行ふを以て嚴格なる道德上の命令に出づとは思惟せず、

義務を以て寧ろ親切に且つ慈悲ある母の如く、常に吾等を冥護して此の世界の中に於て憂慮なからしめて平和を與へんとするものなり、（ラボック）

と思惟し感謝怡悅の情を以て之れを遂行する所に、眞に生活の趣味を感得す。苦樂は悉く汝の心にあり、汝の心にして歸着を得んか、煩悶懊惱跡なく消えて、

春有百花秋有月　夏有涼風冬有雪　若無閑事掛心頭　便是人間好時節

（無門）

たるべし。如何にせば吾等の心をして安からしめ吾等の生活をして趣味あらしめ得べきか。生存競爭優勝劣敗の社會生活を圓滿ならしむる同情、これ實に趣味生活の要素なり。乾燥無味なる社會も之れあるが爲めに春風駘蕩の和樂を得、賤が伏屋の侘住居、親は子を、子は親を、夫は妻を、妻は夫を相思

ひ相慕ふ中に和氣の靄々たるものあり、金殿玉樓の裡も親は子を疑ひ、子は親を疎んじ、夫は妻を忌み、妻は夫を嫌ひたらんには秋風蕭條、生活の趣味何れにか求むべき。源義經の屋島に戰ふや、其の臣佐藤繼信、彼れに代りて能登守敎經に射らる、義經、繼信の手を執つていふ、「主となり家來となる宿世如何なる緣にてありけん、死なば諸共と思ひしに汝を先き立つること遺憾なれ」繼信莞爾として「抑も初めて國を出でしより命は君に捧げしに、今、君の御身に代りて死すること、繼信、身にとつて此の上の喜びやあるべき」と主は臣を、臣は主を相思ふ所に殺伐なる戰記に一枝の花を添えたるにあらずや。俳諧師松雨の妻が

我が子なら仲にはつれじ夜の雪

の一句は同情の念溢れて今尙ほ人口に膾炙し、

思へたゞ使ふも人の思ひ子を

我が思ひ子に思ひくらべて

の敎訓は人心の秘奥を突く、人と人との關係は此の同情によりて初めて趣味

あり。我れ同情を以て人に接す、何人か動かざらむ、社交の快樂は此に在り、

マアカス、アッレリアスいふ、

汝は己れを樂ましめんと欲せば汝と共に生活する所の人の美德を思ふべし、

何となれば美德の我が知れる所の人に於て顯るゝを見るより樂しきはなし、

と、同情の普及は唯だ人と人との間のみならず、これを一切の動物に及ぼして、

（德、禽獸に及ぶ）

やれ打つな蠅が手をする足をする　（一茶）

痛せ蛙まけるな一茶これにあり　（同　）

といひ、又は

行水のすて所なし虫の聲

てすりにもたれて化粧の水を

何處へすてよか虫の聲　（鬼貫）

とこれ實に德禽獸に及ぶの概あり、（高杉晉作）

朝貌に釣瓶とられて貰ひ水

之れを植物に及ぼして、

（千代）

◎趣味生活

といひ、此の觀念を擴充して一切萬物に及ぼし、

おもしろや散るもみぢ葉も咲く花も
おのづからなる法の御姿　（青樹）

と觀ずるに至ては、天地を以て趣味の顯現、同情の一塊とし、我が日常生活に無限の趣味を感ずるにあらずや。吾等の謂ふ所の宗教生活なるもの則ち之れなり、セント、ベルナードは宗教の見地より生活を四段に分類して、

天地は趣味の顯現

宗教生活の四段

一　己の爲めに己を愛す
二　己の爲めに神を愛す
三　神の爲めに神を愛す
四　神の爲めに己を愛す

とす。己の爲めに己を愛するものは主我的生活なり、何等の趣味あるなし、己の爲めに神を愛するものは之れ宗教を主我的に利用するものにして未だ生活の眞趣に合せず、神の爲めに神を愛す、其の敬愛の清き喜ぶべしと雖も、終に現實生活と沒交渉たる超越主義に流るゝの弊あり。吾等の望む所は吾等

の現實生活に於ける一擧一動を以て直に神に對する感謝の生活なりとし、吾等が日常の行動を以て佛祖に處する報恩の作業なりとするに至て、此に趣味を感得するにあらずや。京都に大黒屋傳兵衞なる質商あり、頗る慈善の念に富み、少しく利あれば常に之れを貧民に施與す、中山の智眞老師、其の見地を試みんと欲し、店に入れば、傳兵衞、帳合に餘念なし、老師直に問ふ、汝、今何をか爲すと、傳兵衞答へて曰く、大般若經を轉讀すと、老師、更にいふ、汝、其の大般若經によりて何等の功德をか得る、傳兵衞、愍懣に禮して、我れ日夜此の經を轉ずることによりて家內餓えず凍えず、且つ貧民を賑はすことを得と、活宗教の活面目は此に在り、かくて以て其の生活を趣味あらしむるを得んか。

活宗教の活面目

◎處世論

第四章　修養法

一　身體の修養

目的と手段

目的の中に手段は定められ、手段の中に目的は期待せらる。西せんとするものは西に向ひ、東せんとするものは東に向ふ、門を出づる一歩以て其の志す所を窺ふべし。上來縷述せる修養に關する諸種の論議は早や既に其の手段方法を明示して復た重說するの要なきに似たりと雖も、暫く茲に其の洩れたるを補ひ、其の散れるを集めんか、其の修養せらるべき主體の上より云へば、之れを身體の修養と精神の修養とに分つべく、其の修養の方法より云へば靜中の修養と動中の修養とに分つべし。蓋し身心の二や分つべからず、動靜の二や偏すべからず。健全なる精神は健全なる身體に宿り、病者の身體常に病的思想に流るゝを免れず、靜あつて動なきものは自調獨善に陷り、動あつて靜なきものは安立の地を得るに由なし。衛生の遵守、健康の保持は身體修養

健康と生活

の靜的方面にして之れあつて能く黽勉力行の動的方面を完了すべし。身體にして贏弱ならんか、志を立てゝ道を行はんとするも、身、心に伴はず、腦、手と一ならず、徒らに心神を過勞して而かも其の功なきに了らむ、身體の健康は人生の本務を遂行するに於て第一の必要條件たり、更に其の遂行に趣味あらしめんとするに於ては健康ほど肝要なるはあらざるべし。ロングフエローはいふ、

健康を伴はざる生活は重荷なり、されど健康を伴へる生活は愉快なり

と、吾等の身體は精巧なる一個の機械なり。二百個の骨骼は個々其の用を異にして圓滿に調和せられ、五百の筋肉と無數の血管とは之れを滋養し、無數の神經は之れを齊整し其の血管が中心たる心臟は一年三千萬回の鼓動を怠らず、二百萬以上の汗腺は體溫を整へて皮膚内外の交通を掌り、伸さば數里に亘るべき動脈、靜脈、毛細管あり、血球と稱する小有機體は算すべからざるの多數に達し、僅に一眼球に就て見るも水晶體あり、水樣液あり、硝子樣液ありて各々精巧を究め、硬膜、脈絡膜の微妙なる、紙より薄きもの九層より

◎身體の修養

成る網膜は之れを掩ひ、其の内部は光の振動に感ずる三百萬の錐體、三千萬の柱體これを粗成すといひ、更らに活動の源泉たる腦に見んか、灰白質の細胞は其の數六億に下らず、是等の細胞皆な各々數千の分子を有し、其の分子は又數千百萬の原子より成ると。粗雜なる一個の時針、一臺の機械だに少し注意を怠れば直に其の廻轉を止む、況んや此の精巧なる身體をや。グラッドストン、曾て人に語りていふ、

予が受け得たる健康は常に一哺に二十五度、咀嚼せよといへる古言を守れるにあり

と、些少の注意は以て其の健康を保持するに足る。古來の身體輕賤を排し夙に身心不二の敎旨を以て立つ佛敎には、醫經なるものあつて衛生の注意を示し、

病の十因

一 久坐（運動不足）　二 不臥（睡眠不足）
三 食不量（食物の過不足）　四 憂
五 愁　六 疲極（過度の勞動）
七 淫佚　八 瞋恚

橫死の九法

九、忍大小便

とし、僧祇律には橫死の九因を算して、

十 制上下風

一 饒益にあらざる食と知て貪り食ふ、
二 食を量らず
三 內に未た消せずして更に食ふ
四 強て咽下す、
五 已に消して出てんとするを強て制す、
六 食、病に應せず、
七 病に隨て算量せず、
八 服藥を怠る、
九 智慧とくして心を調ふる能はず、

と、支那最古の醫書たる「素問」には

飮食節あり、起居常あり、妄に作勞せず、精神內に守らば、病安んぞ從ひ來らん

◎修養法

素問

管仲と孔子

といひ、管仲が

起居時あり、飲食節あり、寒暑適すれば則ち身利して壽命益さん、起居時あらず、飲食節せず、寒暑適せざれば則ち形體累して壽命損せん

と示し、孔子家語に

人三死あり、而も其の命にあらず、己れ自ら取るなり、夫れ寢所時ならず、飲食節あらず、逸勞度を過すものは疾苦之れを殺す

とあるもの皆な衞生保持の必要をいへるなり。支那古來、仙術なるものあり養氣の法を實要して無病長生を計る、河合清丸氏其の著「仙家秘訣無病長生法」に於て之れを分ちて五とし示して曰く、

素食法

一　素食法　此の法を修し得る時は腸胃を壯健にし、能く食物を消化し、一切の飲食を悉く擧げて全身の滋養に供する故に食物より生ずる所の病根を其の根本より截斷すること、これ近時の所謂菜色論にして說の可否は暫く學者の研究に委するも飲食に注意して其の消化を計り、一切の飲食を擧げて全身の滋養に供するの必要なるは言を待たず、

導引法

二　導引法　此の法を修し得る時は能く氣血を循環して又淹滯澁着せしむることなし。故に氣血より生ずる所の病根を根本より截斷すること、これ按摩按腹マッサージーの法にして身體を摩擦して氣血の循環を計る、其の衞生の一法たるや疑ひなし。

灌水法

三　灌水法　此の法を修し得る時は毛孔を收縮し、皮膚を堅固にするにより て風寒暑熱等の外邪も亦冒すべきやうなし。故に外邪より生ずる所の病根を根本より截斷す、

と、これは近時流行する所の冷水摩擦は之れと導引法とを兼ねたるものなり。毎朝之れを實行する人の皮膚の堅固なるは屢ば實驗家に聽く所なり、

觀念法

四　觀念法　此の法を修し得る時は人の精神を自在に運轉遊戲せしむるによりて又鬱屈煩悶の羈絆なし、故に精神下より生ずる所の病根を根本より截斷す、

◎修養法

と、身心不二なり、內觀の法を修し靜坐冥想心神をして愉悅の境に遊ばしむ
悶々の情、跡なきに至らんか、(そは尙ほ後に說くべし) 氏は以上の四法を以
て一切の病根を截斷するの法とし、更に

吐納法　**五**　吐納法　此の法を修し得る時は元氣內に充實し、精神上に快活なるが
故に、一切の諸病は三舍を遽け、瘴癘瘟疫等の氣も寄りて付くべき手
段なし

病前自ら防ぐ　と、此の吐納法は深呼吸法にしてベークマンの强肺術の如きも亦一種の吐納
法たり、近時衞生の術大に進歩し吾等の身體に對する諸種の注意は皆な健康
保持を資するものたり、吾等は之れによりて以て彼の邵康節が所謂
爽口物多終作疾、快心事過必爲殃　知君病後能服藥　不若病前能自防
の覺悟を忘るゝなくんば以て人生の本務を行ふに於て支障なかるべきか、氣
力內に充つ、外、以て不撓の力行に當るべし、自ら身體を虛弱ならしむるは
確かに不德の行爲にして、不德の行爲は又人をして不健康ならしむるの因た
り、後水尾上皇、曾て江村專齋に對して養生の道を問ひたまふ、時に專齋齡

既に百歲、視聽少しも衰へず、答へていふ、「臣、平生唯だ一些字を持す、飮
食些し、思慮些し、養生些し、此の他豈に術あらんや」と、孫思邈に十二少
の說あり、

十二少　善く生を攝する者は常に思を少くし、念を少くし、慾を少くし、事を少く
し、語を少くし、笑を少くし、愁を少くし、樂を少くし、喜を少くし、思
を少くし、好を少くし、惡を少くせよ、此の十二少を行ふは性を養ふの都契
なり、

と、身體の修養は精神の修養と相離れず。吾等は道を行ふことを以て目的と
す、一日健なれば一日其の道を行ふべく、一日病めば一日其の道を怠る、我
が此の身や輕賤すべからず、正眼國師は近代の龍象なり、常に衞生を重んじ、
衞を以て飯を量り飮食頗る謹み、晚年に至りて廢せず、僧あり笑ていふ、
「毫せり、餘命を貪つて何をかせむ」と、師、戒めていふ、「生きて人に益な
きものは夭折するも惜むに足らざるも生きて人に益あるものは一日殘喘を保
てば兆民一日の利あり、豈が生を貪ること俗よりも甚しきは之れが爲めなり」

と、人々此の見地あり以て內、衞生を遵守し、外、道を行ふに足らむか。

二　靜坐と修養

靜坐の必要

動き易きは吾等が浮泛の心にして迷ひ易きは吾等が現實の感想なり。徒らに皮相の觀察に動かされて事物の眞意義を誤り、妄りに目前の衝動に惑はされて虛を以て實と執じ、實を以て虛と爲し、紛々擾々、是非善惡の葛藤裡に沒頭して自ら救ふ能はざるに至る。此の浮泛の心を靜め、此の現實の迷ひを轉じて紛々擾々たるものを統一し、是非善惡を整理して心裡の靈光に接觸せしむるもの靜坐より切なるはなし。想ふに吾等が智識的慾求は不斷に相續して隘を得ては蜀を望み、一を得ては二ならんことを欲して止ることなく以て智識の啓發を計るべけれど、唯だ其の勢ひに任せて靜思反省の機を與へざらんか、其の啓發せられたりと思惟する智識も實に僅に新陳代謝したるに外ならずして、實質に於ては何の加ふる所なきものたるを免れじ、蓋し智識增進

の方法一にして足らずと雖も、其の必要なる讀書と觀察とに過ぎたるはなし。されど唯だ書を讀みたりともこれを熟慮し靜觀して自己の思想系統中のものとするにあらずんは萬卷の書を讀破するも何の功なく、唯だ觀察を事とするとも、綜合し分類し以て之れに一定の秩序を與ふるにあらずんば觀る所多きも偶ま以て其思想を惑亂するに止らん。讀書をして功あらしめ觀察をして利あらしむる一に之を靜思反省の力に待ち、異を分ち同を合し末より本に遡りて第一原理を求め、之れを根幹とし、智識の系統を我が心內に明にし、其の大綱を攫んで綱目をして自ら知り易からしむるを要す。朱子いふ、

毎日半日靜坐、半日讀書、之れを行ふ數年長進せざるを患へず

と、唐彪の「讀書作文譜」にいふ、

世人終日書を讀むで輟めず、竟に片時の靜坐なきものあり、これ唯だ讀書の益あるを知て而して靜坐の却て大なるを知らざるなり、

と、靜坐冥想の時、吾等が曾て學修せる所のものは意識の表面に出で來りて今、得たる所のものと比較按排するの便を與へ、靜坐良久して小は大に、

◎靜坐と修養

智識の整理と靜坐

末は本に統合せられて吾等の智識を整理し之れをして整然たる系統の下に統一せしむ。此に吾等の見識立ち又他の爲めに瞞せられず。末に走つて本を知らざるものは誤られ、小に通じて大に疎なるものは迷はさる、吾等が智能啓發の途上に於ても靜坐は缺くべからざる必要方法たり。若し夫れ其の靜坐が與ふる所の趣味に至ては津々として盡きざるものあり、予曾て「冥想論」の劈頭に之れを示していふ。

靜坐の趣味

金聖歎は絶代の才筆なり、彼れ曾て冥想恍惚の間、詩境湧然として起るの狀を叙して曰く、「筆、下さんと欲して而して擱き、紙、舒べんと欲して而して仍は捲き、墨、磨せんと欲して而して仍は停む、而して吾の才盡きて吾の髯斷つ、而して吾の目瞎み、吾の腹病む、而して鬼神來て風雷忽ち迎ふ」と平居動靜の間、胸境齷齪として客感俗想、蝟の如くに集り、左顧右盼、爲さんと欲して爲す能はず、行はんと欲して行ふ能はざるも、徐ろに想ひ、靜かに考ふるの時、吾人はこゝに神籟の聲を聞き、身は明窓淨几の下にあつて、心は遠く白雲流水の間に遊び、悠然として天地と同化し、宇宙、手に在り、萬化、身に生ずるの快を感じ、恍惚として、我、吾を忘れ、奇思妙想、忽然として起りて殆んど鬼神來て風雷忽ち迎ふの感なき能はざるに至る。

意志の鍛錬と靜坐

これ豈に冥想が吾人に與ふるの賜にあらずや、煩悶苦惱、我、吾を制する能はず、心緒亂れて絲の如く、慾火々々として燃ゆるの時、暫く冥想の樂みに耽らんか、清風一陣心火を滅し、快刀一振亂麻を斷つが如く、吾人はいひ知れざるの爽快を感ず。

靜座冥想は趣味の源泉なり。胸中不盡の興趣滾々として湧き、恍として象あり、惚として理あり。座禪は之れ大安樂の法門、冥想はこれ心身慰安の一境なり。これ啻だ智能の啓發趣味の涵養に於てのみならず、意志の鍛錬に於ては殊に其の功の切なるを見る。請ふ勝海舟が實驗を語らしめよ、

予が本當に修行したのは劍術ばかりぢや、一體予の家は劍術の家筋であるからとて、予の父も骨折つて修させんと、當時聲劍の指南をして居た島田虎之助といふ人に就けた。此の人は世間普通の聲劍家とは違ふ所があつた、島田のいふには今時皆人のやつて居る劍術はほんの型ばかりぢや、折角の

◎修養法

◉靜坐と修養

ことに足下は本當の劍術をおやりなされと、それより島田の塾に詰めて自ら薪水の勞を取つて修行した。寒中になると島田の指揮に從ひ、毎日稽古が濟むと、夕方より稽古衣一枚で玉子權現に行て夜稽古をした。何時も先づ拜殿の石段に腰をかけ、瞑目沈思心膽を錬磨し、更に起て木劍をすぶり、更に復たもとの石段に腰をかけ、再び心膽の錬磨にかゝり、それより復た起つて木劍をすぶりし、此の如きもの數回、遂に天明に至る。それより直に歸て朝稽古を爲し、復た夕方より王子權現に出掛け一日も怠らなかつた。始めは深更に唯一人、森々として樹木の茂れる社内に立ち居ることとて何となく、氣佗れし寒風梢を拂ふ聲、物凄く覺えず毛髮を竪てたが、修業の積むに從ひ何ともなく感じなくなり、遂には四面寂寥の中にあつて、ヒユウ〳〵と梢を掠める寒風の聲を聞くことが一種の趣を添へるやうになつた。

と、蓋しこれ靜座が意志鍛錬に功あるの一例にあらずや。意志鍛錬の第一義は自己本來の主人公を徹見し、外物の爲めに動かさるゝなき根底を養ふにあり。我が心外物に動かさるゝの時、思想は散り亂れて終に自己本來の面目を沒却して順境にあつては心踊り、逆境にあつては心萎え、毀譽に迷ひ褒貶に惑はされ、喜怒常なく、苦樂定らず飜々一紙片の風に飜弄せらるゝが如く、西に東に南に北に、唯だ外境の指す所に從ひて自己に定着する所なきに至らん、かくては宇宙に於ける自己の存在、抑も何の意義かあるべき。試に靜思一番、浮泛の想を去り、散亂の心を鎭めよ。心裏の秘奥に潛める實在の靈光は我が存在の意義を明かならしめ、天柱挫け地維斷けんとも我此にあり、何物か其の存在を左右せんとの自覺を生じ、萬人よし否といふとも、我は斷乎として然といひ得る、見地を養ひ、毀譽は面上を吹く春風の如く、苦樂は鐵牛角上の蚊にも似て平然として能く逆順の二門を超越し、順境にあつて撓まず、逆境にあつて挫けず、切りむすぶ太刀の下こそ地獄なれ踏み込み行けばあとは極樂

といへる劍道の歌を吟じつゝ、雲霞の如き官軍の中を過ぎて「朝敵山岡鐵太

◉修養法

◎靜坐と修養

郎、此度總督府に對し歎願の筋あり罷り通る」と呼はりたるの豪膽を養ひ、彼の快川紹喜禪師が火煙裏にありて、

安禪は必ずしも山水を須ゐず、心頭を滅却すれば火も亦涼し。

といひて火定に入りしの勇猛心を鍛ふべし。

吾等は靜坐冥想によりて智識を整理し探ねて其の源底に入り差別の相の中に平等の體あるを看取するに至ては絶對不二の境に安立して事物を達觀するが故に、生死も二なく、榮辱も二あらず、毀譽は唯だ相の異にして苦樂も亦其の本一なり。佐藤一齋、靜座の功を說いふ。

靜坐の功

靜座の功は定氣凝神、以て小學一段の工夫を補ふに在り。要は須く氣容は肅に、頭容は直、手容は恭に、神を背に捿ましめ、儼然として敬を持し、就て自ら胸中多少の雜念、客慮、貨色、名利等病根の伏藏を搾出し、以て之を掃蕩すべし。然らずんば徒爾のみ。

と、胸中に於ける病根の伏藏を搾出す、此に於て心地快濶、理眼明かに絶對不二の本體を照らして又事を過らず。吾等の意志の弱くして己に克つの工夫に於て缺くる所あるは此の達觀に於て足らざる所あればなり。ジョン、フエルソンいふ、「汝若し汝の意に滿たざることあれば一より十までを算して而して後に怒れ」と、一より十を算す、散亂の心漸く鎭りて秘奧の靈光此に現はれて又怒るを要せざるべし。筆疇にいふ。

榮辱と達觀

辱の來るや其の人の如何を察すべし、彼れ小人ならんか卽ち直、我にあり、何の怒ることかあらん、彼れ君子ならんか、直、彼れにあり、何の怒ることかあらん。

と、これ達觀の與ふる敎訓にあらずや。唯だ目前の感情に驅られて靜思反省の暇なきものは此の達觀を欠き、事を過らざるや稀れなり。靜坐は能く之れを救ふ。日に三たび省みて過なからんことを期したるは支那の哲人にして、日々侍者に命じて「汝も亦人たるを記憶せよ」と呼ばしめしは希臘の賢王なり。吾等も亦日夜に反省して我が行動の過誤なかりしや否やを檢せざるべからず、其の之れを爲す亦靜坐冥想より便なるはなし。此の反省に伴ふて吾等を警覺し來るものは懺悔の念なり、人誰か過なからん、過つて改むるなきが

懺悔と靜坐

◎修養法

故に罪に罪を重ね、惡に惡を積み、しかも自ら其の罪惡たるを忘れて終に墮落の深淵に陷る。之れをして自ら救はしむるものは懺悔の外あらじ。涅槃經に曰く、

先に罪を爲すと雖も、後能く發露し悔ひて懺悔し敢て作さゞるは猶ほ濁水に明珠を置けば珠の威力を以て水即ち清きが如く、陰雲除けば月則ち清明なるが如し、惡を作して能く悔ゆ、亦復た是の如し、懺悔して慚愧を想ふものは罰、則ち陰滅して清淨なること本の如し。

と、懺悔は力なり、能く其の性格を變換し、吾等をして向上進歩せしむ。紛々擾々定めなきの時、吾等の心は常に外物に追はれて此の反省を欠くが故に亦懺悔の惠澤に浴する能はざれど、中霄人なく夜靜かなる時、獨り短檠に對して日常の行動を想ふ、誰か慚愧の我に迫るものなからん。こも亦靜坐の力にあらずや、これら倫理的價値の外更に其の身體に及ぼす影響を云はんか、

司馬承禎は、存想の說を立てゝ、想とは我の身を想ふをいふ、目を閉ぢて即ち存は我の神に存するをいふ、

自己の目を見、心を收めて即ち自己の心を見よ。心と目と皆な我が身を離れず、我が神を傷めんとすれば則ち存想の漸あり。凡そ人の目は終日他人を見る、故に心已に外を逐ふて走る。終日他事に接す、故に目も亦外を逐ふて瞻る。營々たる浮光、未だ嘗て內を照らさず、奈何ぞ病み且つ夭せざらんや、是を以て根に歸するを靜といひ、靜を復命といふ。成性存々は衆妙の門、此れ存想の漸、學道の功半す、

と、身體の修養に於ても靜坐冥想は吾等に偉大の功あるなり。道敎者流多く此の法を語り以て心身慰安の術とす、

人は氣中に在り、氣は人中に在り、天地萬物、氣を須て生せざるはなし、能く氣を行ふ者は內以て身を養ひ、外以て惡を却く、然も之れを行ふに法あり、子より已に至るまでを生氣の時と爲す……常に生氣の時を以て鼻中に氣を引き入るを多くし、出すと少くし、閉ぢて之を數へ、九九より八七々、六々、五々に至りて止む、乃ち微かに之を吐き、耳をして聞かしむる勿れ、之れを習ふこと旣に熟すれば增して千數に至る此れを胎息と爲

◎修養法

す

子より已に至るは午前なり、朝暾麗かに上るの時、靜坐其の息を算す、これ亦一個の衛生法にしてかねて靜坐の工夫たり。禪宗に於ては坐禪を要とす、

坐禪

禪は詳しくは禪那、靜慮の義なり、其の法とさる所は、清閑の室又は樹下石上に厚く坐物を敷き、身の衣帶を寛くし、先づ右足を以て左の脾の上に安んじ、左足は右の脾の上に安んじ、右の手を左の足の上に置き、左の掌を右の掌の上に置き、兩手の大拇指をして相拄へしめ、正身端坐、左に側ち右に傾き、前に鞠り後に仰ぐことなく、耳と肩と相對し、鼻と臍と相對せしめ、舌を上の齶に掛て唇齒相着け、目は須らく常に開き、鼻息微かに通じ、身既に調ふて欠氣一息し、左右に搖振して兀々として坐定するにあり、これを坐禪の正式とす。「坐禪のこと拙著「冥想論」に詳說したれば此に略す）かくて抑も何をか爲す、瑩山禪師曰く

坐禪の目的

夫れ坐禪は直に人をして心地を開明し、本心に安住せしむるにあり、之れを本來の面目を露すと名け、亦本地の風光を現すと名く。

二九八

（抱朴子）

と、心靈の本源を開きて自己の實在を明にするにあり。かくて工夫功を積んで、

悟境

一夜定中、忽然として前後際斷、絶妙の佳境に入り、恰も大死底の人の如く、一切物我あるを覺えず、只覺ゆ吾腔内一氣、十方世界に瀰滿し、光輝無量、須臾にして蘇息するものゝ如し、視聽言動、豁然として平日に異る、是に於て試に天下の至理妙義を求むるに頭の上に明かに、物々上に顯かに獻喜の餘自ら手の舞ひ足の踏むを忘る、

靜的修養の極致

の境に至らんか、靜的修養の極致に達したりとも云ふべきか、佐藤一齋も亦いふ、

深夜闇室に獨坐す、群動皆な息み、形影俱に泯す、是に於て反觀するに但覺ふ方寸内、炯然として自ら照らす者あるを、恰も一點の燈火闇室を照破するが如し、此れ正に我が神光靈照の本體なることを認得しぬ、生命即ち此の物、道德即ち此の物、中和位育に至るも亦只此の物の光輝、宇宙に充塞する所なり。

◎修養法

◎靜坐と修養

と、然れども唯だ一時かゝる境地に入り靈覺の域に觸れたりとも、雲の如く煙の如くに消えて日常行中に應用する能はずんば、鏡の徒らに明にして、然かも萬象の影を映す能はざるが如き無用の長物たらん。鏡の用は萬象の影を映して其の爲めに汚されざるにあり、吾等は更に工夫一番して俗務蝟集の中にありて尙ほ且つ此の心を失はず、世事葛藤裡に交りて毫も此の澄靜を亂さざるの心地を養はざるべからず。これを動中の工夫とす、卍庵法語にいふ、

正念工夫は動作中に尤も修練すべし、必らずしも靜を求むべからず、往々靜なれば則ち修行事速かなるが如くに思ひ、動中は散亂する如く思へども、靜處の修練得力は動境に對する時に確實ならず、臆病懦弱の働きあるものなり、もし諸法に通達し、萬事に自在なることを得んと欲せば動中の工夫に超へたるはなし

と。榮根譚の所謂「靜中の靜は眞の靜にあらず、動處に靜の來て總に是れ性天の眞境、樂處の樂は眞樂にあらず、苦中に樂みを得來て總に心體の眞機を見る」もの則ち是れ。

されど吾等は先づ此の靜中の工夫によりて精神の歸着を定め、自己が心鏡を掩ふの塵垢を洗滌し、萬象をして歷然たらしむるの素を養はざるべからず、靜動二面は双翼兩輪にも似て相離るべからざれど、修養の第一歩としては先づ靜中の工夫より初むるを要す。

三　讀書と修養

人の書を讀む自ら四個の別あり、一は學修の爲めに讀むものにして主として專門の學科に限られ、二は常識養成の爲めに讀むものにして時代智識の修得を目的とし、三は品性修養の爲めに讀むものにして、主として聖賢の書を手にし、四は娯樂の爲めに讀むものにして主として文藝の述作にあり。學修の爲めに讀むものは記憶を專らとし一たび讀み得たることは之れを忘失するなきを計らざるべからざれば唯だ讀書するのみに止らず。熟慮靜思して理を

◎修養法

◎讀書と修養

推し則を求め、自己心内に秩序整然たる一系統として存置して遺失せしめざるの法を計らざるべからず。或は其の要點を備忘錄（ノートブック）に記入し、或は科段を分ちて本末を明にし、或は索引を設けて出處を明瞭にし圈點を施して一目の下に知悉せしむる等記憶の便を計り、其の大綱を捉へて逸失せしめざるを期せざるべからず。殊に學生時代にあつては潛心其の學科に向ふべきものなれば、我が書を讀むは之れ實に我が道を行ふ所以の素因なりとして側目を振らず專修するにあらざれば修養淺くして世に立つの後、悔ゐて及ばざること多かるべし。山陰に一老儒あり、青年の笈を負ふて東都に學ばんとするを送りていふ、「汝が成功の訣他なし、學修の間、希くは專門以外の新聞雜誌を見る勿れ」と、青年以て頑迷の語と爲し東都に入るに及びて雜誌店頭に諸種の新刊を獵り、朝夕新聞に親みて終に學業に專らなる能はず、終に志す所の學科を放擲して校を轉ずること再三、蹉跎落魄、同學の士の成功を羨み今にして老儒の言の迂ならざりしを思ひしと、老儒の言は少しく過激なれど客氣未だ定らず、志未だ堅からざるの徒が世に媚び俗に阿る新聞雜誌の記事に動かされ、或は

煽動的なる時事の評論に慷慨して自己の學習をもどかしとして中途に業を廢し終に生涯の方針を誤るもの多きは其例に乏しからず。吾等は強ちに新聞雜誌に目を觸るゝ勿れと極言するものにあらず、却て其の爲めに自己の研鑽を資することの少からざるを認むると雖も、事には主あり伴あれば伴の爲めに主を忘るゝことなく學んで餘力あるにあらずんば之れを讀まず、主とする所を專として學科以外に廣く參考の書を讀みて自己の立脚地を定め徐ろに世に立つの準備を盡すべし、既に世に立ちたりとも、專門の學修は之れを廢すべからず、時代の進歩に刻一刻も止ることなく、文運の發展は瞬時の休息なければ研究に研究を重ね思索に思索を積みて其の向上を計らざるべからざれど、唯だ專門學識のみを涵養して常識の養成を遺却する時は、折角の學修も以て世に應用する能はず、徒らに玉を抱て江湖に放浪せざるべからざるに至る、吾等は學識の世に貴ぶべきを知ると共に又常識の養成の等閑に付すべからざるを認めずんばあらず。

常識は時代の人たるに必要なる智識なり。之れなくして立んとするは地を

◎修養法

離れて行かんとするが如く危きこと岌々乎たり。

想ふに學識は常識の先驅にして、今日の常識は蓋し過去學識の積習なるが如く、今日の學識は亦未來の常識となりて人智の進歩を計るべきなれば、世は一日も學識なかるべからずと雖も、其の學識は常に常識の上に建設せられて初めて大功あると知らざるべからず。更に語を換へて云へば學識は研究に屬すべきものにして、常識は其の研究の結果萬人の認めて正しとなすに至りしものなり、地球を以て圓形なりとするは今日何人も正しと認むる常識なれど、過去に於ては一個の學識として存在したりしに過ぎざりしなり。若し夫れ今日尚ほ此の圓形説を信せずして過去の萬人が認めたるが如く平板なりと云ふものあらんか、こは學識に背くと共に常識に背反するものにして、名けて妄識といふもの之れなり、妄識は萬人の認めて不正と

學識は能く常識を導き、常識は能く學識の素地を成す。更らに他の方面よ

（「拙著人格の養成」）

妄識

り學識と常識とを分たんか、學識は一部の特別智識にして常識は一般に修らるべき普遍智識なり、普遍智識の素地の上に立つて特別智識も初めて功あるものなれば、何の業を習ひ、何の學を修むるものも現代の人たる以上は修得するの要あるものたり。外に見識なるものあり、思索達觀の力によりて常識の上に超越し、泰然に事を察し、凡俗未だ言はざるのことを言ひ、以て世を指導し人を啓發す。されどこも亦常識の素地の上に立つを要す、世には學識あつて見識なき人あり、見識あつて學識なき人あり。學識あつて見識なきものは徒らに書籍に囚はられ研究に縛られて終生營々世を指導する能はず、見識あつて學識なきものは放言大語の空見識となつて世を毒し人を害す。望む所は學識あり見識ある人ならざるべからずと、此の如きは之を萬人に需むべからず。吾等は先づ其の素地たる常識の修養を忘るゝなきを詮要となさいるべからず。さて此の常識修養に關しては時代の耳目たる新聞雜誌の力最も偉大にして、一日之れを見ざれば一日時代の進運に遅るゝの感あり。唯だ時代の進運に遅れざらんとするのみを以て吾等は新聞雜誌の力を認むるに

◎讀書と修養

常識の語義

あらず、上來常識の語義を暫く學識見識幷に妄識と比較して智的方面にのみ解したりしと雖も、其の語の含む所は智的のみにあらずして別に情的方面を兼ね、能く「人」を理解せしむるにあれば社會の縮寫たる新聞雜誌によりて人情の機微を察し人心の妙機を悟得するも亦其の修養に於て缺くべからざるものあればなり。されど吾等は唯だ新聞雜誌の力のみを以て常識修養に關する讀書を完備すべしとするにあらず、現代に於ける人類の生活狀態を察すべき地理書、過去に於ける人智の發展を覩ふべき歷史も亦其の修養に於て缺くべからざる讀書の料たり、

品性修養と讀書

若し夫れ書を讀んで品性の修養に資せんか、一句胸中に浸徹するものあり、一言肺腑を貫くものありて日常行中の雜念妄想を拂ひて心鏡明かに古聖先賢と相對するの感あるものあり、夜雨蕭條、獨り孤燈に對して古人を友とす、書中の語は悉く我が心の註脚となりて、我に反省を促し、我に奮起を勸む。西哲いふ志士三日書を讀まずんば自由の思想胸中に醱勃たらずと。史を讀んで當世を考へ、語を誦して人事を想ひ、時に金聲玉振の作に接して趣味を向上せしむ、之れを目に讀むは皮相の讀書法なり、心に讀むの時、書中の文字は皆な自家の得力となり、語簡にして意深く、左看右看、滋味の盡きざるものあり。朱子いふ、

史傳

凡そ文字を見る熟讀精思、之を久うすれば正文の邊、自ら細字の駐脚露出し來る、此れ方に自家得力の處、只外面註脚上の影子を尋るは終に事を爲さず。

讀書の快樂

と、机上聖賢の書あり、端坐して之れを味ふ、茶爐松風を送り、一炷の香烟、室に滿つ、これ人生の快事にあらずや。六經可なり、佛典可なり、老莊の書も亦心を養ふべく、バイブルも亦身を修むるに足る、更に偉人傑士の事蹟に目を曝す時、身は即ち書中の人となりて自ら一步之れに近くを想ふ。彼れも人なり我れも人、彼れ既に此の如き事を爲す。我れ豈に學んで及ばざらんや。蓋し偉人の事蹟は吾等の典型にして其の一擧一動は吾等を啓發し指導し、覺えず向上の思想を起さしむ。

◎修養法

人生不幸なるは讀書の趣味を解せざるより甚しきはなし、書齋に靜居して

萬國を經歷し、一室に兀坐して古人と遊ぶ、まことやゼームス、シナリーが「書籍を熟讀する時間ほど面白く且つ幸福なるはなし」といひ、ジョン、ハーシェルが「若し如何なる場合にありても予の周邊を離れず、一生の間、幸福と愉快との源泉となり、又如何なる人生の悲慘に遭遇するとも、猶ほ其の不幸を遠け、以て我が愁眉を開かしむるに足るの妙あるものを希ふものは讀書を撰ぶの外なし」といへる如く、吾等を慰藉し吾等を薫陶して其の憂苦を去り悲痛を除くもの讀書の如きはなし。多くの娯樂は對手を要す、されど讀書の快は獨り之を擅にすべく、多くの娯樂は所を選ぶ。されど讀書の樂は車上たると机上たると枕上たると、室内たると戸外たるとを問はず、翠滴る樹林の中も、月洩る伏屋の軒にても一卷の書は以て吾等に無限の快感を與ふべし。

讀書の利は之れのみにあらず、吾等が意志鍛練の習慣を養成するに於ても常に多大の利益を與ふ、心を潜めて難解の書を讀み、一字より一句に及び、一句より一節一章に及び、字々徐ろに咀嚼し、句々靜かに會得し、發奮激勵して之れを讀破するの快は他面に於て意志鍛練の好習慣たり。唐彪の讀書作

文譜にいふ、

人の書を看る先づ已むべからざると、已むべからざるとを分つべし。其の已むべきの書は解し易しと雖も必らずしも披閲せざれ。其の已むべからざるの書は極めて難解なりと雖も、必らず反覆して通ずるを求むべし。初め看る時、竟に茫然として一も知る所なき如きも、畏難の心を生ずべからず。時を逾へて再び看れば或は十中其の一二を曉らん。怠倦の心を生ずべからざるなり、時を逾へて再び看れば或は十中其の五六を解し、更に已むべきの心を崩すべからず、時を逾へて復び看ば工夫既に到りて解するを期せずして自ら明らかならん、大學に所謂力を用ふること久うして一旦豁然として貫通するもの豈に虚語ならんや。

と、難を棄てゝ易に就くは人の常情なり。されば自ら至難の書に當て反覆咀嚼一旦豁然として貫通するの快は到底唯だ易に就て自ら安んずるものゝ知り得べからざるの所たり。

何れの點よりいふも讀書は吾等が修養の一要件なり。此に注意すべきは書

籍の選擇なり。悉く書を信ずれば書なきに如かず。客氣未だ定らざる青年が書籍の爲めに惑はさるゝこと少からざれば其の選擇は又讀書家の忘るべからざることなり。

よく選び讀むべかりけり世の中は
人まどはしのふみし多ければ

書は多くして時は少し。徒らに多くの書を讀まんとして本を忘れて末に走り、讀むべからざるの書を讀んで讀むべきの書を逸したらんには追て及ぶべからざるものあり。されば青年の時代に於ては成る可く先輩の指導によりて書籍を選擇して誤るなきを期すれど、思慮漸く定り取捨之れを自らし得べき中年時代に於ては又一種の讀書法あり、手に觸るゝ所其の如何なるものたるを問はず、試に一萬卷を讀破することなり、胸中萬卷の書を藏す、世態人情に於て大に通ずる所ありて又他に喘せられず、近世の奇傑雲井龍雄之れを實行して得入する所ありしと、專門の學修に於ては素より用ふべからざれど常識修養に於ては利益少からざるべし。一日一卷を讀みて尙ほ十年を要する萬卷の讀書は其の人の見地を養ふこと多きや疑ふを要せず。

四　文藝と修養

嶷然として雲表に秀で八面玲瓏人に與へて見せしむる芙蓉の清容も、智的考察にのみ傾ける人の目には唯だこれ火山の代表的形狀にして海面を拔くこと何千メートルと打算するに過ぎざれど、情的鑑賞の眼を以て見んか、

仙客來遊雲外巓、神龍栖老洞中淵、雪如紈素烟如柄、白扇倒懸東海天

（石川丈山）

誰將東海水一瀉出玉芙蓉、蟠地三州盡、挾天八葉重、雲霞蒸大麓、日月避中峯、獨立原無競、自爲衆嶽宗

（柴野栗山）

と云はざるを得ず、此の鑑賞的態度を以て事物を觀察する所に文藝の趣味あり。凡そ人の事物に對するや、おのづから三個の態度あり一は考察的にして理を究め原を尋ね以て其の然る所以を究めんとし此に科學哲學の素を成し、

人心の三方面と三種の態度

二は利用的態度にして如何にして之れを人生に用ゐらしめんかとす、前者を智的と名くべくんば後者は意的なり、此の二者の外に鑑賞的態度なるものあり、專ら情の赴くに任せて其の美を享受し、此に滿足の境地を開く、等しくこれ月なり、其の何が故に輝けるかを研究するは第一の態度にして其の光線を利用して何事をか企畫せんとするは第二の態度なり、其の麗かに照り渡れるを見て「月や我れ我れや月かとわかぬまで心も空に澄める夜の月」と感じたるは第三の態度なり。素より人心の三方面の相分ち難きが如く、此の三種の態度も判然區劃せんはいと難くして、

池の面による月なみを數ふれば
今宵ぞ秋の最中なりけり

といへる鑑賞的の態度の中には幾分考察的態度の交り、直下數千丈、素絹を垂るゝが如き瀑布を考察する中には利用の態度加はらざるを得ず。唯だ飢餓凍餒を凌げば足るべき飲食衣服にも鑑賞の態度を棄て難きは人の常情にして、乾燥無味なる人生も之れあるが爲めに一段春風の吹き渡こを覺ゆ。若し人を

趣味と品格

して、心なく浮世を見るに東西に走り南北に行く人、多くは身を思ふ事にのみ足を空になして、吉野の花のあはれをも知らず、深草の鶉の聲を聞いても、焼てしてやりたいとばかり思ひ、後に何になることぞや（正念房壁書）と云はしむるものならしめば品位といひ品格といふもの何の所にか求むべき。知慮の過ぐれたる人貴ぶべく、意志の强固なる人も亦貴ぶべけれど趣味下劣にして唯だ何事も實用の一面に向つて些の美的感想だも有せざらんか、吾等は未だ以て歎美すべき人格といふ能はざるなり。趣味の向上は確かに品格養成の要件たり。

肉感と趣味

此の趣味に高下の差あり、其の肉感と相伴ふものは下劣にして肉感以上に美を鑑賞する所に其の人格の高きを見る。觸覺の美を愛するものは未だ以て趣味の高きものと云ふべからず、觸覺の上に味覺あり、唯だ食ふを以て足れりとせずして美的鑑賞を加ふ。世にいふ食道樂なるもの之れなり。觸味二覺は低級官能に屬して肉感を離るゝ能はざるが故に、其の趣味を以て人格を左

◎文藝と修養

右するには尚ほ足らざるものあれど其の上に嗅覺あり、梅花の馥郁たるを愛し、一炷の香に心神を爽にす、我が國古來香道なるものあり、薫香を以て娯樂とし、戰陣に臨むの武士、名香を頭髪に薫じて死出の思ひ出となしたりと傳ふ。嗅覺美は稍〻高尚なれど未だ以て視聽二覺の高級なるには如かず。聽覺に訴ふるものに音樂あり、視覺に訴ふるものに繪畫あり、或る時は流水の潺湲たるに似たる音樂を耳にするの時、神咿々たるが如く、或る時は虫聲の韻標緲として我あるを忘れ。現實を理想化したる花鳥風月に會し、自然を淨化し萬象を美化したる名手の筆致に接するの時、塵寰を超脫するを覺ゆ。音樂は有聲の美術にして繪畫は無聲の美術たり、此の有聲無聲を兼ると直に心より心に傳ふるものを文藝の趣味とす。繪畫の現はす所は空間の狀態に限らるれど詩歌は能く時間を現はし、

袖ひぢてむすびし水の氷れるを
　春たつけふの風やとくらん

といひ、繪畫の現す所は一目の及ぶ限りにて、或は東、或は西に曇るかと思へば晴るゝ如き時間と運動とは之れを詩歌文章に待たざるべからず。

淡路島はるかに見つる浮雲も
　すまの關やにしぐれ來にけり　（家隆）

黑雲翻墨未遮山　白雨跳珠亂入船　卷地風來忽吹散　望湖樓下水如天　（東坡）

の如きは繪畫に於て現し難しとす。文藝は一切美術に亙たるべき資質を有するものにして人心秘奥の美的鑑賞より出で、細に入りては、

落ちさまに水こぼしけり花椿　（芭蕉）
白露をこぼさぬ萩のうなりかな　（同）

と見、其の大をいふては

吹き飛ばす石は淺間の野分かな　（芭蕉）
危礁亂立大濤間、決皆西南不見山　（山陽）

と歌ひ、人生の悲哀を美化しては

十年踪跡厭紅塵　功業無成白髮新　夢裏不知身是客　覺來惟有影隨身

わすれめや花たちばなを玉にぬき
　袖にほはせし人のむかしを　（村田春海）

蜻蛉釣けふはどこまで行きしやら　（千代）

文藝と誠實

と吟ずるの類、現實以外に吾等を慰むるものあり。蓋し文藝の美は人心秘奥の靈光より迸り出て趣味殊に深きものにして、香川景樹は、

古の歌の調も情も整へるは、他の義あるにあらず。ひとへに誠實より出づればなり。誠實より爲れる歌はやがて天地の調にして空ふく風のものにつきて其の聲を爲すが如く、あたる物として其の調を得ざることなし。

同情と文藝

といひて誠實の文藝に必要なるを說き、「俳諧寂栞」には

俳諧は物を憐むの事を要領とす。物を憐むとは艸木の霜にあひ、鳥獸の寒暑に苦むなり、されば常に臥したる乞食に向ひても、またなしと思ふ念起らば一句に結ぶこと難し、不便と思ふ心は則ち風雅の一句なり。

と同情の要を示し、隨園詩話には「胸境超絶相對溫雅ならば一字を識らずとも眞詩人なり」といふ。文藝は或る意味に於ける人格の發露なり。

人格と文藝

去年今夜侍淸涼　秋思詩篇獨斷腸　恩賜御衣今猶在　捧持日々拜餘香

の一絕は以て菅公の人格を髣髴せしめ、

幾踏危機志未窮　欲征蠻國作奇功　圖南鵬翼何時奮　久待扶搖萬里風

の二十八字は能く伊達政宗の性格を活躍せしめ、

夕涼みよくぞ男に生れける

の一句に豪宕なる其角の面目を窺ひ、

此の世をば御暇乞と線香の
　烟と共にハイ左樣なら

の三十一文字に飄逸なる十返舍一九の氣風を見るべきにあらずや。文藝に趣味を有するはやがて其の品性を高尙ならしむるの所以にして、其の趣味の深淺は偶ま以て其の人格を品騭するの一標準たり。さればとて吾等は一切の人を詩人たらしめ、文學者たらしめんとするにはあらず、自ら之れを作るは專門の技倆を要すべければ、他の作品を鑑賞するに於ては、猶ほ自ら奏でざる

忘我と文藝

も他の音樂を聽いて我が心耳を樂しましめ、自ら描かざるも他の繪畫を見て、忘我の境に入り得べきが如く、何人も文藝の美を享受し得べし。

美術の德は塵俗の境を超越して心神をして清淨無垢ならしむるにあり。此の趣味を解せざるものは胸境常に齷齪として些の餘裕なけれど、此の趣味を解するものは紛々擾々の中尙ほ超脫の一境あり。兩陣相交るの中、徐ろに一矢を番へて「衣の館は綻びにけり」といへる源義家が優雅なるに對して「年を經し糸のみだれの苦しさに」と應せし安部貞任も亦武辨一片の人にあらず。

古武士の風格

一族蒼皇都門を逃れんとして其の先を爭ふに、己れは靜かに俊成卿の門を叩きて一首の歌を遺せし平忠度の心胸、敵箭雨の如き間に一枝の梅花を簪に挿せし梶源太が風流。出陣に際して「かへらじとかねて思へば梓弓」の一首を如意輪堂の扉に題せし小楠公の意氣、「限りあれば吹かねど花は散るものを心短かき春の山風」と詠じて死を決せる蒲生氏鄕の膽勇は我が武士道の精華として傳稱せらるゝ所にして、古昔デメトリアス王のローデスを攻むるの時、畫家プロトジキヂス獨り市外の畫室にありて軍隊の喧囂を耳にせざる如し、王の訝り問ふに對し平然として王の伐つ所はローデス人にありて美術にあらざるべしといへる一話は藝術家の爲めに氣を吐く萬丈なるものなり。

五　自然と修養

自然の光景

人爲の文藝に於て吾等が多大の趣味を感ずるは其の能く自然を傳ふるにあり、今、此の人爲の媒介を離れて直に自然の美に對せんか、吾等は詩人の如く能く謳ふ能はざれど胸境又眞詩人と相距る遠からざるの域に入らん、吾等は曇きに實在の風光を示して單に理眼を以て之れを見ずして情の色彩を以て之れを鑑賞すべきをいへり。實にや人の世の穢れに染まざる自然の光景は虛僞なく虛飾なく其の眞面目を吾等の前に露出して赤裸々たり露堂々たり赤裸々たる所に眞趣あり、露堂々たる所に妙味存す。風は樹頭を過ぎりて自らなる音樂を奏し、雲は山巓を去來して自然の畫趣を示し、心なくして笑む野邊の艸、思ひなくして鳴く小田の蛙、或は爛たる天上の星、或は燦たる地上の

◉修養法

自然を友にす

花、皆な吾等に不盡の趣味を養はしむ。世にも樂しきは風月を友とすることなり、

しかも風雅に於けるもの造化にしたがひて四時を友とす、見る處花にあらずといふことなし、思ふ所、月にあらずといふことなし、像ち花にあらざる時は夷狄にひとし、心、花にあらざる時は鳥獸に類す、夷狄を出で鳥獸を離れて造化にしたがひ造化にかへれとなり、（芭蕉）

自然と倫理

造化に從ひて四時を友とす。これ實に芭蕉が正風の眼を開けるの根底たり。

ラスキンは

人若し孤寂にして語るべき友なきの時は、彼れは四圍の自然と不言に語らざるを得ず、戀を路傍の花に語り、行く雲に我が不遇を訴へん。

と、人はかくして胸中鬱勃たる不平を慰め、天地と同化して嫉妬あり排擠あり憎惡あり爭擾ある人生を忘るゝを得む。若し夫れ知足安分、「雜煮食はぬ身には聞かせまいとは云はぬ鶯の聲も快く聞き、夜着持たぬ家には射すまいともいはぬ依估最負のない窓もる月を眺めいたらんには心胸常に平安なるものあらむ。

自然は至公至平にして然も規律あり節制あり、嘗に吾等に不盡の趣味を與ふるのみならず。又實に眞理を顯現して吾等を教示す、釋尊は臘八の曉星に無上正等覺を成じ、靈雲は桃花に佛祖の秘奥を悟得し、香嚴は擊竹に大道を明し、ニユートンは林檎の落つるを見て引力を悟り、コロムブスは波に漂ふ浮艸に大陸の近きを知る自然觀察は亦實に知能啓發の必須要件たり。仔細に諦觀すれば道の邊に置く露だにも宇宙の靈光は宿り一草一木たりとも眞理の示現にあらざるなし。

諸君は彼の溪流の石を見ずや、個々皆な圭角あり、而して其の轉輾、流れて海岸に達するものを見よ、皆な圓滑にして些の圭角なし。

吾等は之れによりて山間にある青年の氣骨稜々たるを見、其の出でゝ都會の風波に漂はさるゝものゝ終に圓轉滑脫の才子と成り了れると同一理なるを發見せざらんや。

又見よ、諸君、微小なる石は常に溪流に促されて下流に流るゝも、巨大な

◎修養法

◎自然と修養

る巖石は巍然として其の位置を變せず、激流は却て其の石に沮まれ、打ちては返し打ちては返し終に水底の砂を穿ちて岩根に凹處を生じ之れをして却て上流に轉せしむるものあるにあらずや。これ輕薄なる小才子流の浮世の潮流に追はれて流下するに反し、大人物の固く持して動かず、自ら其の地歩を向上するに似ずや。

吾等は自然の此の狀態に於て多くの教訓を得。（講演の一節）

不言の教師

自然は吾等に趣味と教訓とを與ふ、俗務倦み來れば去て杖を郊外に曳け、其處には桃花流水窅然として去り別に天地の人間にあらざるものあらん。巍峨たる山嶽は氣宇を高邁にし、膨湃たる海洋は心地を宏濶にす、自然は實に不言の教師たるなり。

此の自然の教訓と人情の眞趣とを解すべきものを旅行とす。旅行は一面に自然の趣味あるを示すと共に他面に於て人情の迂餘曲折を教ゆ。異りたる風光に接し同じからざる世態を見るはこれ、我が見聞を廣くし我が經驗を豐にする所以なり古來宗教信者の巡禮が文運開拓に偉大の力ありしは何人も知る所にして養蠶の法の歐洲に傳はりしは天主教師の支那より携へ歸りしにありといひ、我が國諸種の產業が入唐入宋の僧によりて將來せられしは史の證する所、德川時代にありて伊勢參宮善光寺詣等の宗教的旅行が地方人士の智識發達に貢獻する所多かりしは疑ふべからざるの事實なり。交通は文明の母、旅行は智識交換の媒 ラボックの人生の快樂にはテニソンの「予は予が見聞したる所のものゝ一部分なりと」いへるを引用して、

旅行の利益

予は屢〻考察しぬ、今日の世界の吾等に與へたる大利益、大幸福は其の旅行の容易となりし一事より大なるは莫かるべし。

といひぬ。貝原益軒が岐蘇路記の序に

いにしへ人、一日の勝に遊べば一日の神仙となるといへれば、わが愚かなる心ののけがれも、浮世の塵も日頃經て佳境を過ぎ行くほどに忘れぬ。生きて堯舜の仁にあひて嶺南の遊をなすことを得たりと、東坡がいへる如く、大君の御めぐみによりて、太平の世に生れ、此樂を得るといとめでたし、遊は其の一時のながめのみかは、身を終るまで折々に其所〳〵のありさま

◎修養法

◎自然と修養

を思ひやれば、又目のあたり見る心地して長き思ひ出とぞなる。と、自然の美を享受する能はざるものは禍なる哉。彼等は嫉妬排擠に充つる虚世に沒頭して此の偉大の天地を知らず。旅行の快を解せざるものは幸少き哉、彼等は井中の蛙見に安んじて獨り自ら高しとし人生亦他の趣味あるを知らず。は試に許六が旅の賦一篇を誦じ見よ、人情の迂餘曲折此の中に盡くされたるを想ふ

旅は風雅の花。風雅は過客の魂。西行宗祇の見殘しは。皆俳諧の情なり我翁。白川の田植歌を聞初。奥羽の間をめぐり。高館の夏草に。兵共が夢を驚かし。あつみ山の夕涼には。吹浦を詠め。佐渡に横たふ天の川に。初秋の秋をしぼろ。それより蛤の二見を渡りて。七百三十餘程を吟ず。曾良が落髪の力量を感じて。一鉢の飯を分ケて。風流を盡さるひと日芭蕉庵をたゝき。繪の雜談に及ぶ時。予に旅十體の繪をかゝせて。讃じて何某が求めに應ず。其風雅にたより。俗語をあつめ狂賦五段となす。あなかしこ奥の細道。草枕の類にはあらず。旅店のさま。上段に書院床 劍菱のすかし。火のなき火燵にやぐらかけて。門口の入湯桶。かたふけて居たり。底に小砂のさはるは夜べの殘りもいぶかし。出女のたて鳴は。春秋をしらず。根太板數は落て。隅々まで壘とかす。天井煤は。

雨もりにきはづき。鉄行灯はくらく。紙はわらんべの心といふ事に燃たり。鍋釜。草鞋賣にせがまれ。やうやう枕をかたぶけ。心よき嫁入ばなは。馬さしの聲に夢を破る。出立は七つといひふくめたるに。旅人も亭主もよく寐て。夜のあけてふためくつらもにくし。

大名の寐間にもれたる寒哉

道づれの上をいはじ。船頭の胸つくしをとり。駄籠廻しをたゝき。馬さしとつかみ合。一饅の跡にさがるをれめまはし。鶏のなかぬに。つれの男を起し。燈灯とぼして。夜道を行を手柄とし。入湯の一番に入たがるは何の爲ぞや。つはの枯葉に雨のはら〳〵といふ前に。

世話やきの友にあきたる旅の宿。といふ句も。此情にかなへり。

海道の賣物に。餅酒のなき所もなし。磨針峠の餅をくはれば。未來燄王の前にてからきめを見るといへり。寒天にも冷素麺をすゝむるは。逢坂の茶屋。饅頭のほら〳〵と見へたるは。見付の臺也、卵子の賣ぬきは。木曾の旅。はな紙は竹にはさみ。錢の看板は筒をかけたり。蕎麥の田樂は。何ものゝ喰けるぞ。

乘かけに春の密柑やうつの山

舟川の上。馬駕籠の情。しばし〳〵かぞへがたし。五月の大水も。かり僧の手形に出入。おのが草の戸は流れど。首だけの借錢を納して。しばらく息をつぐものは。島田金谷の賊なり。水の淺深を何攻づとこたへたるは。大きなる酒落也。天龍の

◎修養法

中の瀬は。馬人足を空にまとふ。乘人は股だけ入て荷を肩にかけて待。あがるものは。頂れ支度して舟端に立。且那が錨をかたれたるは。渡し場の情也。馬士駕籠昇は。輕重に日月を送り。一盃の酒に。浩然の氣をやしなふ。一生を潔々瓢々とすまして。雲介の號を蒙り炎暑の日も。甚冬のあしだも。棰の木の下に眠て。蟻の都に到。終に飲啖を座數につかす。汁かけて出す馬士の食と作られ。小便は一とせの名殘も暮て。世にある人々のとぶく月日を。出替の季と定めけるは。世をやすうをくる人にも似たり。

出女も出かはり顔や年の暮

流涕漂泊の上にこそ。あはれなるためしはおほけれ。獨坊主には宿をかし錢。同じ所に二夜はとめず五月雨の朝。爨の夕暮に。情ふかきあるじは。長持くさき布子かして。ぬれたる物を燒火にあぶる。あるは三復荒神といふ物にしがみ付て。しばらく足を休れど。極めの札場より追おろされて。却てのらぬ前より股をすくめ。兩方の手に杖を携て。あゆむべしとも見へず。人間病死の到來は。時も所もまたず。醫療のたすけうとく。懶中のふり藥はやう〳〵急病を防ぐ。巡礼飛脚の旅は。路頭に倒れ臥片目なる肝煎に迫たてられ。老僧の慈みにて門下に入。おとろへかさなり。終に黄泉の下に趣くかれて何國の土とならん。終をしらず。犬走の土中にこめて年の齡。衣類の楔機を小札にしるされて何國のいかなる人と。い

ふ名もしらずなり行也。岡部の辻堂の笠に。經文をよみて。同行の別を惜み。隅田川の念佛を尊て。我子の古墳にのぼる。今來古往の人。旅懷の情を盡して。風雅の腸をさらす。能因は白川の歌をよみて二たびみちのくにおもむき。不二部島の二句を求めて。すみやはに故郷に歸るものは貞室老人なる東海道の一ずじもし。らぬ人の風雅おぼつかなしといはれし翁の聲耳の底にとゞまる。

今の旅行は昔に同じからねど、乘り合ひの汽車の中の火を借る烟草の挨拶にも人情の面白きを感じ、隣り合せの退屈話にも人の心の奥は知らるゝにあらずや。殊に旅行が吾等の品性に及ぼす偉大なるものは獨立の精神と克己の氣象とを養ふにあり。家にありては父母兄弟を力として賴他の念去り難けれど一たび家門を出れば自己の事は自己之れを處理するの外、何人も之れを助けず、自己の行爲は自己其の責に任ずるの外、亦他に代るものなく。形影相伴ふて獨立獨行せざるべからず。家にありては心のまゝに起居し行動せしものも、他人の家に宿りては思ふに任せず。雨降る夕、風吹く日も定めあればには住着なくとも咏あしからず、荒き海も旅なれば止めんやうなし、蝕えたる腹行かざるを得ず、喰しき山も、渇したる口には一掬の水にも甘露の美あり

て、此に吾等は獨立と克己との教訓を受く、旅行の修養に資する所蓋し少なからず。

六　社交と修養

人の世に處するや孤立自存を許さず。必ずや他と交り相助け相補ふ所なかるべからず。此の相助け相補ふ中に人生の眞趣あり、人は此の社交場裡に在りて初めて、「人」を解し自己靜處の得力をして應用無礙ならしむ。大慧普覺禪師いふ、

閙中の得力

平昔、心を靜處に留るは正に閙中に用んことを要すればなり、若し閙中に力を得ずんば却て曾て靜中に住て工夫を做さゞるに似る一般なり、

と、寂靜裏に於ける工夫は之れを社交場裏の閙中に用て初めて功あるなり。「坐禪せば四條五條の橋の上、往き來の人を深山木に見る」の修養あつて世に處して過誤なく人に交りて失態なかるべきか。人々性情を異にし、個々稟質を同うせず、之に接し之に對する頗る困難なるが如きも、我、之に接するに至誠を以てし之れに對するに同情を以てせんか、脈々相通ずる心裏の奥底、彼此相感じ、我他相通ずるものなからんや。これ其の異るものを棄てゝ同じきものを取るの法なり。異るものを棄てゝ同じきものなるが故に相通ぜざるとなし、これを外にして豈社交の秘義あり秘訣あらんや。我れ至誠を以てす、而して彼れ之れに感ぜざるは我が至誠の足らざるなり、我れ、同情を以てす而して他の之れに動かざるは我が同情の足らざるなり、感じ易きの人あり感じ難きの人あり、能く其の性情を看取し、短を補ひ、長を助けて以て其の社交を圓滑にす。予之れを劍客長谷川小四郎氏に聽く、鹿島神宮藏する所の一書能く劍道の秘奥を悉くすと、其の書にいふ、

社交の秘義

劍道と社交

來即迎、去則送、對則和、二五五十、二八十、一九十、以是可和、察虛實、識陰伏、大絕方所、細入微塵、殺活在機、變化應時、臨事莫動心矣、

と、人に接するの道亦此に多大の敎訓を得るにあらずや。來れば迎へ、去れば送り、對すれば和す、對者五なれば我れ五を以て之れに應じ、對者二なれ

◎社交と修養

ば我れ八を以て對す、彼れに餘れるあれば以て我が短を補ひ、彼れに足らざるあれば我が長を以て之れを助く、かくて社交に於て遺憾なかるべきか。盧實を察し陰伏を識る、要は我が至誠を以て彼れを動かすに至て止むの覺悟あらば春風一陣堅氷も亦融く、

西郷隆盛云ふ、

事、大小となく正直を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ゆべからず。人多くは事の差支ゆる時に臨みてや、詐略を用ゐて一旦其の差支を通せば時宜次第工夫の出來る樣に思惟すれども、策略の煩ひ必ず生じ、事、竟に敗るゝに至るべし。正道を以て之れを行へば目前には迂遠に似たるものゝあれども、先きに至れば却て早きものあり

と、又いふ、

人を籠絡して陰に事を謀る者は、よし其の事を成し得るとも慧眼を以て之れを見れば醜狀まことに著し、人に推すに公平至誠を以てせよ、公平ならざれば英雄の心は決して之れを攬られざるなり、

と人心收攬の秘訣も亦此の至誠にあり。彼れ又人材採用の法を述べて

人材を採用するに當り、君子小人の辨、若し酷に過ぐれば却て爭を引起す。開闢以來世上一般十に七八は皆な是れ小人なり。故に能く小人の情を察し、其の長所を取り、之を小職に用ゐ、其の材藝を盡さしむるを可とす。東湖先生曾て曰のらく小人程才藝ありて用便なれば之を用ゐざる能はず、さりとて長官に置て重職を授くれは必ず邦家を覆すに至るべし、

と、萬物自ら功あり、當に用と處とを異にすべし。人々自ら長あり、之れを用ふるに處を以てすれば愚者も亦一得の存するあり。我れ他に對しては赤心を人の腹中に推す、自らは其の至誠の到らざるや否やを思ふ。之れ自ら肅む所以として又人に接するの道なり。

唯だ人物鑒識に於て人の短は見易きの短を以て人を品隲し見難きの長を逸するが故に自尊毀他の念、此に生じ、社交の圓滑を傷く、三浦梅園、曾て之を戒めていふ。

◎修養法

西施愛江、嬪婦棄鏡といへり。西施は昔の美人なり、江に臨み自の影のうちるを愛す。嬪母は惡女なり、我が影を憎みて終に鏡を棄つ。我身と人と

を見るに、われより勝れるもの、我よりおとれる者あり、我より劣れるものは見やすかるべし、われよりまされるものは見がたし、蟷螂の臂をはりて車に向ふは、自からのちからをはからざればなり、高雄の文覺、西行がふるまひをきゝて、かたはらいたく思ひ、その法師來らばしたゝかに打つべしなどつね〳〵罵りけるに、或とき西行高雄に至りけるに、文覺これをむかへてける文覺が弟子など定めて、例の荒氣、よも唯事にてはあらじと思ひけるに、さはなくて、むかしよりしれる人に逢ひたる如く、こと〳〵しき色代して、遠く送りて別れける、弟子等不審におもひ、其事を文覺にとへば、いやとよ西行は我にうたるべき者にあらず、動もすれば我をこそ打つべき氣色あれと云ひしとかや、されば、人此所に暗くして、みづからまされる人の上にたゝんとす、或は其及ばざる事を知といへども、及ばずとすることを忌み憚りて、その人の過をたづねてそしりしり、我能をかぞへてかざりほこり、尚甚しきは怨みそねみ、はては害心を起すなり、人各聖人にあらざれば、其非を見付けていはんには、誰かあやまちなかるべき、譬へば刀は紙をきり、揚枝をけづり、

梨柿の皮を剝くが如き、一切日用の事にもちひんには、小刀には遙におとりぬべし、さらばとて、敵にのぞみ、戰をいどむにあたりて、小刀何の用にかたつべき、小刀のよき所あり刀のよき所あり。刀のなす所、小刀のなす所。小刀の用にたゝずと雖ども、其一體を論ずるに、小刀は刀と同じく論ずべき物にあらず、ひとり是のみならず、不學にして學者ぶり、人に問ふ事を恥ぢ、不才にして能をてらふ、貪しくして富めるをまなび、賤くして貴ぶる、孔子常なき人をなけれども、有りとし、虛しけれども盈てりとすとのたまへり、是等の類なるべし。

其の長と云ふて短を言はず、我が度量を豁大にし他の短所弊所を容れて綽々餘裕あらしむる底の修養あつて以と其の人物の大を見るべし。彼く妄りに自ら高としして他を輕んずるの徒は獨り社交の圓滑を欠くのみならず、偶まに對しても亦須らく此の大度量を養ふて、佐久間象山が以て其の人物の偏狹因陋なるを示す。所以なり

吾等は他に對する覺悟の此の如くなるのみならず、他より受くる毀譽紛々

心隨萬境轉

◎社交と修養

人已れを譽るも己れに於て何をか加へん。若し譽れによりて自ら怠らば則ち反りて損す。人己れを毀るも己れに於て何をか損せん、若し毀によりて益せん。

といへる如く人の爲に動かされずして自を以て他を動かす、取捨我れにあり、褒貶は彼れにあり、彼れにあるものは彼れの自由に任せ、我れに取つて資すべきは取り、資すべからざるは捨つ、即ち境に應じて心を轉じ、然かも其の本性を失はざること、月落ちて天を離れざるか如くせば活殺自在、與奪縱横なるを得ん、古德曰く

心隨萬境轉　轉處實能幽
隨情認得性　無喜復無憂

と、喜なく憂なく心境常に快豁、能く萬境に應ずべし。これを社交場裡に於ける修養の根本義とす。枝末の注意は多く此の根本より出づ、彼の禮義作法の如きも社交場裡必須の要件なりと雖も、此の根本精神を欠んか、虛禮虛儀となりて却て他の惡感と招くの因たらん、

儀容　談話

もとより禮儀作法は社會の習慣にして今は全く形式に止りたるもの少からねど、其の奥底に至誠同情の伏在するものなれば、唯だ皮相に囚はれて眞實を欠き、形式に縛せられて本意を失する如きことなきことを要す、其の儀容に關する注意も亦此の根本を逸せず、儀容の端正は何人も快きものなれば吾等の人に接する亦此の心得なかるべからざるは勿論なれど、虛飾に流れ衒美に陷るは其の本義にあらず、要は他をして不快の念を抱かしめざる程度に於て足る、人々各々分あり悉く一ならしめ難し。唯だ純潔の二字、能く儀容の注意を道破し得んか、徒らに亂髮垢面、自ら豪傑の風ありとするものは未だ眞英雄の眞面目を解せざるものなり、

談話に於ても亦然り、喋々喃々辯じ去り辯じ來りて些の誠實なく同情なきは以て人を動かす所以にあらず。多辯なるは沈默なるに如かず、古人も雄辯は銀にして沈默は金なりといへど唯だ沈默のみにては社交の成立すべきにあらねば、吾等は句々誠實の心を離れず言々同情の念を失はず、相對し相語り、

彼れの言を容れ、我が意を徹し、習ふべきは習ひ、教ゆべきは教へ、両々相和し彼我一致の境に入らんか、談話の快楽終に盡きざるものあらん、社交場裡に於ける修養の所詮は誠實と同情との外に求むべからざるなり。

七　修養の道程

上來縷述する所によりて修養に關する理論と方法とは略ぼ之れを知り得たれど修養の能事は之れを以て了れるにはあらず、其の知る所を行ひ、其の得たる所を實にするに於て初めて其の目的を貫徹すべきものなれば、吾等は直に其の實行に着手せざるべからず。されど不幸にして吾等が現實の心は偶ま心裏の奥底に潜める第一性の靈光を認めて眞我の指導に從はんとすれど、煩惱の繋縛は長へに斷えず、情欲の執着はなか〳〵に脫し難くして、一たび輝き出せし心靈の光も何時かは其の影を隱くし漸く導き出されし良智の力も不

識の間に埋沒せられて復た黒闇々の中に葬らるゝこと少からず。此の時に當りて奮勵一番其の隱れんとするの光を止め、沒せんとするの力を捉へて當面に保留し、念々去らず刻々消えざらしむるの習慣を造れば、曾ては容易に改め難かりし惡習も今は自由に改められ、先きには行ひ難しと思惟したりし事も、後には易々たる茶飯の行事たるに至らん、之れを修養の三道程とし、其の初めに飜然として善に向ふを發心といひ、其の發心をして定着せしむるを決心と名け、此の決心を持續するものを相續心といふ、發心ありて決心なきものゝ修養は雲烟過眼の如く唯だ善に向ひたりといふのみにて流れに結ぶ水沫の泡にも似て消え易く、決心ありて相續心なきものは如何に其の覺悟殊勝なりとも一日二日と經ぬ中に次第に薄らぎて終には思はざる昔と異らざるに至りて折角の發心も其の功なきに終らん。

修養の要は此の發心を定着せしめ、此の決心を持續せしめ、終に習慣は第二の天性となりて任運滔々手に隨て思ふ所を行ひ、其の思ふ所をして道と相違背せしめず、

◎修養法

水鳥の行くもかへるもあとたへて
　されども道は忘れざりけり

の境に入らざるべからず、盖し習慣は之れを作るの初めに於ては非常に困難なるが如しと雖も一たび行はんか、一回は一回毎に容易となりては終には殆んど無意識に行ひ得るに至る。ベイン曾て習慣力養成の法を說て、

習慣養成に關するベインの注意

一　新らしき習慣を作り若くは舊き習慣を破らんとせば、吾等は鞏固なる意志を以て其の事に從ばざるべからず。

二　習慣が汝の生活法に固着するまでは之に反對なる事情を生せしめざることに注意せざるべからず。

初めて事を爲すの難きは大石を動かすが如し、されど一たび行へば石は急坂を轉ずるが如し。博物學者ビユホンは自ら朝起の習慣を作らんと欲し、僕に命じて毎朝己れを呼び起さしむることゝし其の報酬として金拾錢を與ふるを約せり、僕は大に喜び翌朝ビユホンを呼び起さんとして大聲に呼びしにビユホン華胥の鄉にあり、僕已むことを得ずして止む。ビユホン眼覺めて僕を叱し翌朝は手を以て搖り起すべきを命ず。僕、命の如く手を以て動かせばビユホン夢現の中にありて之を叱し手を擧げて僕を打つ。僕又已むなくして止むビユホン更に翌朝よりは如何に抵抗するも引き起せと命ず、僕此に於て屈せず、手を以て強て之れを起すこと十餘日終に僕を待たずして目覺むるに至りぬと。習慣は第二の天性にして其の力天性に十倍す。孔子の七十にして心の欲する所に從て矩を踰へざるに至れるものも亦此の道德的修練の結果なり。修養の語義を一面より云へば確かに此の善美なる習慣を造るに在り。

ビユホンの力行

善美の習慣

吾等は先づ其の發心して善と思惟したるの事業は直に之れを決心して實行するの習慣を造らざるべからず。

山陽の逸行

昔山陽の日本外史を著すや、親友雲華院大含に伴はれて其の稿を易行院法海に示す。時に法海、机に向て書を讀む、大含の山陽を介するに及び徐ろに山陽に向ていふ、「聞く藝德久太郎なる者、京に在て酒を飲むで三年、其の親を省みず、而して忠臣楠氏の傳を作る、足下豈是れ乎。忠臣は必ず孝

子の門に求む、今不孝人にして忠臣を傳す、楠氏知るあらば必らず之れを屑とせざらん、老衲も亦此の不孝人を見ることを好まず」と、還た書を讀むこと始の如し。山陽背に汗して出でて曰く、「眞に一宗の學頭なり」と、大含直に山陽にいふ「君素と陽明の學を講ず、知行合一、是れ今の時にあらざるなからんや」と山陽即行李を整へて郷に歸り母を省す。

これ直に其の善とする所を實行せるものなり、吾等も亦此の覺悟を以て善と見ば之れを行ふに躊躇する所なきを要す、既に之れを行ふ、其の行ふ所をして我が生活に定着せしむるに至らざるべからず。

禁酒の習慣

大酒呑が二日酔で頭が痛むものであるからもう酒を廢めやうといふのは發心だが、廢めるかと思ふと二日酔には向ひ酒が好いなぞといふて初める、これは決心がないからだ、こゝを一つ奮發して一旦悪いと知つた以上は何うしても飲まぬと決めた。決めたことは決めたが一日か二日で三日目位になると「我が禁酒破れ衣となりにけり、さあつゐでくれさあさしてくれ」となつては何にもならぬ。これは相續心がないので、此の相續心さへ確かで

一年も二年も五年も十年も續けると今度は飲みたくなくなる（講談の一節）これ修養其の功を奏したるものにあらずや。

吾等が養ふべき習慣は頗る多々にして、修養の各方面は皆な之れによりて功を奏すべきなれば此に列擧し難しと雖も、其の主要なるもの二三を擧げて修養の箴とせんか、

誠實の習慣

一　事を爲すに誠實なるの習慣を作れ。誠實とは自ら欺かず、他を欺かざるの謂なり。常に自ら欺きて一時を糊塗するの習慣を作れば良心爲めに痲痺して終には唯だ糊塗を事として誠實を缺くの人たるに至り。他を欺きて目前を瞞過するの習慣を作れば永遠の洞察を缺き信用すべからざる人となり了らん。事毎に誠實なれ、然らば汝も亦他に喙せられざるに至らんか、勝海舟、曾て西郷南洲を評していふ「西郷に及ぶこと の出來ないのは其の大膽識と大誠意とにあるのだ。おれの一言を信じて、たつた一人で江戸城に乘り込む、おれだつて事に處して多少の權謀も用ひないこともないが、唯だ此の西郷の至誠は、おれをして相

海舟、南洲を評す

欺くに忍びざらしめた。この時に際して小簿淺略を事とするのは却て此の人の爲めに腹を見すかされるばかりかと思つて、おれも至誠を以て之に應じたから江戸城受渡しも、あの通り立談の間に濟んだのさ」

と、これ誠實の玉成したるものにあらずや。

小事を忽にせざるの習慣

一

小事はやがて大事なり、千丈の堤防も螻蟻の一穴に崩る小事と侮つて怠慢ならば缺陷其の中に生じて補綴し難きに至らん、小事を忽にせざるの習慣之れ吾等が念々忘るべからざるの事なり、大事は多く到らずして小事は日々に來る、此の日々に來るものによりて多く到らざるの大事に當るの修練を積む。これ能く其の大事に處する猶ほ小事に處するが如きの餘裕を得る所以にあらずや。英國の或る商人、曾て事務員採用に關する經驗を語りていふ予が事務員を檢せんとするや先づ之れを一室に呼び其の入るを見るや直に、汝は不適任なり去れ」と大喝す、皆な憤然として扉を開放し去る、唯だ一人の靜かに扉を閉ぢて出でたるものあり、予は其の男を採用せしに果して事務整理に能ある秀才なりしと、扉の開閉は以て其の人平生の心掛を見るに足る。

一

規律を守るの習慣を作れ、規律は守るの初めに於て困難なれど、守りて慣ひとなるに至りては守らざるを以て却て苦痛を爲すに至り、事毎に一糸紊れず秩序整然として誤りなきに庶幾からん、ヘートの「路傍の富」には好個の例を擧げていふ「曾て貧兒より立身して大富豪となりし人あり、一青年、如何にして其の富を致したるかを問ふ、其の人答へていふ「予の父は仕事を終るまで決して遊ばざることと金錢を貯ふるまで決して消費せざることとを敎へたり、予は幼より此の訓誡を守り一日の中僅に三十分にして爲し終るの仕事なりとも、之れを爲さずんば遊ぶことを敢てせざりき、かくて予は今日の富を致せり」と、其の守るべきを守りて違はず、これ其の大を成す所以なり。

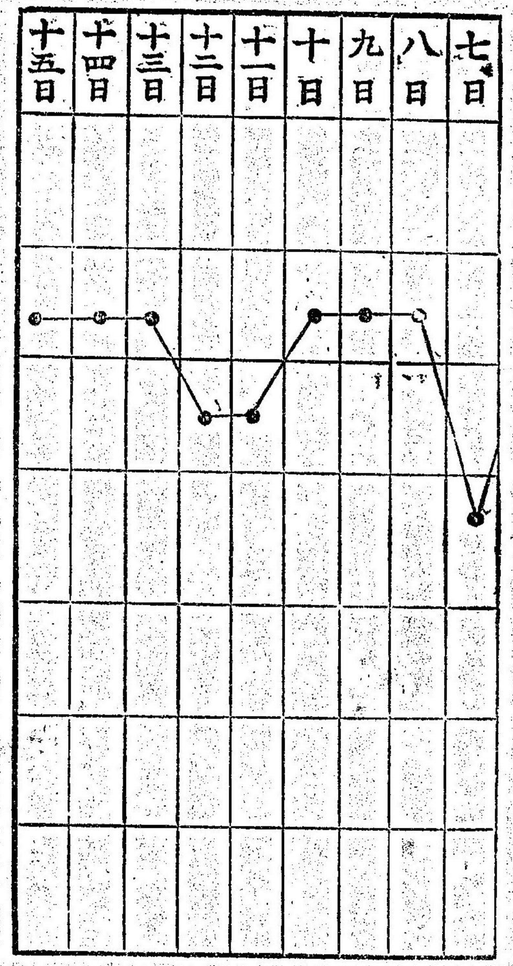
人生の幸不幸を定むるの道唯だ一、そは善き習慣を作り來れるか、惡き習

◎修養の道程

慣を作り來れるかにあり。一切の道德は此の習慣によりて其の實行を容易ならしむ、習慣は力なり。吾等は如何にもして善き習慣を養はざるべからず、如何にして此の習慣を養ひ得べきか。曾て一學生の自ら朝起の習慣を作らんとて表を作りて反省の資とせるものあり、そは自ら目覺めんとするの時刻を定め、日々之れを檢して變動なきを求め、終に豫定の一線長へに高低なきに至らしめたるなり。

朝起きの圖表

日／時	五時	六時	七時	八時	九時	十時	十一時
一日		豫定時刻					
二日							
三日							
四日							
五日							
六日							



時間の習慣を作るに尚ほ一法あり、そは先づ勉强時間と休養時間と睡眠時間とを定め、そを誤らさらんが爲めに日々左の如き表を製して反省の資に供することなり。

◎修養法

◎修養の道程

日／時間数	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一
一日										勉強
										休養
										睡眠
二日										勉強
										休養
										睡眠
三日										勉強
										休養
										睡眠
四日										勉強
										休養

日	睡眠	勉強	休養	睡眠
五日				

効過格

フランクリンの十三目

彼の雲谷禪師か袁了凡に與へて日々其の効過を檢せしめし効過格は其の目十一、

一 孝順　二 和睦　三 慈敬　四 寛下　五 勸化
六 救濟　七 交財　八 奢儉　九 正行　十 敬神
十一 存心

にして、フランクリンか反省の料とせしもの其の目十三、

一 節制　二 沈默　三 規律　四 決斷　五 節儉
六 勤勉　七 正直　八 正義　九 中和　十 清潔
十一 靜逸　十二 節操　十三 謙遜

◎修養篇

◎修養の道程

なり、日毎に此の目に違はさりしや否やを撿し例へは之れに從ひし時は○印と付し背きし時は●印を付して●の滅して○の增すことを計るも亦一種の修養法なり、瀧鶴臺の妻は常に白糸と赤糸との巻きたるを袖中に藏し、悪事ありし時は赤糸を增し、善事ある時は白糸を增して日夜反省を怠らさりしといひ、山岡鐵太郎は年十五、自ら修身二十則を作り躬行實踐、終に大名を成すに至りしといふ。

修身二十則

一　うそいふべからず候
二　君の御恩は忘るべからず候
三　父母の御恩は忘るべからず候
四　師の御恩は忘るべからず候
五　人の御恩は忘るべからず候
六　神佛並に長者粗末にすべからず候
七　幼者をあなどるべからず候
八　己れに心よからさることは他人に求むべからず候
九　腹を立つるは道にあらず候
十　何事も不幸を喜ふべからず候
十一　力の及ぶ限りはよき方につくすべへ候、
十二　他を顧みずして、自分のよき事ばかりすべからず候
十三　食するたびにかしよくのかんなんを思ふべしすべて草木土石にても粗末にすべからず候
十四　殊更に着物を飾り或はうはべをつくらふものは、心ににごりあるものと心得べく候
十五　禮儀を亂るべからず候
十六　何時他人に接するも、客人に接するやうに心得申すべく候
十七　己れの知らざる事は何人にてもならうべく候
十八　名利のために學問すべからず候
十九　人にはすべて能、不能あり、いちがのに人をすて、あるひは笑ふべからず候

◎修養法

二十己れの善行をはこりがほにりに知らしむべからず、すべて我心に耻ぢざるに務むべく候

嘉永庚戌正月行年十五歳の春識記

小野鐵太郎

僅に十五歳の青年にして此の則を立てゝ以て自律の箴とす。吾等も亦斯る規矩を定めて之れに依據して違はざることを努め、以て無碍自在の境地に入らざるべからず、彼の紙を裁つ者の其の初めは準木に據りて枉からざるを期したるも腕熟し技進むに至ては終に準木なきも亦枉るなきを得るに至るが如く、吾等も亦た古聖先賢の芳觸を準木とし一意之れに違はざることを計らば習慣は終に性を爲して準木なきも亦誤るなきの境に至らん。修養の道程、よし」函嶺の嶮ありとも、これ一時のみ忍んで之れを踏破せは坦々たる大道、自ら長安に達するを得ん。

第三篇　修養の模範

第一章　聖賢の言行

一　釋迦の言行

人物の大小を鑑識するに二個の標準あり、一は其の感化の廣狹長短にして他は其の境遇と行實との關係なり。境遇に動かされて何等自由の行動なく之れを大ならしむるも境遇にして小ならしむるも亦境遇なるものは、よし其の人の事業光彩陸離たるものあるも、そは境遇の力にして其の人の力にあらず。たとひ其の行蹟の傳ふるに足るものなしと雖も、能く境遇を制しで自家立脚の境地を拓きたらんは又以て大とするに足るものあり。釋尊は中印度迦毘羅曙卒都の城主ストダナの子なり。幼にして顯悟、父其の出家を憂へて三時の宮殿を造り、春は花咲く庭の面、夏は涼しき瑠璃の宮、冬となれば金殿玉樓

◎釋迦の言行

の樂み、人生亦何の不安なく缺陷なきの家庭に長じ、五天竺に隱れなき美人耶輸陀羅を妃とし三千の宮女之れに從ひ翠帳紅閨の中、誰が出でゝ山林孤獨の生を望まんや。しかも釋尊は此の歡樂の中に在りて出離の志禁じ難く、求道の心止み難くして終に四海に等しき富を棄て、萬民の主たる國王の位を棄て、美しき妻を棄て、愛らしき子を棄てゝ三衣一鉢の乞食生活に入りしもの其の志の堅くして毫も境遇の左右する所となりたまはざりしを證するにあらずや、其の父王並に王妃離別の苦を訴へて歸城を勸むるものあるや、嚴然として、

永世の苦

我は一時の離別の苦を濟はんより永世の離別の苦を斷たんと欲するなり。

と歸りたまはず、王舍城を過ぎたまふの時、國王頻婆沙羅が、若し玉たらんを欲したまはゞ國を擧げて之れに臣事せんといへるに對しても、

我が志は生老病死の四苦を斷じて無上解說を得るにあり、豈に世間の五欲の爲めに家を出でんや。王よ、希くは正法を以て汝が國を治め、民庶を虐ぐるなかれ

意志の強固

といひ袂を拂つて自ら苦行の人となりたまひし如きこれ豈に薄志弱行の徒の企及し得べきことならんや。古來の英雄多く身を貧賤の境に起す、貧賤より起る、事頗る難きが如しと雖も、現下の不如意は能く人をして奮勵の念を起さしめ、又他に我を誘惑するものあるなし。今、釋尊、身は誘惑多き高貴の家に生れ障碍多き家庭の中に成長し、能く此の境遇に制せらるゝなくして志す所を行ふ、其の意志の強固なる以て人格の大なるを見るべきにあらずや。昨は綾羅錦繡を纏ひし紅顏の美少年、今は顏色憔悴、形容枯槁の乞食僧となりて苦行怠ることなく、其の去て佛陀迦耶に赴き菩提樹下に靜坐したまふ時の如き心裡の奮鬪實に言語に絕したるものあるなり。

降魔の相

此の端坐默念の間には、諸種の煩惱妄想は勢ひを逞ふして釋尊の心中に跳梁し、其の靜思を妨げ、學道を傷けんとした、其の狀は恰も百千億万無量の惡魔、或は猛獅の如く、或は暴虎の如く、或は鼓を鳴らし、或は劍を執りて退轉せしめんとしたか、釋尊は寂然として動きたまはず、魔王はますゝ怒りて大疾風を起して大石を飛ばし、大雨を降し、雷霆を轟かして之

◎釋尊の言行

を嚇やかしたれど少しも動じたまはず、心内に跋扈する凡百の魔障を相手として幾多の健闘を續けたまひ、却て魔軍をして大に怯ましめられた、しかし思ふ所を達せては止まぬ魔王は更に欲染、悦人、可愛の三魔女をして各、美裝を凝らして惑はしめんとし、耶輸陀羅の姿に似せて秋波一晗、艶言喃々として力を盡したが、釋尊は一顧だも與へたまはず、獨り靜觀を續けたまひしに、衆魔も今はかなはじと、其の影を隱くし、臘月八日の曉星天に閃くの時、蓮華の花の開くか如く豁然として、こゝに無上正等覺を成じたまひ、三界はこれ我が有なり。其の中の衆生は皆な我が子なりと覺知して終に求道の目的を達せられました（講讀の一節）

これを釋尊の降魔とす、魔とは心内の煩惱なり、塵勞拂ひ盡くして性天日月朗かに、妄想其の影を隱くして心海波自ら靜。

爾來、横説竪説五十年、席煖かなるに暇あらず東西に遊行し、南北に巡化し、機に隨て法を説き、病に應じて藥を與へ、或は高遠の哲理を示して時の學者を服し、或は卑近の譬喩を設けて無智の徒を化し、慈心懇切、渴仰せざるものなし、左に四五の金言を擧げて其の一斑を髣髴せしめん。

悪は心より生じて反りて自ら其の身を賊ふ、鐵の垢を生じて自ら其の形を消毀するが如し。

○

水滴微なりと雖も、漸く大器に盈つべし。大悪素より大ならず、小積より成る小を輕んずるなくんば殃なきに至らん。水滴微なりと雖も、漸く大器に盈つべし。大福素より大ならず。纖々より積む、小善を輕んずるなくんば無量の福を得ん。

○

悪を行ずれば悪を得る事、苦種を種うるが如く、善を習へば善を得る事、又甜種を種うるが如し。悪は自ら罪を受け、善は自ら福を受く。各自ら熟して他に之れに代るものならず。

○

屋を蔽ふに密ならざれば雨ふれば則ち漏る、攝意を行ぜられば淫佚忽ち穿

ち至る。

○

欲の網を以て自ら蔽ひ、愛の蓋を以て自ら覆ひ、自ら我が身を獄に縛するは魚の網に入るが如し。

愚者と雖も自ら其の愚を知らば遂に善慧を得るに至るべし、愚人にして自ら智と稱せば、之れを愚中の甚しきものとす。

○

十千の敵に對し一夫にして之れに勝つともまだ自らに勝ち忍ぶの上なるに若かず。

○

怨は怨を以て終に息むことを得べからず、唯だ忍のみ能く怨を息む、これを如來の法と名く。

以上は主として法句經によりて抄出せるものにして眞に九牛の一毛に過ぎずと雖も一句能く人の肺腑に浸徹するものあり、其の訓話に至ては叮嚀懇切能

く無智の儕輩を訓化す要を摘んで其の二三を語らん。

昔、長者あり新に婦を迎へ互に愛敬しぬ。夫、一日、婦に命じて厨の中に入り酒を取り來らしむ。婦往て甕を開き、自ら我が影の甕中にあるを見て、更に女人ありと思ひ、大に悲りて夫に語りて卿先きに婦を娶りて此の甕中に藏し、復た我れを迎ふ、何ぞ無情なると、夫、爲めに厨に入りて甕を開き、又己が影を見て却りて妻を悲り、其の男子を癡せるを疑ひ、互に其の見る所を實として相爭ふて止まず、一梵士あり、其の爭ひを聞き往て之れを視て又我が影を見、長者が他の梵士を藏し、僞り爭ふて我を試みるものとし恨み知りぬ。又一比丘尼あり、又往て其の所由を質し、甕を開きて他の比丘尼あるを見て悲り去る、須臾にして道人あり、又往て之れを見て其の影に過ぎざるを知り、喟然として嘆ずらく、世人愚惑の甚しき何ぞ此に至ると、夫婦を喚びて曰く、我が汝等の爲めに甕の中の人を出さんと、一大石を執りて甕を壞り其の實にあるなきを示しぬ。

佛は之れを以て喩としたまへり、三界の人、皆な假身を知らずして實に我

◎釋迦の昔行

ありとし貪欲瞋恚を起し邪見を抱き、日夜惡業を造り流轉の生死絕えざるは恰も是の如しと。（雜譬喻經）

人生の苦惱

好喩能く人をして得入する所あらしむ。其の人生の苦惱を形容して、佛、波斯匿大王に告げたまはく、此に人あり、曠野に於て惡象の逐ふ所となり、怖れ走れども依るべきものなし。偶ま一の空井あり。傍に樹根あるを見、根を尋ねて下り身を井中に潛む、時に黑白の二鼠あり、互に樹根を嚙み、又井の四邊より四の毒蛇ありて其の人を螫さんとし、下には毒龍あり口を開きて呑まんとす、心に龍蛇を恐れ、又樹の根の斷えんとするを恐るれども、奈何ともすべきやうなし。更に樹根に蜂窠あり、樹搖きて蜂散じ、下りて此の人を螫し、野火は來りて此の樹を燒く。唯だ蜂に蜜あり日に五滴を人の口中に落す、此の人蜜を得て憂怖苦惱を忘れ、其の心中五滴の蜜あるのみ、大王よ此の人の少味と貪りて此の苦惱を忘るゝは憐れむべきにあらずや。大王よ、此の人はこれ餘人にあらず、衆生の世樂に貪著して大なる患を思はざるに喩へたるなり、曠野は無明長夜の曠遠になる喩ふ、象は無常なり、井は生死なり。嶮岸の樹の根は命なり、この鼠は晝夜なり、樹の根を嚙むは念と生滅なり、四毒蛇は地水火風の四大なり、蜂は邪念なり、火は老病なり、五滴の蜜は色、聲、香、味、觸の五欲なり、毒龍は死に喩ふ（譬喩經）

譬喩二則

といへるは、高遠の哲理を詩人も及ばざる想像を以て示せるものにあらずや。

其の

昔、人あり、友の家に至り其の米を搗けるを見て窃かに偸んでこれを含み友の出で來りて共に語らんとするに當り、米の口中に滿つるが故に之れに答ふる能はず、されど友に羞ぢて歩て吐かず、友、怪んで手を以て之れを模し其の口腫れたりとし醫を招きて之れを治せしむ、醫曰くこの病最も重し、刀を以て決するにあらずんば治すべからなと刀を執て其の口を決破す、米、口中より出で、其の事露はれぬ、世の人も亦此の如し、諸の惡作を爲し、之れを覆ふて敢て懺悔せず、之れを覆はんとして却て他の惡を作る三塗に沈む、（百喩經）

◎悪業の昔行

◎釋迦の苦行

ありとし貪欲瞋恚を起し邪見を抱き、日夜惡業を造り流轉の生死絕えざるは恰も是の如しと。（雜譬喩經）

人生の苦惱

好喩能く人をして得入する所あらしむ。其の人生の苦惱を形容して、

佛、波斯匿大王に告げたまはく、此に人あり、曠野に於て惡象の逐ふ所となり、怖れ走れども依るべきものなし。偶ま一の空井あり。傍に樹根あるを見、根を尋ねて下り身を井中に潛む、時に黑白の二鼠あり、互に樹根を噛み、又井の四邊より四の毒蛇ありて其の人を螫さんとし、下には毒龍あり口を開きて呑まんとす、心に龍蛇を恐れ、又樹の根の斷えんとするを恐るれども、奈何ともすべきやうなし。更に樹根に蜂窠あり、樹搖きて蜂散じ、下りて此の人を螫し、野火は來りて此の樹を燒く。唯だ蜂に蜜あり日に五滴を人の口中に落す、此の人蜜を得て憂怖苦惱を忘れ、其の心中五滿の蜜あるのみ、大王よ此の人の少味と貪りて此の苦惱を忘るゝは憐れむべきにあらずや。大王よ、此の人はこれ餘人にあらず、衆生の世樂に貪著して大なる患を思はざるに喩へたるなり、曠野は無明長夜の曠遠になる喩ふ、

象は無常なり、井は生死なり。峻岸の樹の根は命なり、この鼠は晝夜なり、樹の根を噛むは念と生滅なり、四毒蛇は地水火風の四大なり、蜂は邪念なり、火は老病なり、五滴の密は色、聲、香、味、觸の五欲なり、毒龍は死に喩ふ（譬喩經）

といへるは、高遠の哲理を詩人も及ばざる想像を以て示せるものにあらずや。

其の

昔、人あり、友の家に至り其の米を擣けるを見て窃かに偸んでこれを含み友の出で來りて共に語らんとするに當り、米の口中に滿つるが故に之れに答ふる能はず、されど友に羞ぢて歩て吐かず、友、怪んで手を以て之れを模し其の口腫れたりとし醫を招きて之れを治せしむ、醫曰くこの病最も重し、刀を以て決するにあらずんば治すべからなと刀を執て其の口を決破す、米、口中より出で、其の事露はれぬ、世の人も亦此の如し、諸の惡作を爲し、之れを覆はんとして却て他の惡を作る三塗に沈む、（百喩經）

◎提婆の苦行

◎釋迦の言行

釋尊の入滅

昔、獼猴あり、一把の豆を持て誤りて其の一粒を落す、乃ち手中の豆を捨てゝ其の一を求めんとし、未だ之れを行ざるに先きに捨てし所のもの悉く雞鴨の食ふ所となれりと、凡夫も亦此の如し、一戒を毀りて悔ゆる能はず、悔ひざるを以ての故に放逸滋蔓し却て一切の戒を捨つ、（同上）

釋尊は實に此の如くにし、法を說きたまひ、終生倦むなく、八十の高齡を以て尼連禪河の畔、娑羅双樹の陰に寂然として逝きたまひぬ。其の最後に當りても諄々敎へて止まず、遺弟を戒めて

汝等比丘、常に一心に出道を勤求すべし、一切世間動不動の法は皆なこれ敗壞不安の相なり。汝等、且く語ることを止めよ、時將に過んとす、我滅度せんとす、是れ我が最後の敎誨とする所なり

と、眞にこれ大河の緩流して海に入るの概あり、時に西曆紀元前四百七十九年、二月十五日夜半。釋尊、涅槃の雲に隱れたまひて三千年、遺法遠く今日に傳はりて信徒五億萬、寥然たる宇內の大宗敎たり。其の感化の長くして其の敎域の廣き其て以の人格の大なるを知るに足らずや。一代の言行は悉く吾

等が修養の活模範にして八萬四千の法門、五千七百の經卷、は皆なこれ吾等が修養の好資料たり。蓋し佛敎は普く人心の三方面に亘りて哲學的には轉迷開悟の道を說く宇宙と人生とを達觀して其の眞理を求めしめ、宗敎的には離苦得樂を示して現實の苦を脫して理想の樂境に安置せしめんとし、倫理的には止惡修善の法を敎へて躬行實踐せしめ、信仰と理解と實行とによりて釋迦の證入したると同一狀態に入らしめんとするものにして、釋迦一代の敎化は之れを開示悟入せしむるにありたれば、何れの點も皆な以て吾等を啓發し督勵するにあらざるなけれど、到底之れを此の一小冊子に示すこと難ければ此には略することゝなしぬ。

二　基督の言行

◎基督の言行

身をバレステンの邊鄙に起し、敎を布くこと僅かに三星霜、不幸反抗者の手に罹りて十字架上の露と消え壯年にして世を去りしイエス、キリストの靈化

は、今に至りて二千年、常に新らしき教訓を世界の人民に與え、深く人心の秘奥に浸徹す。彼れ抑も何の靈力ありて然るぞ。

クリストの幼時

イエスは名、キリストは沃膏者（あぶらそそがれしもの）と云へる尊稱なり、幼年の言行は後代文献の徴すべきものなく、使徒の手になれりと傳ふる共觀四福書も（馬可、馬太、路加、約翰）共に之に關しては敎ふる所なし唯路加書（三ノ四一）にイエス十二歳にして逾越祭の時父母に拉れられてエルサレムに上り父母に離れて聖殿にあること三日、法敎師の間にありて問答をなし其の奇才に駭かれつゝもありきと傳ふる說話あるのみ。

イエスが愛なる神の自覺に至る迄の半生は其の故郷ナザレに在りて父の業を繼ぎ靜平なる生涯を送りたるものにして、其の敎育と云へるものも時代の風習により普通の讀書を敎會の法敎師より授けられしに過ぎずして、且つ彼の希臘の文化、若くは猶太の煩瑣なる哲學の如きは曾て之れを知らず、舊約の聖經も波伯來の語を以て之を讀みしにあらで、同代の俗語たるアラミアン語譯に由りたりしものに似たり。

さらばナザレの一木工が子、イエスをしてキリストたる自覺に到達せしめしものは何ぞ、曰く舊約の聖經と、ナザレの風光と是なり。

舊約の聖經たるモーゼの五書及び預言者の書若くは數多の經外の古典は彼れが胸裡に入り來りて天來の妙音を傳へ、イザヤ其の他の預言者が勇猛なる叱咤、律法の森嚴なる敎訓は曾て幾多の預言者を鼓舞せしにも倍して此天才に敬神的精神を振作感化せしめ、殊にイエスの生れたるナザレの地は、ガリラヤの南、エスドレロン平原の南部、一帶の山嶺の平らなる所、葡萄、無花果の實りよく、民貧しからぬ山間の小邑にして、四方を繞れる山邱より眼を放てば西カーメル、メギドの山々聳え、追憶多きシエケムの峯、タボルの邱と相逢ふ所、ヨルダンの谷、ペライアの平原目も遙に、北サッエットの群山相追ふて海に陷り、カイファの入江を見つべし。此に生れしイエスの國人は輕快舒暢の氣風に富み、髮長き乙女は麗容今に至る迄依然として處女マリヤの遺陽を有つ、イエスが精神の裡に生れ立でし天國の搖籃は實にかゝる天然の惠かる地なりしなり、斯る自然の懷にありて、彼伯來古代の熱烈なる舊約に

育てられしイエスが、三十にして初めて其の聲を擧げて神の子たるを世に告けしは偶然の奇蹟にはあらざるなり。

此の天然の風光と、宗教的思想とに養はれし彼れは、古來イスラエル國民の神たりしエホバは渾て是れ愛なる神たりとの信仰を生みぬ、蓋しモーセ、ダビテの胸に浸み入りし神はシナイの山に電はためき、雷どよもす恐ろしき神にして、天の威靈は遷民に福し、異教に禍し、約束の國にイスラエル王國を立てしめ、聖都に犧牲を棒げて之を和むる神なりしも、一度天才イエスの胸裡に入りては神は一種慈愛の測るべからざる泉となれり。神はやかて慈悲の存在なり、この心やがて神我と偕に在りとの信仰に達し、神は父にして我は神の子、神は我と一なりと云へる觀喜を生じぬ。

彼れの神はかのモーセ等が信せし如く昊天の上高く寶坐にある有形のものにもあらず、神殿の裡に祭祀するそれにもあらず、神は無形の心靈にして唯我曹が心中にのみ之を求むべしとせり、神を拜するには敢て神殿を要せず、儀式を須たず、衷心至誠の念を以てすれば一視同仁に福趾を下す愛の神なり

き。

イエスが新らしき神の愛を衷心に認めし頃、ユダヤの野より出でし浸禮（バプテスマ）のヨハ子、天國は邇けり悔改めよと叫び毛裘を着け蝗を食ひ、野蜂の蜜を吮ひつゝヨルダンの谷に來りぬ。この時民衆はこの預言者が今や斧は樹の根におかれる、凡て實を結ばざる樹は斫られて火中に投せらるべしと云へる警告に駭き爭ふてヨルダンの谿水に身を淨めて來るべき審判に火の坑を免れんとしたり、ガリラヤに在りしイエスも又人々のなす所に從がひ其弟子と共にヨハ子の許に至りて浸禮を受け、即ち野に行きて惡魔の誘惑と戰ふ。請ふ其の狀を語うしめよ。

寂漠たる曠野に坐し食はざるを四十晝夜、飢え勞れしイエスの坐するを見、惡魔現はれて之を試みぬ。傳說の教ふる所に由れば惡魔初めに汝若し神の子ならば何ぞ此の石を變じて麵麭となし以て飢を愈さゞると、イエス聖經の文を引いて人はは麵麭のみにて生くるものに非ずと答へて之を斥く、惡魔イエスをエルサレム聖殿の絕頂に拉し、告げて曰く、試に汝此處より飛び降れ、

◎基督の言行

神其使に命じて、汝を手にて支え、其足を石に觸れざらしむべきなりと、イエス聖經の語を引いて神を試むる可からずと叱す。惡魔三たびイエスを山の頂に拉して世界の榮華を示し、汝若し俯して余を拜せば、この榮華は悉て汝の有たらんと、イエス此の語を聽き怒つて答へけらく、サタンよ退け、聖經は我曹に敎えて主たる神を拜し唯だ之にのみ事ふべしと云へるに非ずやと、天下萬人の惑ふ處のものは、令名なり、榮譽なり、黃金なり、世界の富貴なり、古來英傑の退くる能はざる所のものの實に是れ而已、この傳說の謂ふ所はイエスが心內の奮鬪、正義の勝利、やがては彼が偉大なる人格の完成に非ずして何ぞや、

ナザレにありて其の萌芽を生出せしイエスの信仰はヨハネの浸禮と惡魔の試練とによりて終に大なる高調に達しぬ愛なる神の我曹と偕にある歡喜は絕大なる力を孕み、溢れて彼が行爲に現はるゝに至りき。

イエス三年の傳道は其境甚だ廣からず蘆荻水を搖かし款乃ゆるやかに滿帆の風を孕み、夕ざりくれば漁夫の夢穩やかなるガリラヤの湖の邊、南はエルサレム、東はデカポリス、北はツロ、シドン、カイザリヤヒリプの間に留まりぬ。山上の垂訓又この湖畔に起りしはこゝに初めて天來の光明に接しぬ。

イエスが一代の敎訓は隨處に行はれしものにして一定せる敎條を以て敎化せしものに非ず、多くの古聖の其れと同じく機に應じ類に隨がひ、其所化の境遇性質に適合せる訓誡を與へたるなり、されど其の根本の思想は一なり曰く神の愛に由りて祝福せられたるものは神の御旨を顯はさんが爲めに又他人を愛し、己を呪咀ふ者の爲めに祈り、神の己を愛し給ふ如く他を愛すべしと云ふにあり、イエス一代の傳道はこの一個の源泉より流れ出し水のみ、時としては灘となり淵となり瀨となるとあるも畢竟は這の一源泉に歸するを得るなり。曾てイエス、パリサイの一敎師がモーセの律法の中何れか最も大なるかを問へるに答えて、全心全力を盡して神を敬愛す可し、是れ第一にして最も大なる誡律なり、第二も又之れに同じ、卽ち己を愛する如くに他を愛すべし、一切の律法と預言者の敎へし所とは皆この二大律に基けりと謂ひき。愛の源

◎聖賢の言行

泉より流れ出でしイエスの說教は發して山上の垂訓となりき。これ實に後代基督敎傳道の發足點にして其の倫理と修養は全く此に盡きたり。

福なる哉心の貧き者や、それ天國は彼等の有たればなり。福なる哉悲む者や、それ彼等は慰められればなり。柔和なる者や、それ彼等地を嗣べければなり。福なる哉、義に飢え渴く者や、それ彼等は飢え足らさるべければなり。福なる哉、憐深き者や、それ彼等は憐まるべければなり。福なる哉、和平を事とする者や、それ彼等は神の子と稱へらるべければなり。福なる哉、義の爲に責めらるゝ者や、それ天國は彼等の有たればなり。福なる哉我爲に罵られ詐はらるゝ者や、それ天の報大なればなり。汝等は地の鹽、世の光なり、兄弟を怒る勿れ、之れと和げ、もし汝の右の目と右の手汝を躓さば切りて、之れを棄てよ、惡人に敵する勿れ、人汝の右頰を打たば、他の頰をも彼に向けよ、下衣を取らんと欲して訴ふる者には其の上衣をも與へよ。乞ふ者に與て、借らんとする者を卻けざれ。己の敵を愛し汝を攻むる者の爲に祈れ、是れ汝が天父

の子たらんが爲の故なり。人の前に義を爲すこと勿れ、右の手の爲す施與を左の手に知らしめず、戸を閉ぢて隱れたる汝の父に向ひて、天に在す我等の父よ、願くば御名を崇めさせ給へ、御國を臨らせ給へ。爾旨の天に於ける如く地にも成らせ給へ。我等の日用の糧を今日も與へ給へ、我等が負債ある者を赦せし如く我等の負債をも赦し玉へ、我等を試煉に試み玉ふ勿れ、惡より我等を拯出し給へ。國と權と榮は窮なく爾の有たればなり、アメンと祈れ。汝地上の寶を蓄ふことなく、蠹くはず、銹ず、腐らず竊まれざる天の寶を蓄へよ、天の寶のある所汝の心又あるべければなり。身の燈は眼なり、眼あしからば身は暗かるべし、若し汝の中にある光暗からば、その闇は如何ばかりぞや。

汝何を食ひ、飮み、着んと念ひ煩ふ勿れ、命は食物より優り、身は着物より優れるには非ずや、空の鳥、野の百合をも神はかく裝はせ給ふ、況て汝を裝ひ給はざるべきぞ。

汝先づ神の國と其義とを求めよ、さらば此等のものは皆汝に加へられん。